

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅸ

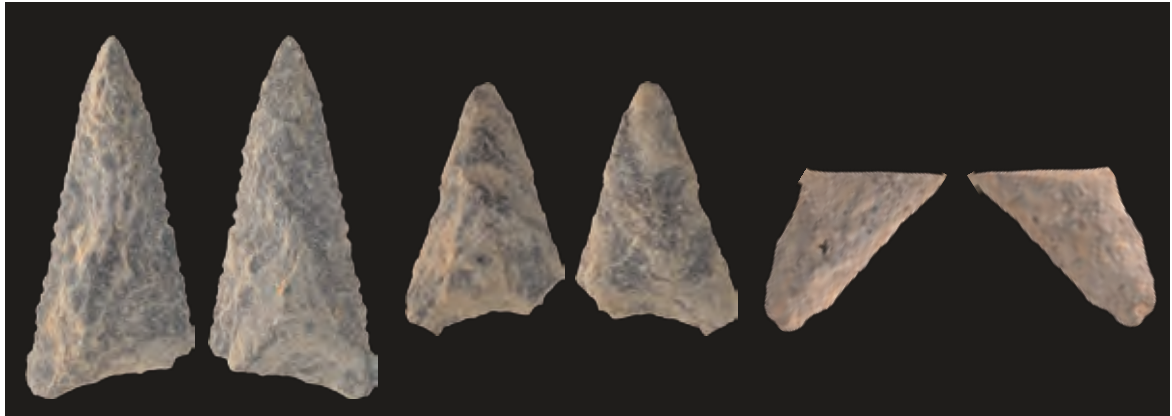
— 第14次発掘調査報告 —

2026年3月

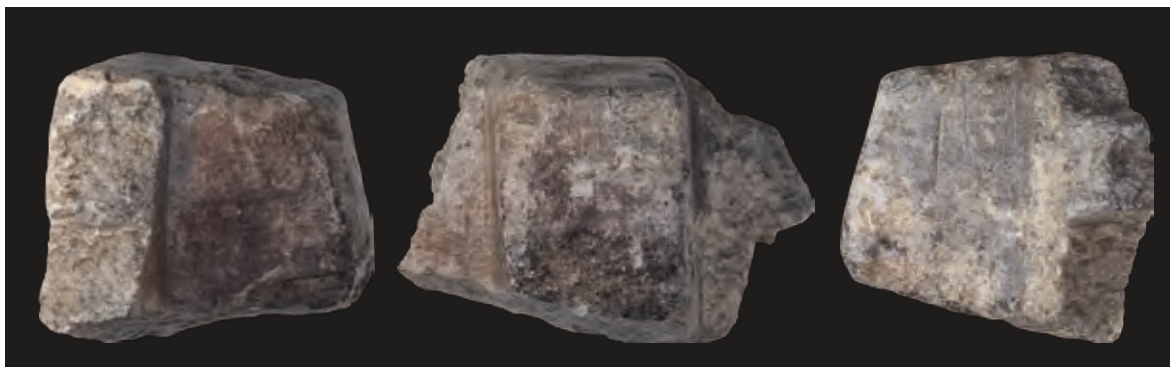
愛媛県越智郡上島町教育委員会



20トレンチ1号遺構（鹹水溜め）



Ⅱ区出土石鏃



13トレンチ出土滑石製石鍋

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅸ

— 第14次発掘調査報告 —

2026年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

序 文

上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のはほぼ中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されています。瀬戸内海国立公園区域内にあり、穏やかな海と多島美からなる景観が町の大きな魅力です。2004（平成16）年10月1日に、弓削町、生名村、岩城村、魚島村の4町村が合併し、現在の上島町が誕生しました。2024（令和6）年10月1日に上島町は合併20周年を迎え、それぞれの島々が育んだ歴史文化を大切に保存継承しながら、町民が未来に向かって新たな上島町を創造することが期待されています。

上島町が位置する瀬戸内海は、日本最大の内海です。瀬戸（狭門）とは、陸と陸の間にはさまって海の狭くなった海峡を意味しています。「海峡の内側の海」である瀬戸内海は、古くから日本列島の交通の大動脈として多くの人・モノが往来し、文化や経済の発展を支えてきました。そのことによって生まれた歴史文化が地名・地形・景観・遺跡・石造物・社寺・文献・慣行・伝承などといった様々なかたちで瀬戸内海の島々に遺されています。

上島町では、平成25年度から上島町内遺跡発掘調査等事業として、文化庁、愛媛県教育委員会のご指導ご助言を賜りながら、製塩遺跡の発掘調査、弓削島荘遺跡の総合調査および埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査を進めて参りました。宮ノ浦（みやんな）遺跡の発掘調査は、愛媛大学法文学部考古学研究室の皆様のご尽力を賜り継続して実施してきました。

本報告書は、令和6年度に実施された宮ノ浦遺跡の第14次発掘調査の成果を中心に報告するものです。近年は、隆帯文土器や刺突文土器、撚糸文土器、無文土器を含む縄文時代草創期末～早期の遺物包含層、人骨が良好に遺存した中世初頭の土坑墓の調査などが行われてきました。これまで蓄積してきた調査成果は、当時の人びとの生活や景観などを現代に生き生きとよみがえらせます。

このように宮ノ浦遺跡は、郷土の歴史を理解し復元するために必要な多くの情報をもった貴重な遺跡です。本報告書が文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究、郷土史研究の基礎資料として広く活用され、本遺跡が地域資源として生かされることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査事業を実施するにあたり、懇切なるご指導ご助言を賜りました諸先生方、そして、多大なるご理解とご協力を賜りました関係機関および地元住民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和8年3月

愛媛県上島町教育委員会

教育長 田 坂 敏

序 文

宮ノ浦遺跡については、2023年度に実施した第13次調査をもって、設定した発掘調査の目的を概ね達成し、一応の区切りを迎えたものと考えていた。しかしながら、調査許可を得た区域内にはなお未調査地が残されていた。調査区西端部は宅地に隣接し、これまで発掘調査の際には調査用テントの設置場所として利用してきたため、本格的な発掘の機会を得ることなく今日に至っていたのである。

そこで、本遺跡の調査を締めくくるためにも未調査地の状況を確認すべきであると考え、2024年度夏期に4本のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。その結果、20トレンチにおいて製塩に関連する、鹹水溜めの機能が想定される土坑を検出することができた。この遺構は古代から中世にかけて形成された整地層の下位で確認されたものであり、過去に4トレンチで検出した同種の遺構とは様相を異にしている。また、出土遺物の量は必ずしも多くはなかったものの、これまでの調査成果を再確認させる資料が得られたほか、従来の知見を補完する重要な資料も含まれていた。なかでも13トレンチから出土した滑石製石鍋片は、本遺跡における初めての出土例であり、九州地域との交流関係を考える上で重要な資料である。

このように、今回の調査成果は第13次調査までに蓄積された成果に新たな厚みを加えるものであった。当初は補足的な確認調査として着手したものであったが、結果として本遺跡の理解をさらに深める成果を得ることができたことに安堵するとともに、発掘調査の重要性を改めて認識した次第である。

さて、夏期調査を終え、しばらく時をおいて宮ノ浦遺跡を訪れると、草木の繁茂は著しく、かつて調査区であった場所も瞬く間に自然へと覆われつつあった。その変化は単なる植生の問題ではなく、地域を支えてきた人々の営みの変化とも無関係ではないように思われる。かつて漁業によって活況を呈した昭和期の宮ノ浦集落については前報告書の総括でも触れたところであるが、今日の宮ノ浦集落の姿はさらに大きく変わりつつある。

考古学の役割は過去を明らかにすることにある。しかし同時に、その成果を記録し、後世へ伝えることもまた重要な使命である。本書を含めた一連の報告書が宮ノ浦遺跡の調査成果を将来へ継承する一助となるとともに、この地で営まれてきた人々の暮らしや歴史に関心を寄せる契機となれば幸いである。

令和8年3月

愛媛大学考古学研究室
村 上 恭 通

例 言

1. 本書は、愛媛県越智郡上島町弓削佐島に所在する宮ノ浦遺跡の第14次発掘調査の報告書である。
本調査は、国庫補助事業「上島町内遺跡発掘調査等事業」として実施した。
2. 遺跡における発掘・記録作業は第2章2に記載した参加者が行った。
3. 遺物の整理作業は次のメンバーが行った。
福本佳織、益田千遥、荒岡香梨子〈以上、愛媛大学大学院修士課程〉、ブズレン・サミ〈愛媛大学研究生〉、伴井嘉正、江本晃季、朝日岳斗、植田知也、藤原碧生、安孫子彩葉、宇野文乃、河端隆佑、高橋乙華〈以上、愛媛大学学部生〉
4. 図のトレースは福本佳織、益田千遥、ブズレン・サミ、江本晃季、植田知也、藤原碧生、朝日岳斗が担当した。
5. 遺物の写真撮影は笹田朋孝（愛媛大学）、安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）が行った。
6. 文責については各担当者の氏名を文末に記した。
7. 第4章と第5章については、各執筆者の意向を尊重し、一部の表現や体裁を統一していない。
8. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に依拠した。
9. 本文中における緯度・経度は、過年度報告書との整合性を考慮し、従来用いてきた国土地理院の地図情報データに基づいている。
10. 本文中における標高は、これまでに刊行された宮ノ浦遺跡の発掘調査報告書との整合を保つため、令和7年4月1日の標高成果改定以前の値に基づいて記載している。
11. 図中の方位の北は図2・図5・図6・図17・図26・図33・図35・図36・図37を除き、すべて真北である。
12. 本文中の遺物番号と巻末写真図版の遺物番号は対応している。
13. トレンチごとに遺構番号を付している。
14. 本報告書の作成に当たり、次の方々よりご指導、ご協力いただいた。
青木聡志（愛媛県埋蔵文化財センター）、稲本悠一（兵庫県教育委員会）、及川 穰（中央大学）、遠部 慎（久万高原町教育委員会）、金田明大（三重大学）、小林謙一（中央大学）、故柴田昌兎（愛媛大学）、柴田 亮（岡山大学）、神野 恵（奈良文化財研究所）、鈴木康之（県立広島大学）、長井謙治（愛知学院大学）、藤本史子（大手前大学）、松尾秀昭（佐世保市教育委員会）、村上 昇（豊橋市教育委員会）、山崎純男、綿貫俊一（大分県立埋蔵文化財センター）
15. 本書の編集は笹田朋孝の監修のもと有馬啓介、益田千遥、福本佳織が行った。

宮ノ浦遺跡Ⅸ

－第14次発掘調査報告－

目 次

序 文

例 言

	頁
第1章 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
3. 周辺の遺跡	5
第2章 調査の経緯・体制・経過	9
1. 調査の経緯と目的	9
2. 調査の体制	10
3. 調査の経過	10
第3章 発掘調査成果	13
1. 調査区の設定	13
2. 各トレンチの成果	13
(1) 13トレンチ	13
(2) 19トレンチ	35
(3) 20トレンチ	49
(4) 21トレンチ	63
第4章 考察	69
I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境（補遺）.....	69
II. 宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構について	77
III. 宮ノ浦遺跡の発掘調査と地域振興・観光振興	83
第5章 総括	85

図 版 目 次

図版 1	1. 宮ノ浦遺跡遠景（北から）	2. 20トレンチ西壁（北半分）
	2. 調査前全景（東から）	3. 20トレンチ東壁（北半分）
図版 2	1. 13トレンチ全景（東から）	4. 20トレンチ東壁（南半分）
	2. 13トレンチⅡ－2層礫群（南から）	5. 20トレンチ北壁
	3. 13トレンチ東壁	6. 20トレンチ南壁
	4. 13トレンチ南壁	7. 20トレンチ南壁（一部）
	5. 13トレンチ西壁	図版 6
	6. 13トレンチ北壁	1. 20トレンチ1号遺構（西から）
	7. 13トレンチⅣ－1層土器出土状況（東から）	2. 20トレンチ1号遺構（南から）
	8. 13トレンチⅣ－2層炭化物検出状況（東から）	3. 21トレンチ東壁
図版 3	1. 19トレンチ西壁（南半分）	4. 21トレンチ南壁
	2. 19トレンチ西壁（北半分）	5. 21トレンチ西壁
	3. 19トレンチ東壁（北半分）	6. 21トレンチ北壁
	4. 19トレンチ東壁（南半分）	7. 21トレンチ出土縄文土器（西から）
	5. 19トレンチ北壁	8. 7の写真のアップ
	6. 19トレンチ南壁	図版 7
図版 4	1. 19トレンチⅡ層上面礫群（南東から）	13トレンチ出土縄文土器、19トレンチ出土縄文土器
	2. 左の写真の一部（東から）	図版 8
	3. 19トレンチⅡ－2層出土鉄製品（南東から）	20トレンチ出土縄文土器、21トレンチ出土縄文土器、Ⅱ区出土石器
	4. 19トレンチシルト層出土製塩土器（東から）	図版 9
	5. 19トレンチⅣ－2層出土石器（東から）	13トレンチ出土弥生土器、13トレンチ出土土器
	6. 5の写真のアップ①	図版10
	7. 5の写真のアップ②	13トレンチ出土土器・陶磁器・土製品
	8. 19トレンチⅣ－2層出土土器（東から）	図版11
図版 5	1. 20トレンチ西壁（南半分）	19トレンチ出土土器・陶磁器・土製品
		図版12
		20トレンチ出土土器
		図版13
		20トレンチ出土土器・陶磁器・土製品、13トレンチ出土石鍋、19トレンチ出土鉄製品、13トレンチ出土鉄製品、19トレンチ出土銅製品
		図版14
		Ⅱ区出土製塩土器（古墳時代）、13トレンチ出土製塩土器（古代）
		図版15
		19トレンチ出土製塩土器（古代）、20トレンチ出土製塩土器（古代）

図 目 次

図1	宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図	図20	Ⅱ区19トレンチ出土脚台式製塩土器
図2	宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図	図21	Ⅱ区19トレンチ出土土器
図3	佐島遺跡分布図	図22	Ⅱ区19トレンチ出土土器・土製品
図4	Ⅱ区第14次調査地点	図23	Ⅱ区19トレンチ出土古代製塩土器
図5	Ⅱ区トレンチ配置図	図24	Ⅱ区19トレンチ出土鉄製品
図6	Ⅱ区13トレンチ平面図・土層図	図25	Ⅱ区19トレンチ出土青銅製品
図7	Ⅱ区13トレンチ出土縄文土器	図26	Ⅱ区20トレンチ平面図・土層図
図8	Ⅱ区13トレンチ出土弥生土器	図27	Ⅱ区20トレンチ出土縄文土器
図9	Ⅱ区13トレンチ出土脚台式製塩土器	図28	Ⅱ区20トレンチ出土脚台式製塩土器
図10	Ⅱ区13トレンチ出土芸予型製塩土器	図29	Ⅱ区20トレンチ出土土器1
図11	Ⅱ区13トレンチ出土土器1	図30	Ⅱ区20トレンチ出土土器2
図12	Ⅱ区13トレンチ出土土器2	図31	Ⅱ区20トレンチ出土土製品
図13	Ⅱ区13トレンチ出土土器・土製品	図32	Ⅱ区20トレンチ出土古代製塩土器
図14	Ⅱ区13トレンチ出土古代製塩土器	図33	Ⅱ区21トレンチ平面図・土層図
図15	Ⅱ区13トレンチ出土鉄製品	図34	Ⅱ区21トレンチ出土縄文土器
図16	Ⅱ区13トレンチ出土石製品	図35	宮ノ浦遺跡周辺の地形区分図〔村上・辻 2024を一部改変〕
図17	Ⅱ区19トレンチ平面図・土層図	図36	柱状図
図18	Ⅱ区19トレンチ出土縄文土器	図37	宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構
図19	Ⅱ区出土石器		

写 真 目 次

写真1 発掘調査風景

写真2 現地説明会風景

表 目 次

表1	宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構一 覧
----	-------------------------

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

宮ノ浦遺跡は、瀬戸内海西部の芸予諸島に属する上島諸島の一角、愛媛県越智郡上島町佐島の宮ノ浦海岸に立地する。遺跡の所在地は上島町弓削佐島2277番地であり、位置はおおむね北緯34度14分42～43秒、東経133度11分30～32秒付近に相当する（図1）。眼前の宮ノ浦湾の対岸には「塩の荘園」として著名な弓削島が位置する。佐島の周辺には、北東に弓削島、北西に生名島、西に岩城島・赤穂根島が所在し、これらの有人島に津波島・百貫島などの無人島を加えて上島諸島が構成される。さらに上島町は、これら上島諸島に属する島々と、魚島・高井神島などからなる魚島群島によって構成されている。

上島諸島は、広島県側の安芸・備後と愛媛県側の伊予とを結ぶ芸予諸島の一部をなす。芸予諸島は、燧灘北部、備後灘西部、安芸灘東部に無数の島々が連なる島嶼群であり、多数の瀬戸を介して複雑な海上交通網を形成してきた地域である。これらの瀬戸では潮流が速く、潮汐の影響も大きいいため、古来しばしば交通の難所とされたが、その一方で瀬戸内海東西航路および本州・四国間の南北交流を考えるうえで、きわめて重要な位置を占めてきた。

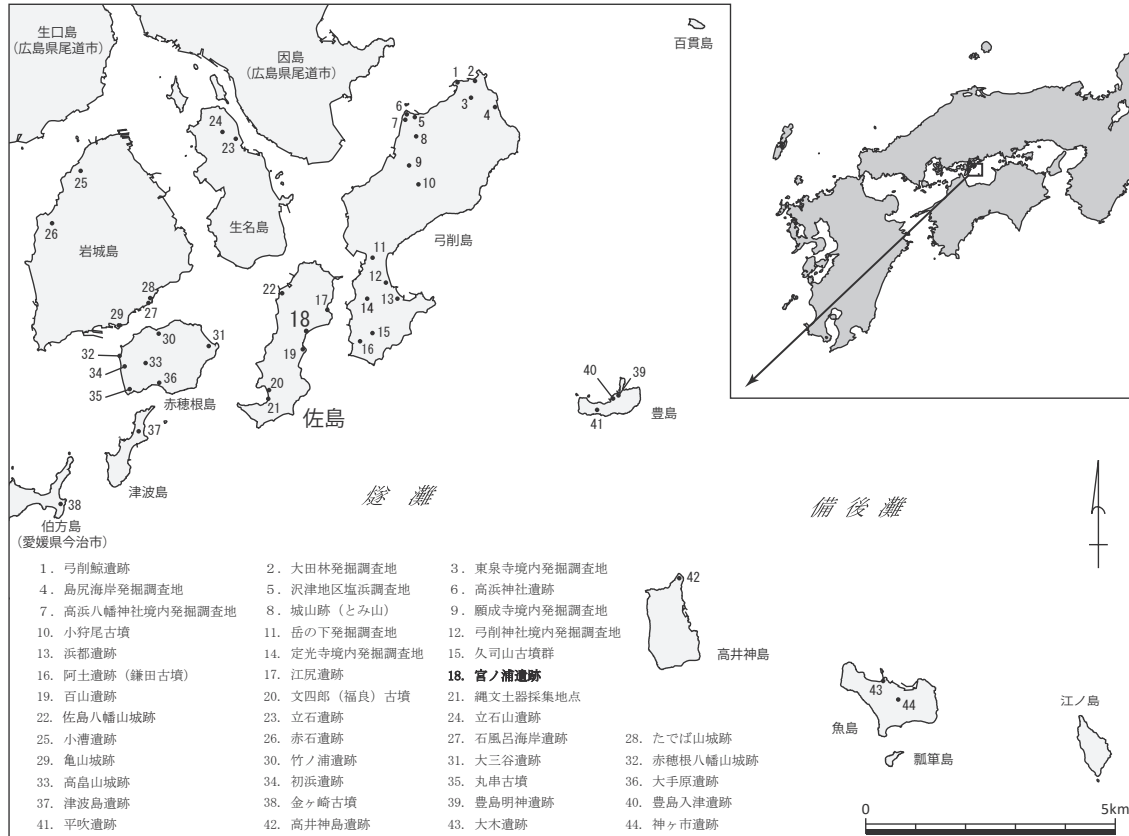


図1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 地理的環境

遺跡の所在する佐島は、弓削島の南西に位置する周囲約9.8km、面積約2.67km²の小島である。島は南北に細長く、中央部から南部にかけて丘陵・山地が連続し、横峰山（標高約119.6m）を最高所とする。このため島内には広い平野部は発達せず、居住域および生産域は主として海岸沿いの限られた低地に展開する。北西岸の佐島港背後には比較的まとまりのある平坦地が形成され、栗手・本浦地区を中心として居住地が集積する。一方、江尻などは東岸側の小規模な海岸低地に立地しており、佐島における集落立地が、港湾・入り江・浜に対応した分散的構造を有していることを示している。すなわち、佐島の集落景観は、島内の起伏に規定されつつ、海岸部の狭小な可住地に複数の集落が点在するかたちで成立している。

このような地形環境のなかで、宮ノ浦遺跡は島の東部、宮ノ浦湾に面した海岸低地に立地する（図2）。佐島東岸では、小規模で浅い湾入と波蝕崖が交互に連続しており、宮ノ浦湾はその一つにあたる。遺跡前面の海岸線は東西約400mにわたって湾曲しながら延び、これにほぼ並行するかたちで浜堤が発達する。この浜堤は、北側背後の丘陵から南へ張り出す低い舌状丘陵によって西側と東側に二分され、遺跡群もこれに対応して西側浜堤と東側浜堤に分かれる。第7次調査以降、前者をⅠ区、後者をⅡ区として区分してきた。宮ノ浦遺跡は、砂堆・浜堤・平坦面・背後低地が複合する微地形上に成立した遺跡である。

地質をみると、芸予諸島のうち少なくとも愛媛県側の越智諸島から上島諸島にかけての地域は、西南日本内帯の領家帯に属する地質帯として理解される。この地域では、花崗岩類と変成岩類が基本的な地質骨格をなし、場所によってはそれらの上を上部白亜紀の和泉層群やより新しい堆積層が

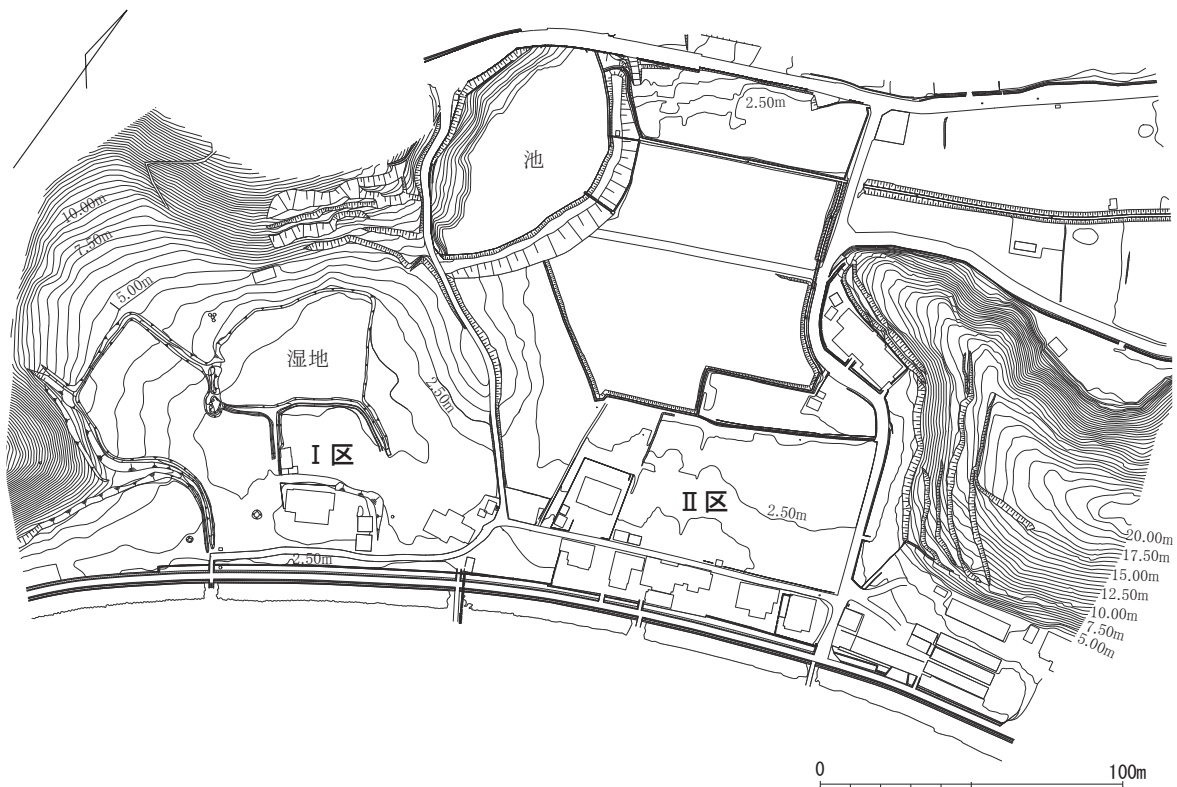


図2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図

覆っている。地形との対応も比較的明瞭であり、ホルンフェルスや細粒花崗岩は急峻な山地として残り、粗粒花崗岩は開析された緩斜面を形成し、海岸部には第四紀の海浜堆積物や沖積層からなる低地が発達する。さらに、更新世の海水準変動を経て、後氷期の海面上昇によって現在の島嶼景観が形成されたと考えられる。

このような芸予諸島の地質的枠組みのなかで、上島諸島はおおむね新期領家花崗岩類を主体とする島嶼群として位置づけられる。ただし、その地質は必ずしも一様ではない。たとえば弓削島北東部では変成岩が認められ、岩城島の積善山付近ではホルンフェルスがみられるなど、花崗岩を主体としながらも局地的には異なる岩相が分布する。したがって、上島諸島の自然環境を理解するうえでは、花崗岩質基盤を基本としつつも、変成岩類や局地的な非花崗岩質岩の存在を視野に入れる必要がある。

佐島もまた、この上島諸島の地質的特徴を共有し、領家帯に属する花崗岩主体の島として理解される。ただし、周辺島嶼の状況をふまえるならば、佐島においても局所的には花崗岩以外の岩相が存在する可能性を考慮しておく必要がある。そのうえで、宮ノ浦周辺の地形形成を考える際に重要なのは、基盤をなす花崗岩質地形の上に、沿岸部で砂堆・浜堤・後背湿地などの海浜堆積地形が形成されている点である。実際、宮ノ浦遺跡は東西にのびる二つの浜堤上に主たる立地を示し、その背後には湿地や小規模な水域を含む低地が広がっている。

本書が対象とする第14次調査は、このうちⅡ区、すなわち東側浜堤を中心に実施したものである。Ⅱ区は、浜堤上の居住・活動面と、その背後に広がる湿地・小規模水域を含む低地とが組み合わさった微地形単位のうえに形成されている。

2. 歴史的環境

旧石器時代から述べると、宮ノ浦遺跡から海岸沿いに南へ約500mの地点に、東方へ突出する小丘陵が所在し、その標高約30mの比較的平坦な丘陵上には百山遺跡が立地する。同遺跡ではサヌカイト製ナイフ形石器が採集されており、佐島における人類活動が旧石器時代にまで遡ることを示している〔長井2008〕。また、上島町域では津波島などにおいても後期旧石器時代の資料が知られており、宮ノ浦遺跡周辺を含む上島諸島一帯が、先史時代の比較的早い段階から人々の活動領域に組み込まれていたことがうかがえる。

縄文時代については、宮ノ浦遺跡Ⅱ区で草創期に遡る刺突文土器や撚糸文土器などが出土し、それに対応する時期の石鏃も確認されている〔有馬・鄭・福本編2024ほか〕。押型文土器の出土は確認されていないものの、宮ノ浦遺跡ではこれらに加えて前期～晩期の土器も出土しており、長年にわたる断続的利用が想定される。また、佐島内の複数地点でも縄文土器片の採集例が知られており、縄文時代の活動が特定の一地点に限られず、海浜部を中心として島内に広がっていた可能性が高い。

弥生時代の佐島では、現在のところ明確な遺跡は確認されておらず、宮ノ浦遺跡で土器数点が確認されているにとどまる。他方、隣接する生名島北部には、水道を見下ろす山頂に立石山遺跡が所

2. 歴史的環境

在し、中期末葉の凹線文土器や磨製蛤刃石斧が発見されている〔長井・土居1979、生名村史編纂委員会編2004〕。また、岩城島においても、積善山山頂および空久保遺跡などから凹線文土器が採集されている〔愛媛県史編さん委員会編1982、有馬編2018〕。これに対して佐島は、全体として低平であり、いわゆる高地性集落の立地に適した地形に乏しい。しかし、江尻地区では砂浜海岸背後の標高約20mの小丘陵斜面から凹線文を有する甕・壺の口縁部片が採集されており、当該期の生活域の一端を示す可能性がある。すなわち、弥生時代中期末葉の活動の場は浜堤上ではなく、むしろ海を見下ろす微高地に求められる可能性が高い。

古墳時代前期になると、上島諸島では製塩活動が本格化する。佐島では、宮ノ浦遺跡から脚台式製塩土器が多数出土するとともに製塩炉が検出されており、同遺跡は古墳時代前期を代表する製塩遺跡として位置づけられる〔有馬・八木編2016ほか〕。また、福良湾北方の丘陵上には文四郎（福良）古墳が所在し、農道工事にともなって花崗岩製箱式石棺墓が発見され、棺内から鉄刀および人骨が出土した〔弓削町役場1986、田中2014、今治市村上水軍博物館編2014〕。人骨の自然科学的年代測定の結果、3世紀中葉の年代が示されており、宮ノ浦遺跡で製塩が盛行した時期と重なる。さらに、岩城島の石風呂海岸遺跡・赤石遺跡・長江遺跡、赤穂根島の大三谷遺跡・竹ノ浦遺跡・大手原遺跡・初浜遺跡などにおいても同時期の製塩関連資料が知られており、上島諸島各地で製塩活動が広域的に営まれていたことが理解される。

古墳時代中期には、瀬戸内各地の島嶼に祭祀的性格を有する遺跡が認められるようになり、上島町では魚島の大木遺跡がその代表例である〔長井1975〕。同遺跡では、コップ形製塩土器、ミニチュア土器、小型仿製鏡、鉄鋌を含む鉄器類などが採集されており、海上交通や製塩活動を背景とした祭祀の存在が想定される。なおこのような製塩土器をとともう祭祀遺跡が脚台式の段階、つまり前期にまで遡ることを豊島明神遺跡の発掘調査が示している〔村上編2016〕。さらに後期になると、宮ノ浦遺跡、岩城島の石風呂海岸遺跡・船越遺跡などに再び製塩土器の出土が認められる一方、弓削島の久司山古墳群・小狩尾古墳、生名島東岸の厳島古墳など、横穴式石室を主体部とする古墳も築造される〔弓削町役場1986、生名村史編纂委員会編2004〕。しかし、現時点で佐島に後期古墳は確認されておらず、島内で完結しない、島々を包摂するような製塩活動の展開と首長墓築造のあり方を想定すべきである。

古代に入ると、宮ノ浦遺跡では奈良時代から平安時代にかけての土器・陶磁器が出土している。特にⅠ区N15グリッドでは、鍛冶滓および鍛造剥片などの鍛冶関連遺物がまとまって出土しており、そのうち1点の鍛冶滓に噛み込んだ木炭の年代測定では、779～984 cal ADの年代が得られている〔大澤・パリノ・サーヴェイ株式会社2021〕。また、第12次調査では古代の焼塩土器が多量に出土しており〔有馬・大塩編2023〕、宮ノ浦遺跡が古墳時代前期のみならず、古代においてもなお塩生産に関わる場として機能していた可能性を示す重要な資料といえる。芸予諸島から高縄半島にかけては、弓削島の浜都遺跡、多々羅製塩遺跡、馬島亀ヶ浦遺跡、糸大谷遺跡など、古代製塩土器の出土遺跡が沿岸部を中心に分布しており〔長井2008、柴田・相原編1994、谷若・楠・真鍋編1999、愛媛県埋蔵文化財センター編2017〕、宮ノ浦遺跡もまた、この海域に展開した古代製塩ネットワークの

一環として把握する必要がある。

中世に入ると、上島諸島における海との関わりは一層強まる。特に弓削島は、京都東寺領荘園として塩を年貢として納めた「塩の荘園」弓削島荘として著名である〔清水1975〕。この荘園に関する史料は「東寺百合文書」に多数含まれており、同文書群は2015年にユネスコ「世界の記憶」に登録された。また、弓削島荘遺跡は、塩浜・寺社・百貫島および周辺海域など、荘園景観・生産・信仰に関わる諸要素を良好にのこす遺跡として2021年に国史跡に指定されている。宮ノ浦遺跡においても、荘園成立期前後に属する土器・陶磁器が多量に出土しており、第9次調査では鹹水溜めの可能性が指摘される槽状遺構も確認されている〔有馬・青木編2021〕。加えて、保元3（1158）年の石清水八幡宮関係文書〔東京大学史料編纂所編1981〕によれば、佐島が生名島・岩城島などとともに石清水八幡宮宮寺領としてみえる。したがって、宮ノ浦遺跡も単なる海浜集落としてではなく、石清水八幡宮領としての荘園経営や塩生産と関係する機能を備えた拠点として理解する必要がある。

14世紀になると、東寺の荘園支配は、小早川氏・小泉氏・村上氏らの進出のなかで次第に動揺し、各島には城が築かれるようになる。佐島でも、現在八幡神社の社地となっている佐島八幡山城跡が中世城館跡として知られている。近世には佐島は今治藩領となっており、愛媛県歴史文化博物館所蔵の「今治藩領弓削島絵図」にも、佐島は上弓削・下弓削・沖ノ島などとともに今治藩領の島村として描かれており、藩政下において独立した村落単位をなしていたことが分かる。また、『国府叢書』には元禄6（1693）年に「佐島村塩田ヲ田ニ墾ク」との記録がみえ、近世前期の佐島に塩田が存在したことが確認される〔今治郷土史編さん委員会編1989〕。一方で、佐島の塩田に関する明治以降の文献は乏しい。

近代に入ると、町域の行政的再編と産業構造の変化が進行する。明治22（1889）年の町村制施行により、弓削村・岩城村・生名村が成立し、その後、魚島村が分立した。昭和28（1953）年には弓削村が町制を施行して弓削町となり、さらに平成16（2004）年10月1日、弓削町・生名村・岩城村・魚島村の4町村が合併して現在の上島町が成立した。上島諸島では塩づくりの伝統もお長く継承され、弓削島では明治期に終息したが、生名島・岩城島では昭和46（1971）年まで製塩が継続したとされる。

3. 周辺の遺跡

宮ノ浦遺跡を理解するために、島内の遺跡・遺物散布地を中心に概観する（図3）。

旧石器時代の資料としては、宮ノ浦遺跡の南方約500mに位置する百山遺跡が知られる。同遺跡は、宮ノ浦海岸背後の地形とはやや異なり、東方へ張り出す小丘陵上に立地し、標高約30mの比較的平坦な地形面を利用している。ここではサヌカイト製ナイフ形石器が採集されており〔長井2008〕、佐島における最古段階の遺跡として重要である。宮ノ浦遺跡と百山遺跡は、いずれも海に近接しつつも、前者が海浜低地、後者が小丘陵上に立地する点で対照的であり、島内における立地選択の差異を考えるうえでも注目される。

縄文時代については、宮ノ浦遺跡のⅡ区で草創期に遡る刺突文土器・撚糸文土器などが確認され、

3. 周辺の遺跡

さらに前期から後・晩期にかけての土器もⅠ区・Ⅱ区から出土している〔有馬・鄭・福本編2024ほか〕。これに加え、佐島南西部の福良地区および北東部の江尻地区の砂浜海岸でも縄文土器片の採集例が知られている。したがって、縄文時代の活動は宮ノ浦遺跡のみに集中するのではなく、佐島の海浜部各所に点在していたと理解される。もっとも、現時点で遺構をともなつて実態が把握されているのは宮ノ浦遺跡にほぼ限られており、福良・江尻の資料は、島内における縄文遺跡の広がりを示す好例として位置づけられる。

弥生時代の遺跡は、佐島ではなお希薄である。宮ノ浦遺跡において土器数点が確認されているほか、江尻地区では砂浜海岸背後の標高約20mの小丘陵斜面から凹線文を有する甕・壺の口縁部片が採集されている。この資料は、佐島における弥生時代中期末葉の活動の存在を示すとともに、当該期の生活域が海浜低地ではなく、背後の微高地に求められる可能性を示唆する。上島諸島の生名島・岩城島でみられる山頂・丘陵上の立地と比較した場合、佐島では地形条件に応じて、より低位の微高地が選択された可能性が考えられる。

古墳時代前期の遺跡としては、宮ノ浦遺跡と文四郎（福良）古墳が特筆される。宮ノ浦遺跡では脚台式製塩土器や製塩炉が確認されており、佐島における製塩活動の中核的拠点であったことが明らかである〔有馬・八木編2016ほか〕。一方、福良湾北方の丘陵上に所在する文四郎古墳は、箱式石棺と鉄刀をとまう事例として知られ、近年の人骨研究および自然科学的年代測定によって3世紀中葉の年代が示されている〔弓削町役場1986、田中2014、今治市村上水軍博物館編2014〕。両者は、同時期の佐島において、生産の場と被葬者を収める墓域とが併存していたことを示す資料として重要である。

古墳時代後期以降については、宮ノ浦遺跡において引き続き製塩や生活に関わる痕跡が確認される一方、現時点では佐島島内で後期古墳は確認されていない。この点は、弓削島や生名島で横穴式石室墳が築造される状況と対照的であり、島内で完結しない社会的階層構造や拠点集落の存在を考えるうえで重要である。

古代については、宮ノ浦遺跡が佐島島内で重要な位置を占める。奈良時代から平安時代にかけての土器・陶磁器に加え、鍛冶関連遺物、さらに古代の焼塩土器が多量に出土しており、海浜部における生産と生活の複合的な場であったことが想定される〔大澤・パリノ・サーヴェイ株式会社2021、有馬・鄭・福本編2024ほか〕。現状では、この時期の佐島島内において宮ノ浦遺跡に比肩する内容の遺跡は確認されておらず、島内における古代の中心的な遺跡といえる。

中世の遺跡としては、佐島八幡山城跡が知られる。現在の八幡神社境内に比定されるこの城跡は、佐島における中世城館跡として位置づけられている。宮ノ浦遺跡の主たる存続時期が13世紀に終わりを迎えることを考えると、中世半ばに佐島島内の中心地が宮ノ浦（島の東部）から現在の佐島港周辺（島の北西部）に移ったものと考えるのが妥当であろう。

佐島の中世後半以降の周知の遺跡は、上記の佐島八幡山城跡のみであり、今後の調査の蓄積がまたれるところである。

（笹田朋孝）



図3 佐島遺跡分布図

1. 宮ノ浦遺跡 2. 江尻遺跡 3. 百山遺跡 4. 文四郎(福良)古墳 5. 縄文土器採集地点 6. 佐島八幡山城跡

3. 周辺の遺跡

【参考文献】

- 有馬啓介編2018『上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・鄭宗鎬・福本佳織編2024『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 生名村史編纂委員会編2004『生名村誌』生名村
- 今治郷土史編さん委員会編1989『国府叢書』今治市（『今治郷土史』4、資料編近世2）
- 今治市村上水軍博物館編2014『芸予諸島・海民文化の考古学』平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展、今治市村上水軍博物館
- 愛媛県史編さん委員会編1982『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県
- 愛媛県埋蔵文化財センター編2017『伊予の古代－未知なる伊予国府の探求に向けて－』愛媛県埋蔵文化財センター
- 大澤正己・パリノ・サーヴェイ株式会社 2021「宮ノ浦遺跡第8次発掘調査Ⅰ区出土鉄滓の分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 柴田昌兄・相原清志編1994『多々羅製塩遺跡 多々羅大橋関連埋蔵文化財発掘調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書第52集、愛媛県埋蔵文化財センター
- 清水三男 1975「塩の荘園「伊予国弓削島」」『中世荘園の基礎構造』清水三男著作集第3巻、校倉書房
- 田中良之 2014「人骨から見えてくる原始古代」『弥生・古墳時代の芸予諸島：環境と人間＜予稿集＞』愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム・今治市村上水軍博物館開館10周年記念講演会、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 谷若倫郎・楠真依子・真鍋昭文編1999『馬島亀ヶ浦遺跡 馬島ハゼヶ浦遺跡－来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集－』埋蔵文化財発掘調査報告書第79集、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 東京大学史料編纂所編1981『大日本古文書 家わけ第四之一 石清水文書之一』東京大学出版会
- 長井數秋 1975「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井數秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』第33号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井數秋・土居睦子 1979「愛媛県立石山遺跡発掘調査報告」『愛媛の文化』第19号、愛媛県文化財保護協会
- 村上恭通編2016『愛媛県越智郡上島町豊島明神遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 弓削町役場 1986『弓削町誌』

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査の経緯と目的

宮ノ浦遺跡の発掘調査は2011年から開始された。当初の目的は古墳時代（特に古墳時代前期）の土器製塩の様相を解明することであった。まずは、宮ノ浦集落の西側に所在するⅠ区の調査を2011年（第1次調査）から2018年（第8次調査）に実施した。その結果、製塩炉の検出や脚台式製塩土器の大量出土など、古墳時代前期の土器製塩の実態が明らかとなった。また少ないながらも縄文土器や弥生土器が出土し、中世塩田が検出されるなど、縄文時代から現代にいたる人々の様々な痕跡が残っていることが明らかとなった〔有馬・品川編2019〕。

一方で、2017年（第7次調査）から宮ノ浦集落内のⅡ区の調査を開始した。Ⅰ区と比較すると古代～中世の遺構・遺物が良好に遺存していたことに大きな違いがあった。基本層序Ⅱ層はⅡ区全体に広がる盛土層で、大規模な地業の後に、鹹水溜めやカマド状遺構、あるいは礫を敷き詰めた遺構、粘土を貼り付けた遺構が構築されていたことが明らかとなった。土器・陶磁器のみならず、大量の骨や貝が出土し、古代～中世にかけての宮ノ浦における人間活動の痕跡が生々しく遺存していた。Ⅱ層の下部からは、古代の焼塩土器がまとまって出土し、煎熬のみならず焼塩も行われていたことが判明した。これらの成果は、宮ノ浦遺跡と律令国家との強い関わりをうかがわせるものであった。Ⅲ層は古墳時代の浜堤堆積物によって形成される層で、古式土師器と底径の極めて小さな脚台付製塩土器が一定のまとまりをもって出土する層であった。

Ⅳ層は縄文時代の層であり、2019年（第9次調査）以降は縄文時代早期前半あるいは草創期に調査の重点が少しずつ移ることとなった。5トレンチの先行トレンチ内で撚糸文・条痕文・刺突文土器が出土する一方で、押型文土器が出土しないことが確認され、少なくとも早期前半に遡る土器群であることが想定された。その後、他のトレンチでもⅣ層の調査を実施した結果、その傾向は変わらず、Ⅳ－2層では草創期後半の土器が含まれていることが明らかとなり、出土した石鏃の型式もそれを裏付けるものであった。また、Ⅳ層は海成層ではなく、地山となる花崗岩の風化堆積層であることも確認され、瀬戸内海がまだ海になる前の人間活動の痕跡が宮ノ浦遺跡にのこっていることが明らかとなった。

このように2011年からのⅠ区の調査に始まり、2017年からのⅡ区の調査を経て、2023年の第13次調査にいたり、宮ノ浦遺跡に関する様々な研究課題の多くは解明され、一定の区切りがついたと言っても過言ではなかった〔有馬・鄭・福本編2024〕。しかし今後想定される宮ノ浦集落における遺跡の調査を考える際に、調査密度の低いエリアが存在していることが懸念された。その一つが敷地の西端であり、もう一つが敷地の南端であった。西端の状況を知ることはⅡ～Ⅳ層の西側への広がりあるいはその粗密を知ることにつながり、南端の状況を知ることは地山である花崗岩の埋没丘陵の範囲ならびに基本層序がどこまで確認できるのかを知るうえで重要であった。

1. 調査の経緯と目的

そこで第14次調査では、敷地西端に南北に長い19トレンチと20トレンチを設定し、敷地南端に21トレンチを設定して調査を実施した。あわせてⅡ－5層の広がりを探るために13トレンチを拡張して再度調査を実施することとした。

(笹田朋孝)

2. 調査の体制

宮ノ浦遺跡の第14次発掘調査は愛媛大学考古学研究室と上島町教育委員会が協力して実施した。その実施体制は次の通りである。

事業主体：上島町

調査主体：上島町教育委員会

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：笹田朋孝）、有馬啓介（上島町教育委員会）

発掘調査の参加者は次の通りである。

第14次調査（2024年）：

有馬啓介、曾根大地（上島町教育委員会生涯学習課）、村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同大学准教授）、ブズレン・サミ（愛媛大学研究生）、福本佳織、益田千遥（同修士1回生）、江本晃季、伴井嘉正（愛媛大学4回生）、朝日岳斗、植田知也、藤原碧生（同3回生）、安孫子彩葉、井上一輝、宇野文乃、河端隆佑、高橋乙華（同2回生）、青木聡志（愛媛県埋蔵文化財センター）、安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、国安 登

なお、愛媛大学社会共創学部教育カリキュラムの一環で、秋川莉央、渡邊あみ（同3回生）、稲岡沙耶、河田志帆、菅山侑杏（同2回生）が参画した。

(笹田朋孝)

3. 調査の経過

第14次発掘調査は2024年8月2日～15日に発掘を実施し、16日に調査を終了した。

8月2日に調査機材を運び込み、8月3日から調査に着手した。13トレンチ、19トレンチ、20トレンチの調査区設定を行い、発掘作業を開始した。8月4日には13トレンチで過去の調査区の検出が完了し、Ⅱ層上面まで掘り下げた。この際、調査区の南側では後世の攪乱がⅡ－1層の上面までおよぶため、層境が不明瞭であることが明らかとなった。19トレンチではⅡ層上面まで掘り下げた。Ⅲ層との層境を確認するためにトレンチ北壁に沿って幅50cmの先行トレンチを設定し、Ⅲ層上面を確認した。20トレンチではⅡ－1層を掘り下げた。南側と北側で礫群を検出しており、それらはⅡ－2層に属するものと判断された。8月5日には13トレンチでⅡ－2層上面まで掘り下げた。19トレンチのⅡ－1層上面でトレンチ南壁から幅40～50cmの範囲で礫群が面的に検出されたため、これらの精査を行った。20トレンチの北側の先行トレンチではⅡ－4層を検出した。トレンチの南

側の壁面に礫と粘土を確認し、遺構のプランを確認した。8月6日には13トレンチで西壁中央よりやや南側に粘土と礫群が確認されたため、遺構の可能性を考慮して南壁から幅50cmの先行トレンチを設定した。19トレンチではⅡ－1層を掘り下げると、トレンチ中央付近に礫群が検出された。北壁に沿って設定した先行トレンチでは攪乱が確認された。20トレンチで確認された粘土貼り遺構を1号遺構とした。トレンチ北半ではⅢ層を検出し、南半では1号遺構の調査を継続した。8月7日は引き続き13トレンチでは粘土塊と礫群を面的に調査した。19トレンチでは礫群が検出されたトレンチ北半の精査を行い、トレンチ南半はⅡ－3層まで掘り下げた。20トレンチの南半では1号遺構を調査し、貼り付けられた粘土の検出が完了した。北半ではⅢ層を掘り下げてⅣ－1層に到達した。この日、新たに21トレンチを設定し、表土から3層まで掘り下げた。8月8日は13トレンチでは検出された粘土塊と礫群を掘り下げた。Ⅱ層が他のトレンチと整合が取れないため、層位を再検討した。19トレンチではトレンチ南半で角礫や残存状態の良い遺物が検出されたため現地説明会まで現状保存し、北半ではⅡ－4層の下にシルトの層を検出した。20トレンチの南半では1号遺構の精査を行い、北半ではⅣ－2層まで掘り下げた。21トレンチは4層を掘り下げ、6層上面を検出した。8月9日は現地説明会を控え、発掘作業を休止し、これまでに出土した遺物の洗浄を行った。午後には上島町内遺跡発掘調査事業指導会による現地指導が行われた。8月10日の午前中に宮ノ浦遺跡第14次発掘調査現地説明会を行い、参加者数は35名であった。午後から発掘調査を再開した。8月11日は13トレンチでⅢ層上面を検出した。19トレンチはトレンチ南半の礫と遺物を取り上げ、Ⅱ－4層上面まで掘り下げた。北半は引き続きシルト層を掘り下げた。20トレンチでは西壁沿いに先行トレンチを設定し、1号遺構の構造を調査した。トレンチ北半ではⅣ－3層上面を検出した。21トレンチは南半を深く掘り下げ、分層を行い、標高約0.3mの地点に岩盤が存在すると推定した。

8月12日は13トレンチでⅣ－1層を検出し、掘り下げた。19トレンチではⅣ－1層まで掘り下げ、シルト層が波打つように堆積していることを確認した。20トレンチの1号遺構では分層を行い、先行トレンチから粘土をサンプリングした。トレンチ北半ではⅣ－3層を掘り下げた。21トレンチは発掘作業を停止し、記録作業を行った。この日、トレンチ全景写真をドローンで撮影した。8月13日は13トレンチでⅣ－3層の上面を検出した。19トレンチではⅣ－3層上面を検出した。20トレンチは発掘作業を終了し、記録作業を行った。21トレンチは発掘作業を再開し、岩盤の検出を目的と



写真1 発掘調査風景



写真2 現地説明会風景

3. 調査の経過

してさらに掘り下げた。8月14日にはすべてのトレンチで掘削を終了し、トレンチごとに記録作業を行った。また、同時に21トレンチの岩盤の標高と比較するため、元見山丘陵の麓の岩礁の標高測定を行った。8月15日の午前中には記録作業を完了し、各トレンチを埋め戻し、調査機材を整備した。8月16日に出土遺物の整理を行い、本年度の発掘調査を終了した。

(益田千遥)

謝 辞

宮ノ浦遺跡第14次調査に際して調査地の地権者である山下敏久氏のご理解とご協力があったはじめて可能となりました。心から感謝いたします。

日常生活においては、村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO法人弓削の荘のみなさまに格別なご配慮とご支援を頂戴いたしました。

また、下記の皆さまには、宮ノ浦遺跡に足をお運びいただき、ご指導とご支援を頂戴しました。心より感謝申し上げます（敬称略）。

秋山邦雄、大塩啓一郎、及川 穰、遠部 慎、品川 愛、柴田圭子、柴田昌児、柴田 亮、杉山歩夢、田中 謙、乗松真也、松葉竜司、松村さを里

(笹田朋孝)

【参考文献】

有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・品川 愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・鄭宗鎬・福本佳織編2024『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

第3章 発掘調査成果

1. 調査区の設定

集落を西南西～東北東に走る生活道路と現在の汀線を、Ⅱ区を調査していく上で基本となる軸と考えて、道路上にポイントを設置し、それに直交するラインを調査予定の宅地跡に設定した（図4・5）。この直交するラインを南北基準線とし、以下のように発掘区を設定した。この南北基準線は、真北から西に22度ずれている。

第14次調査では、第13次調査の成果をふまえて、13トレンチと19トレンチ、20トレンチそして21トレンチの調査を実施した。13トレンチは第8次調査の発掘区を拡張して調査した。それ以外のトレンチは今回の調査で新たに発掘した調査区である。

以下、Ⅱ区の調査成果の概要について報告したい。Ⅱ区ではトレンチ間で共通する土層が確認されている。共通する土層については基本層序としてローマ数字で記載しており、Ⅰ層が近現代の土層、Ⅱ層が古代～中世の土層（おもに古代末～中世初頭）、Ⅲ層が弥生～古墳時代（おもに古墳時代前期）、Ⅳ層が縄文時代の土層である。なお、21トレンチでは、基本層序とは異なる土層が確認されているため、土層の注記はいずれもアラビア数字で記している。

（笹田朋孝）

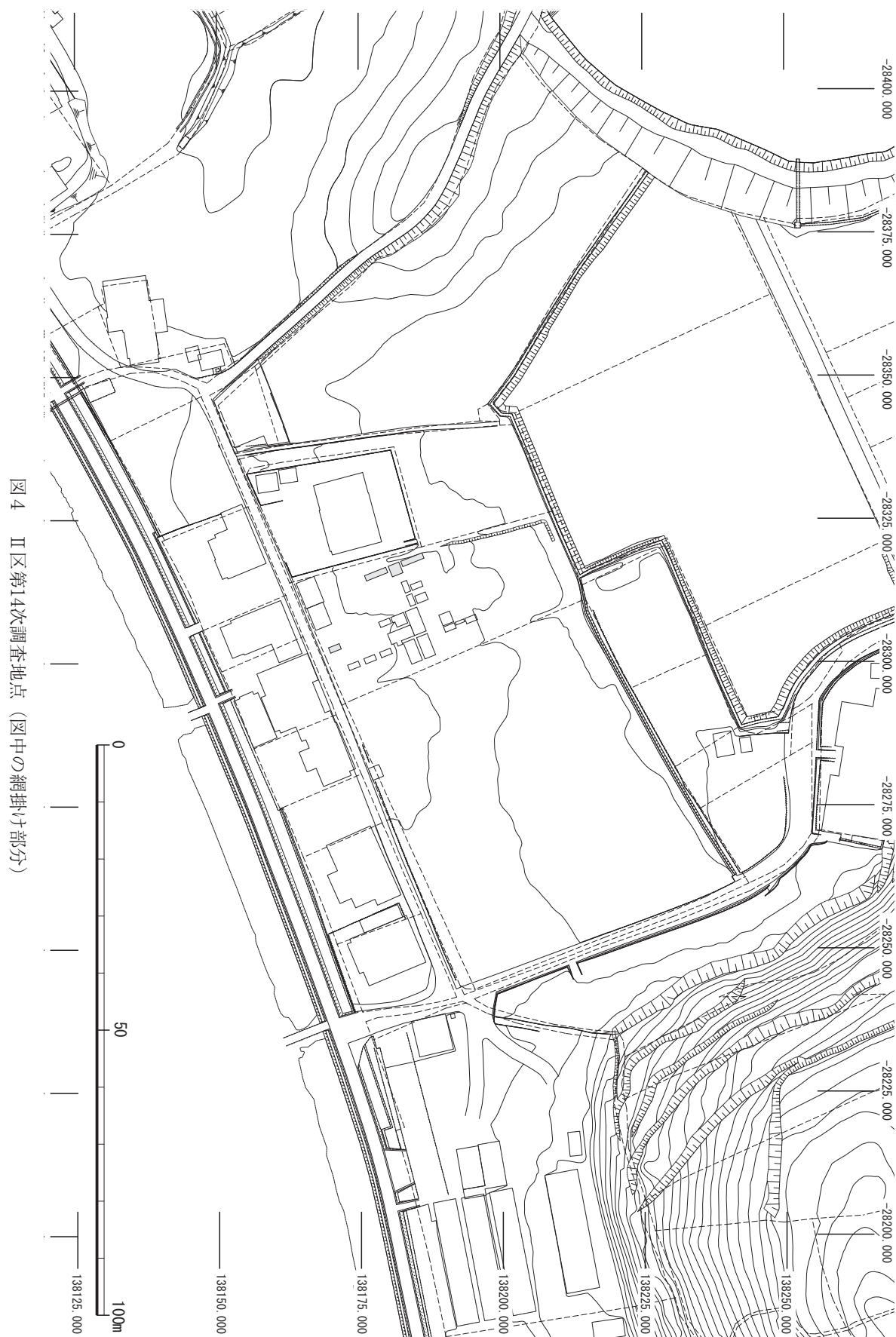
2. 各トレンチの成果

（1）13トレンチ（図6）

第13次調査までに明らかになった古墳時代ならびに古代の製塩土器の分布と、縄文土器の出土するⅣ層の西側への広がりを確認するために再調査を行った。No.13から西に3.5mの地点を調査区の北西隅とし、東に2.0m、南に2.0mの正方形の調査区である。第8次調査では調査区を南北1.0m、東西2.0mに設定し、粘土塊や礫群を検出した段階で、標高2.2～2.1mにあたる「Ⅲ層」（現在のⅡ－2層）にて調査を終了した〔有馬・品川編2019〕。本調査では、調査区を南に1.0m拡張し、Ⅳ－2層まで層位的に掘り下げた後、調査区西側に幅30cmの先行トレンチを設定・掘削し、Ⅳ－4層で湧水が確認された段階で掘り下げを停止した。発掘停止時点の標高は0.8～0.65mである。湧水は発掘停止地点から5cm上まで溜まった。

土層は表土を含め、大きく4つに分層され、Ⅲ層を除き各層は細分される。Ⅱ層は北から南、西から東にゆるやかに傾斜し、Ⅲ層以下は南から北に、東から西にゆるやかに傾斜することが観察され、Ⅱ層とⅢ層、Ⅲ層とⅣ層の境界は波打っている。Ⅰ層は表土で、Ⅰa層、Ⅰb層に分層される。Ⅰa層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を主体とし、細礫～極粗粒砂を含む。層厚は30～45cmを測る。Ⅰb層は褐色を呈し、粗粒砂を主体とし、中礫～大礫の円礫、亜円礫、亜角礫、角礫を含む。層厚

2. 各トレンチの成果



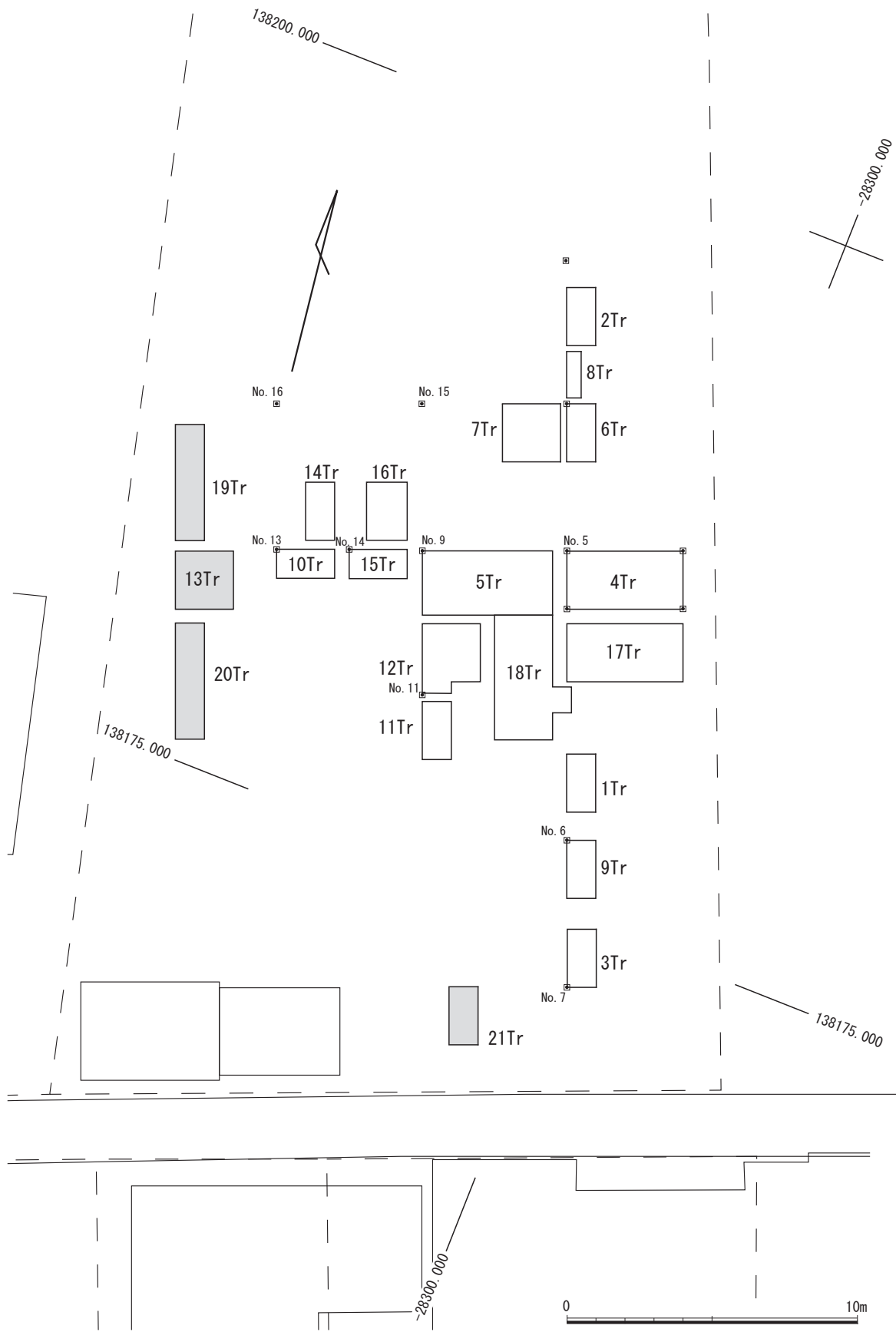
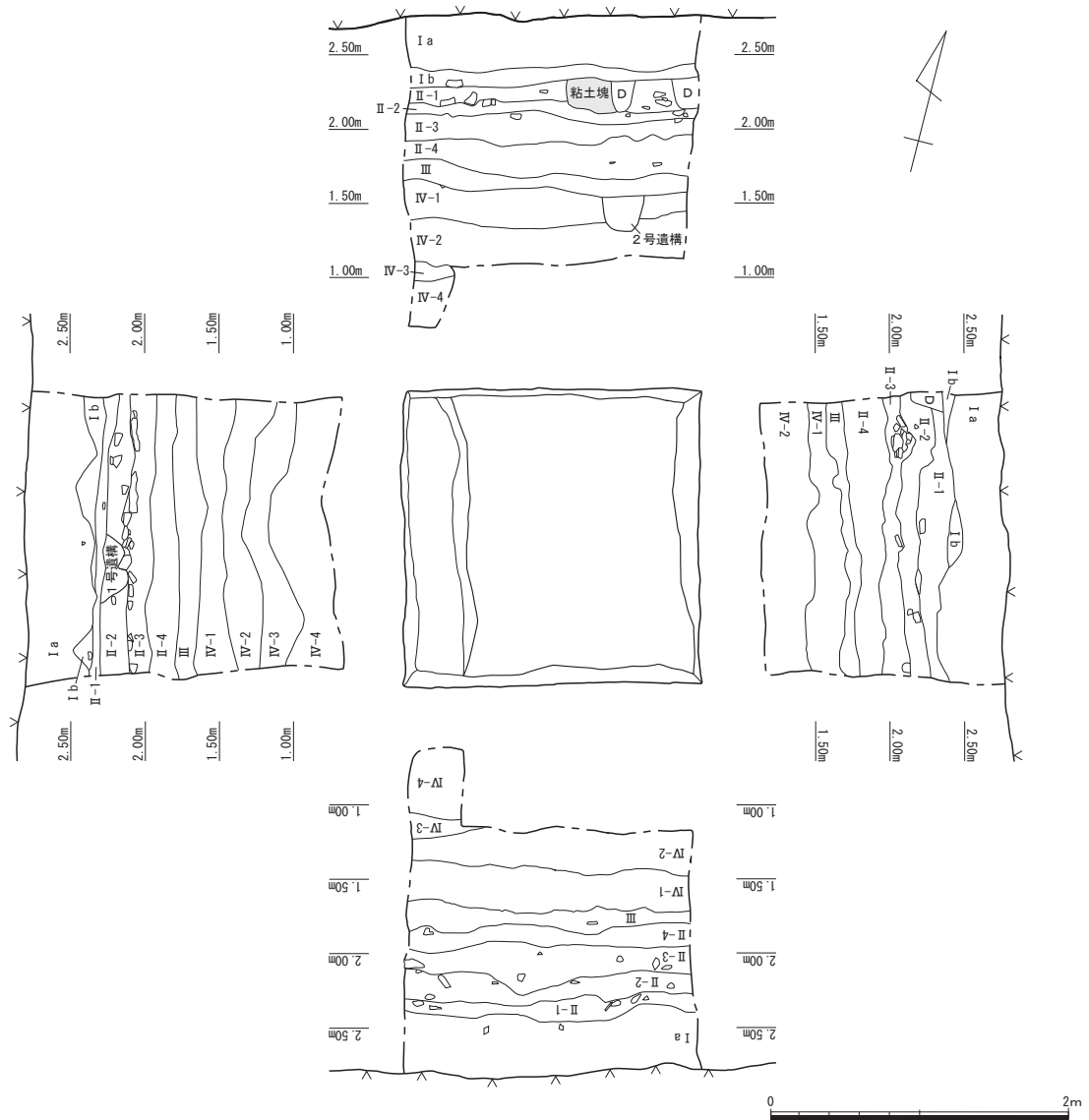


図5 II区トレンチ配置図（網掛け部分を調査）

2. 各トレンチの成果

は5～15cmである。I b層には部分的に褐灰色の粘土が混入している。I b層は攪乱の影響で南壁全体では確認されず、東壁と西壁では部分的にしかみられない。II層は4層に細分され、II-1層はにぶい褐色を呈する。中礫～大礫の円礫、亜円礫、亜角礫をまばらに含んだ中粒砂を主体とし、層厚は10～20cmである。II-1層上面からII-2層にかけて粘土塊が検出されており、調査区東側に対して調査区西側では粘土塊とII層の土がブロック状に入り混じったものも多く確認された。北壁では粘土塊の間に溝状の攪乱が複数確認され、さらにその攪乱から現代のゴミなどもみられたこ



I a層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂主体。細礫～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性なし。 I b層：褐色（10YR4/4）粗粒砂主体。中礫～大礫（円礫・亜円礫・亜角礫・角礫）を含む。しまりあり。粘性なし。褐灰色（10YR5/1）粘土を含む。 II-1層：にぶい褐色（10YR4/3）中粒砂主体。中礫～大礫（円礫・亜円礫・亜角礫）を含む。しまり、粘性ややあり。 II-2層：黒褐色（10YR2/2）粗粒砂主体。粗粒砂と細礫～大礫（亜円礫・亜角礫・角礫）を多く含み、花崗岩の割合が高い。しまりあり。粘性ややあり。礫群の基部を内包する。 II-4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂主体。しまりややあり。粘性なし。粗粒砂主体の棲痕あり（暗褐色10YR3/4）。 III層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂主体。細礫を含む。しまり、粘性なし。 IV-1層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂主体。角をもつ細礫と粗粒砂を含む。しまり、粘性なし。 IV-2層：明黄褐色（10YR6/8）中粒砂主体。極粗粒砂・粗粒砂・細礫を含む。しまり、粘性なし。 IV-3層：明褐色（7.5YR5/6）粗粒砂主体。中粒砂と花崗岩の細礫を多く含む。しまり、粘性なし。 IV-4層：明褐色（7.5YR5/6）粗粒砂主体。極粗粒砂と細礫を多く含む。しまり強い、粘性なし。 D：攪乱。粘土塊：明褐色（7.5YR5/6）主体。黒褐色（10YR2/2）をブロック状に含む。 1号遺構：黒褐色（10YR3/2）まじりの褐灰色（10YR5/1）粘土主体。中礫（亜角礫）を含む。 2号遺構：黄褐色（10YR5/8）中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまり、粘性なし。

図6 II区13トレンチ平面図・土層図

とから、Ⅱ層中の礫と粘土によって構成される遺構あるいは硬化面が後の時代の攪乱（おそらくは畑の耕作など）によって破壊されたものと推測される。Ⅱ－2層は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、細礫～大礫の亜円礫と亜角礫を含む。層厚は5～22cmを測る。貝を多く含み、その完存率は高い。Ⅱ－3層は黒褐色を呈し、中礫～大礫の亜円礫、亜角礫、角礫を多く含む粗粒砂主体の層で、層厚は8～35cmを測る。礫の多くは花崗岩である。本層で面的に検出された礫群はⅡ－1層からⅡ－2層の粘土による整地層あるいは硬化面の基部にあたると考えられる。Ⅱ－4層にはぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は7～30cmを測る。暗褐色を呈した粗粒砂が混じることから、Ⅱ層からⅢ層への漸移層と考えられる。本層からは古代の製塩土器が多量に出土し、調査区東側では滑石製石鍋が出土した。Ⅲ層は黄褐色を呈し、丸みをおびた細礫を含む中粒砂主体の層で、しまりが無い。層厚は5～21cmを測る。遺物の出土量は減少し、脚台式製塩土器片が少量出土する程度である。Ⅳ層は4層に細分される。Ⅳ－1層は明黄褐色を呈し、細礫や粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、細礫は角をもつようになる。層厚は12cm～28cmである。Ⅳ－2層は明黄褐色を呈し、極粗粒砂、粗粒砂、細礫を含んだ中粒砂主体の層である。層厚は12～31cmを測る。Ⅳ－1層、Ⅳ－2層は土器の出土量が激減し、比較的小さい土器片のみ出土した。Ⅳ－3層は明褐色を呈し、中粒砂と細礫を多く含んだ粗粒砂主体の層である。Ⅳ－4層は明褐色を呈し、極粗粒砂と細礫を多く含む粗粒砂を主体とし、しまりが強い。Ⅳ－3層以下では遺物が出土していない。

各層の主な出土遺物の概要は以下の通りである。Ⅰa層では土師質土器、須恵器、吉備型土師器、陶磁器、Ⅰb層では土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、瓦器、Ⅱ－1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、瓦器、移動式カマド、Ⅱ－2層では土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、緑釉陶器、移動式カマド、土錘、石器、Ⅱ－3層では縄文土器、弥生土器、脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、移動式カマド、Ⅱ－4層では縄文土器、脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、移動式カマド、石鍋、鉄釘、Ⅲ層では縄文土器、脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、打製石鏃、剥片、石器の細片、Ⅳ－1層では縄文土器、石器の細片、Ⅳ－2層では縄文土器、石器の細片が出土した。

1号遺構

西壁で確認された粘土とその周囲の礫で構成される遺構である。Ⅱ－1層から掘り込まれており、断面形は半円形を呈する。平面形は不明である。粘土は褐灰色を呈し、部分的に黒褐色も混じる。周囲の礫は5～10cm大の亜角礫である。遺物は出土していない。

2号遺構

北壁際中央付近のⅣ－1層上面からⅣ－2層で検出されたピットである。直径30cm、深さ25cm、底径15cmを測る。覆土は黄褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

（江本晃季）

2. 各トレンチの成果

出土遺物

縄文時代

縄文土器（図7） 1はⅡ層、11はⅡ－2層、3はⅡ－3層、8、9はⅡ－4層、2、4～6、12～21はⅢ層、7、10はⅣ－1層から出土した。1～21はいずれも深鉢であり、焼成は3を除き良好である。

1は口縁部片で、内外面ともに剥離している。口縁部は直立気味に開き、口縁端部は丸くおさまる。口唇部には刻みが付されており、直刻である。外面は斜位の沈線がみられ、沈線幅は2.5mmである。底は平たい。胎土は5mm程度の石英粒を少量含み、2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、

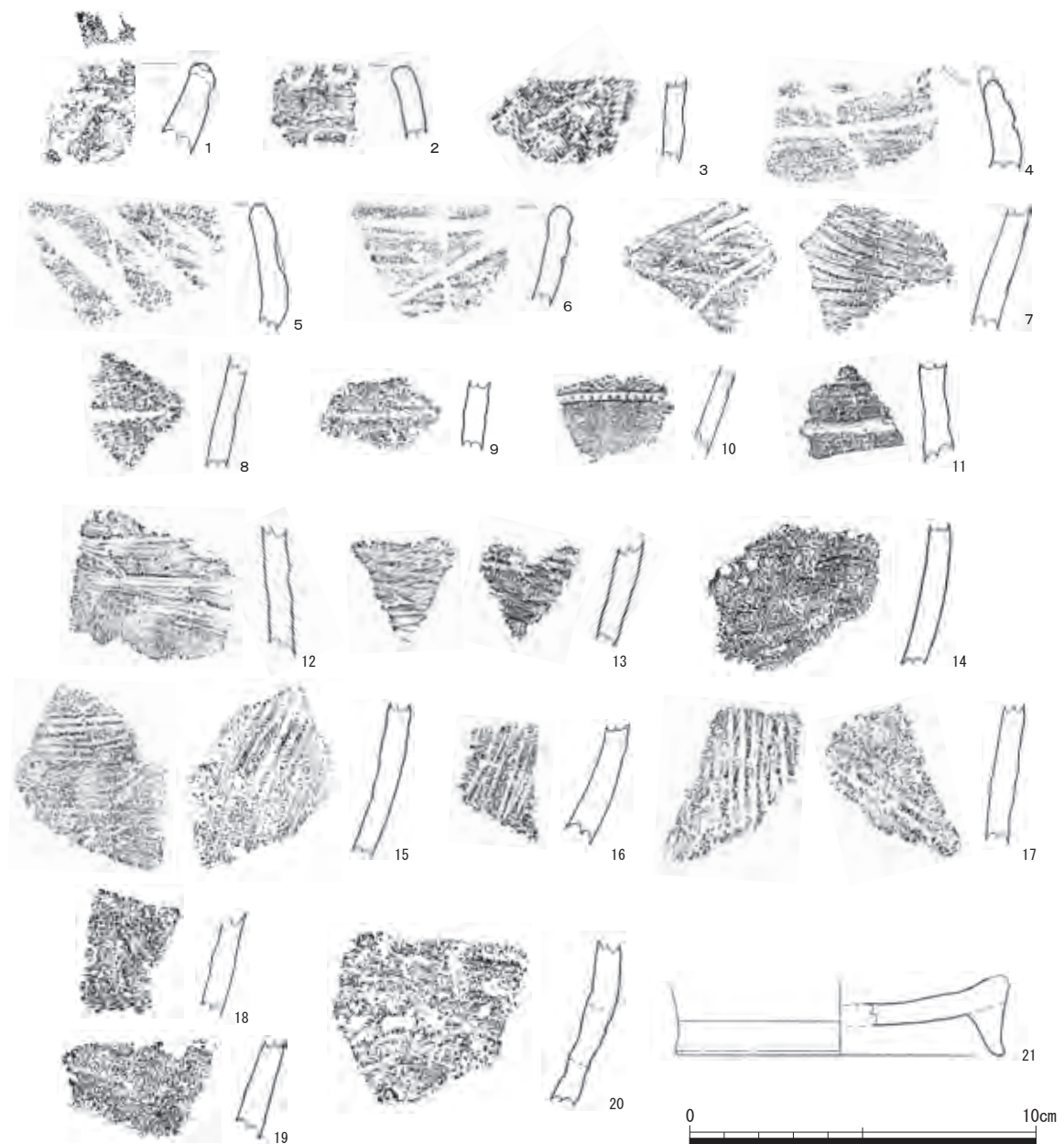


図7 Ⅱ区13トレンチ出土縄文土器

雲母粒、砂礫もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

2は口縁部片であり、内側に傾く。口縁端部は丸みをおびる部分と、やや面的となる部分がある。外面は条痕を施した後にナデ調整を行い、その上に竹管状の原体による円孔刺突文を2段にわたって施す。内面はナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、砂礫と角閃石粉、金雲母粉を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。3は胴部片である。外面には単節RL縄文が施されるが摩滅しており、内面はナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉を含み、1mm以下の赤色頁岩粒と雲母粉もみられる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は橙色を呈する。焼成はやや良好である。

4～11は外面に沈線が施される土器で、4～6は口縁部片、7～11は胴部片である。4は波状口縁であり、口縁部はやや内傾し、端部は丸くおさまる。外面の沈線は口縁部に平行する横走沈線が2条施される。沈線幅は3mm前後を測るが、上部の沈線は口縁端部の成形により部分的につぶされている。内面にナデ調整を施し、胎土は3～5mm程度の石英粒、赤色頁岩粒と、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。5はやや内傾気味であり、端部は丸くおさまる。外面には、口縁部から屈曲部にかけて斜位の浅い沈線が確認される。沈線幅は5mm程度であり、底は平たい。内面は条痕を施した後にナデ調整が施される。胎土は3mm程度の石英粒が少量みられ、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を含む。色調は外面がにぶい赤褐色、内面は明赤褐色である。6はわずかに外方へ開き、口縁端部は丸くおさまる。外面には条痕を施した後にやや丁寧なナデ調整が行われ、その上に横位と斜位の沈線による三角形の文様が施される。沈線幅は3mm前後で、内面にはナデ調整を施す。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、砂礫と、1mm以下の角閃石粒、赤色頁岩粒、金雲母粒を含む。色調は外面がにぶい褐色、内面はにぶい赤褐色を呈する。7は弧状の沈線が2条施され、その上に斜位のナデ調整が部分的に施される。これらの沈線幅は3mm程度であり、沈線の深さは0.5mm前後と非常に浅い。内面は貝殻条痕が施され、胎土には3mm以下の石英粒と、2mm以下の長石粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、雲母粒、砂礫を含む。色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい赤褐色である。8と9はいずれも外面が摩滅しており、横走沈線が1条みられる。内面はナデ調整である。8は胎土に5mm程度の石英粒が少量みられるほか、2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、砂礫を含み、金雲母粉が多量に確認される。色調は8の外面がにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色を呈する。9は胎土に3mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、1mm以下の赤色頁岩粒、雲母粒もみられる。色調は外面がにぶい橙色、内面は橙色である。10は外面に1条の横走沈線がみられ、その沈線内に間隔の狭い連続刺突が施される。沈線上部には節の細かい単節RL縄文を充填し、下部には研磨を施す。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、色調は外面が浅黄色、内面は灰黄褐色を呈する。11は巻貝を原体とする1条の横走沈線が観察され、内面にはナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を含む。色調は内外面ともに褐灰色である。

12～21は無文土器であり、21の底部片を除き胴部片である。12は外面に研磨が行われた後に横位を基調とした巻貝条痕が施される。内面はナデ調整がみられ、胎土は4mm程度の長石粒、石英粒の

2. 各トレンチの成果

ほか、2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。13は内外面ともに横位の条痕が施されるが、外面はその後ナデ調整と研磨が行われる。胎土には2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、砂礫と雲母粉を含み、色調は外面がにぶい赤褐色、内面は明赤褐色である。14は外面に条痕を施した後にナデ調整を行う。内面はナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、金雲母粒、砂礫と角閃石粉を多量に含み、色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい褐色を呈する。15は内面が摩滅している。内外面ともに二枚貝を原体とする条痕が施され、外面上部は条痕を明瞭にのこすが、下部は最終調整としてナデ調整がみられる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒、砂礫を多量に含み、色調は内外面ともににぶい褐色とにぶい黄橙色を呈する。16は外面に斜位の条線が施され、原体は植物性のものと考えられる。内面にはナデ調整が施される。胎土は4mm程度の石英粒を少量含み、2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粒、砂礫がみられ、さらに角閃石粉が多量に確認される。色調は外面が明黄褐色、内面はにぶい橙色を呈する。17は内面が摩滅しており、内外面ともに二枚貝条痕が施される。外面は縦位の条痕であることに対し、内面は斜位の条痕であり、その上にナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、金雲母粒、砂礫が多量にみられ、色調は外面がにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色である。18、19は内外面ともにナデ調整が施され、そのうち18は外面に指頭圧痕がのこり、器表面がわずかに波打つ。18の胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒、砂礫を多量に含み、19にはそれらに加えて4mm程度の石英粒、砂礫と、2mm以下の赤色頁岩粒がみられる。色調は18が内外面ともににぶい褐色であり、19は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する。20は内外面ともにナデ調整と指頭圧痕が明瞭であり、器表面が大きく波打つ。断面には粘土紐積み上げ痕が2か所確認され、胎土は4mm程度の砂礫と、2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、金雲母粒、砂礫を含む。色調は外面がにぶい黄褐色、内面はにぶい黄橙色である。21は高台底で、内面が摩耗している。復元底径は9.5cmであり、高台は直立気味に開き、高台端部で若干外反した後、丸くおさまる。底部中心にかけてややくぼむ。調整は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、砂礫と角閃石粉、雲母粉を含む。色調は内外面ともに橙色であり、外面は一部にぶい橙色を呈する。

1は曾畑式〔堂入2008〕の可能性、2は船元Ⅰ～Ⅱ式併行期〔泉2008〕、3は里木Ⅱ式〔泉2008〕と考えられ、それぞれ1は縄文時代前期、2は縄文時代中期、3は縄文時代中期後半に比定される。また4～9は縄文時代中期末～後期前半⁽¹⁾、10は広義の彦崎KⅡ式併行期〔宮本編1991、山崎・高橋2007、千葉編2010〕が想定されることから縄文時代後期中葉に相当する。11は縄文時代後期末～晩期前半とみられる⁽²⁾。そして12～21の無文土器は胎土や色調から縄文時代後期前半の範疇で捉えられる。

(江本晃季)

弥生時代

弥生土器 (図8) 22は甕の口縁部である。口縁部は厚みを増しながら大きく外方へ開き、口唇

部は強いナデ調整により、やや凹みのある平坦面をもつ。調整は内外面ともにナデ調整と指頭圧痕がみられ、胎土は3mm以下の砂礫のほか、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、雲母を含む。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。焼成はやや軟質であり、わずかに摩滅している。伊予東部編年のV-1～V-2様式の可能性がある〔柴田2000〕⁽³⁾。22はⅡ-4層から出土した。



図8 Ⅱ区13トレンチ出土弥生土器

古墳時代

脚台式製塩土器（図9） 23は脚台部であり、復元底径5.2cmを測る。形態は「ハ」字状であり、端部外面には面が認められる。脚台内面の器表面はなめらかであり、外面には指頭圧痕が認められる。脚台部は充填技法により成形された可能性がある。胎土は1mm以下

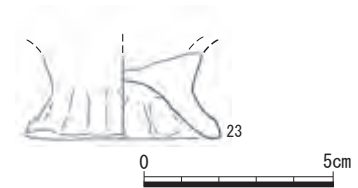


図9 Ⅱ区13トレンチ出土脚台式製塩土器

下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。焼成は良好であり、体部の底部内面は多くが剥落し、粗い面をみせる。

柴田昌児氏による型式分類に基づく、芸予Ⅲ類に該当する可能性がある〔柴田2015〕。23はⅡ-4層から出土した。

芸予型製塩土器（図10） 24は丸底碗形を呈する製塩土器であり、いわゆる芸予型製塩土器の口縁部片である〔柴田2015〕。外面には5条の平行タタキをのこす。口縁端部はわずかに反り上がり、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。24の出土層位は不明である。

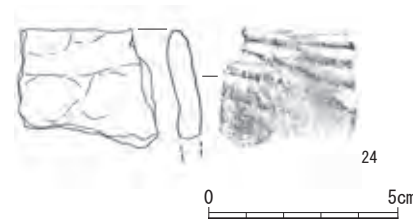


図10 Ⅱ区13トレンチ出土芸予型製塩土器

（福本佳織）

古代～中世

土師質土器（図11） 25～35は皿、36～44は杯、45～52は甕である。いずれも焼成は良好である。

25～27は畿内系土師器であり、口縁部の断面形態は「て」字状を呈する。25は復元口径10.1cmを測る。口縁端部内面には明瞭な沈線をもち、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の角閃石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに浅黄橙色である。26はなかほどで肥厚した後、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともにナデ調整である。胎土は1mm以下の長石粒をわずかに含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。27は復元口径9.6cmを測る。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程の長石粒と石英粒を含む。色調は内面がにぶい黄橙色とに

2. 各トレンチの成果

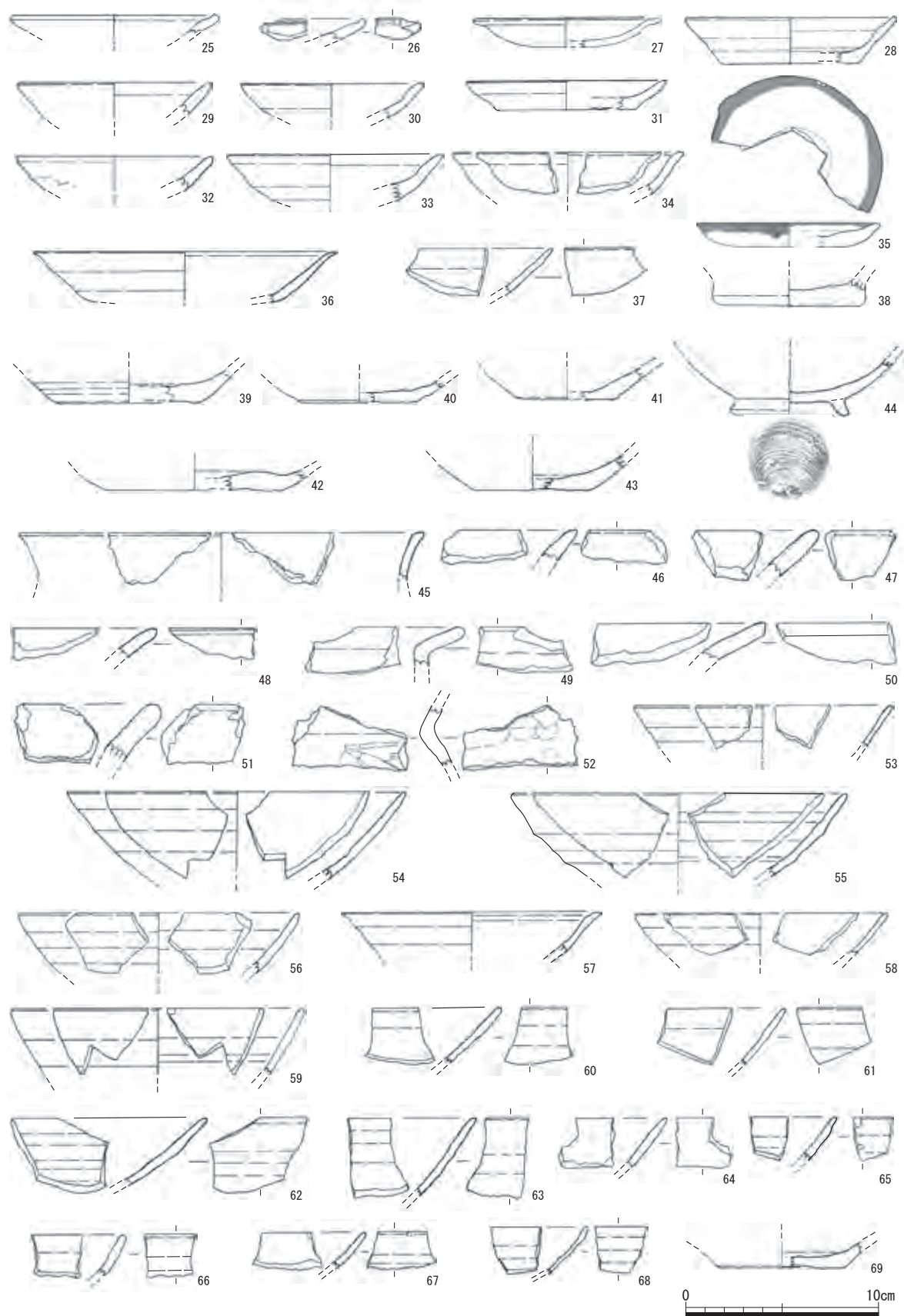


図11 II区13トレンチ出土土器1

ぶい黄褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。28は復元口径11.0cm、復元底径7.2cm、器高は2.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、なかほどで厚みを減じた後、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm程の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色である。29は復元口径10.0cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部はやや尖り気味におさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄褐色を呈する。30は復元口径9.4cmを測る。口縁部は外方にゆるやかに立ち上がり、なかほどでやや外反した後、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は金雲母を含む。色調は内面がにぶい赤褐色と褐灰色、外面はにぶい赤褐色と灰褐色を呈する。31は復元口径10.4cm、器高1.5cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色である。32は復元口径10.2cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともにナデ調整である。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。33は復元口径10.6cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、なかほどでわずかに外反した後、外方へ開く。端部はやや尖り気味におさまる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。34は復元口径12.0cmを測る。口縁部はゆるやかに外方に開き、端部付近でわずかに外反した後、丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内面が明赤褐色、外面は暗赤褐色を呈する。35は復元口径9.2cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、内面にはナデ調整による明瞭な起伏がみられる。底部の切り離し技法はヘラ切りである。口縁端部一円には黒く煤が付着しているため、灯明皿と考えられる⁽⁴⁾。破面の一部にも煤の付着が確認され、破損後も使用していた可能性がある。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

36、37は口縁部である。36は復元口径15.5cmを測る。口縁部は外方へ開き、端部で外反した後、丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は2mm以下の石英粒を少量含むほか、1mm以下の長石粒、角閃石粒、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色であり、二次的被熱により外面は一部にぶい褐色を呈する。37は口縁部がやや直線的に外方へ開き、端部は尖り気味におさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含む。色調は内面が橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

38～44は底部である。38は復元底径7.6cmを測る。底部の切り離し技法はヘラ切りであり、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量と金雲母を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。39は復元底径7.2cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は5mm以下の長石粒と5mm程の石英粒をわずかに含み、金雲母も多量にみられる。色調は内面がにぶい赤褐色、外面はにぶい褐色を呈する。40は復元底径6.4cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、底部はヘラ切り後にナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母がみられ、色調は内外面ともににぶい褐色である。41は復元底径

2. 各トレンチの成果

5.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面はにぶい褐色を呈する。42は復元底径9.4cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、底部の切り離し技法はヘラ切りである。胎土は2mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面がにぶい橙色と橙色、外面は橙色である。43は復元底径6.2cmを測る。底部から口縁部に向けてゆるやかに開く。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法はヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。44は復元底径6.1cm、高台の高さは0.7cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形態は四角形を呈し、外方へ開く。底部から体部に向けて内湾気味に立ち上がる。なお、調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、底部には回転糸切りの痕跡がみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒のほか、金雲母を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色とにぶい橙色を呈する。

45～51は口縁部である。45は復元口径20.9cmを測る。口縁部は外反しながら開き、端部には平坦面をもつ。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は3mm程度の石英粒を少量含み、1mm程度の長石粒と石英粒、角閃石粒、金雲母もみられる。色調は内面が灰黄色であり、口縁端部から外面にかけて橙色を呈する。46はわずかに外反しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに灰黄褐色であり、二次的被熱のため部分的に黒褐色とにぶい赤褐色を呈する。47は直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は4mm以下の長石粒と1mm程度の石英粒を多量に含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。48は外方へ向けて開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と1mm以下の石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は口縁端部から外面はにぶい黄褐色であり、内面は二次的被熱により褐灰色を呈する。49は「く」字状に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と3mm以下の石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色であり、外面は二次的被熱により黒色を呈する。50は直線的に外方に開き、端部は面をもつ。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに明赤褐色である。51はやや直線的に開き、端部は肥厚し丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい赤褐色である。外面には二次的被熱痕が認められる。

52は頸部である。「く」字状に開き、屈曲部外面には強いナデ調整と指頭圧痕が顕著に認められる。内面には板状工具を用いたハケメのような痕跡がのこり、ハケメ調整後、ナデ調整が施されたものとみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面は褐色を呈する。

26はI b層、40、48～50はII層、36はII層粘土層付近、31、32、39、41、52はII - 1層、27、30はII - 2層上面、44はII - 2層、35、42、45はII - 3層、29、34、38、43、47はII - 3層～II - 4層、25、28、33、37、46、51はII - 4層から出土している。37、38、42、43、45、46は古代後半、

29、34、35、39、40、44、47～51は10～11世紀、25～28、30、32は11世紀、31は11～12世紀、33、36、41は12世紀に比定される。52は時期不明である。

須恵器（図11、12） 53～76は杯、77～84は椀、85は壺、86～88は甕である。86～88を除き、いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施される。また、焼成はいずれも堅緻である。

53～68は口縁部である。53は復元口径13.2cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色である。54は復元口径17.4cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。ロクロ目が顕著である。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。55は復元口径17.2cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。ロクロ目が顕著である。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色である。56は復元口径14.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒と1mm以下の角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。57は復元口径13.4cmを測る。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がり、なかほどで若干外反した後、端部は尖り気味におさまる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面は灰白色である。なお、外面全体に自然釉のようなものが付着する。58は復元口径12.9cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は精緻であり、1mm以下の長石粒と石英粒をわずかに含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰白色を呈する。59は復元口径15.0cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色である。60は直線的に開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、1mm以下の角閃石粒もみられる。色調は内面が灰白色、外面は褐灰色を呈する。61は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm程の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに黄灰色である。62はゆるやかに立ち上がり、端部はやや尖り気味である。ほかの須恵器片と比べ、全体的に器壁が厚い。ロクロ目は顕著である。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、1mm以下の石英粒と角閃石粒も少量みられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。63はゆるやかに立ち上がり、端部でわずかに外反した後、丸くおさまる。胎土は3mm程度の長石粒を少量含み、1mm以下の長石粒と金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面は灰白色を呈する。64は直線的に外方へ開き、端部は尖り気味におさまる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄灰色を呈する。65はゆるやかに立ち上がり、端部付近でわずかに外反した後、尖り気味におさまる。ロクロ目はやや顕著である。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰色、外面は灰色と灰白色を呈し、口縁端部のみ濃い灰色に変色していることから、重ね焼きの痕跡と考えられる。66はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。ロクロ目が顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黒色である。内面には全体的に自然釉のようなものが付着する。67はわずかに内湾しながら開き、端部は丸くお

2. 各トレンチの成果

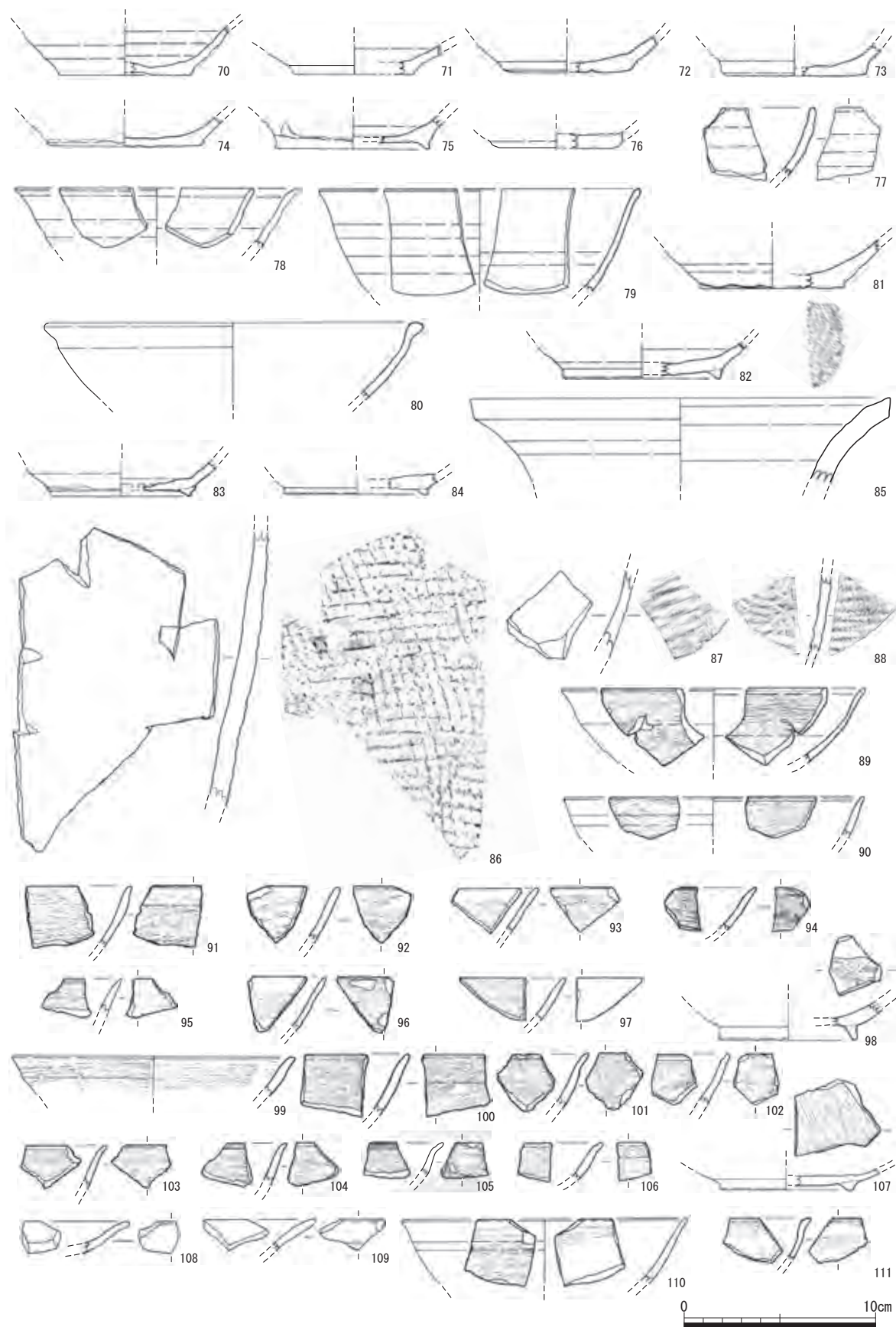


図12 II区13トレンチ出土土器2

さまる。器表面はやや粗い。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。68は内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味である。ロクロ目は顕著である。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄灰色である。

69～76は底部である。69は復元底径6.8cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、ヘラ切り後にナデ消されている。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。70は復元底径6.7cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。71は復元底径6.2cmを測る。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。72は復元底径6.6cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は2mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともに灰色である。73は復元底径7.6cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒のほか、2mm以下の角閃石粒を含む。色調は内外面ともに黄灰色を呈する。74は復元底径8.2cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰白色を呈する。75は復元底径8.0cmを測る。貼り付け輪高台であり、高台の断面形状は三角形を呈する。高台の外面には貼り付け痕が明瞭にのこる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、2mm以下の角閃石粒も少量みられる。色調は内面が褐灰色、外面は褐灰色と暗赤褐色を呈する。76は復元底径6.5cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

77～80は口縁部である。77は内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。外面のロクロ目は顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面が灰褐色、外面は黄灰色を呈する。78は復元口径14.6cmを測る。口縁部は端部付近で外反し、端部は尖り気味におさまる。内外面ともに明瞭なロクロ目がみられる。胎土は1mm程の長石粒と石英粒を含み、1mm以下の角閃石粒を少量と金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰色である。79は復元口径16.6cmを測る。若干内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反した後、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。80は口縁部であり、復元口径19.6cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は玉縁状に肥厚する。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰白色であり、外面上半部は帯状に黄灰色を呈する。篠窯産須恵器の可能性がある。

81～84は底部であり、そのうち82～84は貼り付け輪高台である。81は東播系須恵器の可能性があり、復元底径6.8cmを測る。底部の切り離し技法は回転糸切りである。内外面ともに回転ナデ調整後、さらにナデられた痕跡がやや明瞭にみられる。また、外面には粘土の残余が観察される。胎土は精緻であり、金雲母を含む。色調は内面が黄灰色、外面は灰黄色である。82は復元底径8.2cm、高台の高さ0.5cmを測る。貼り付け輪高台をもち、高台の断面形態は台形を呈する。胎土は1mm程度の長石粒を含む。色調は内外面ともに灰黄色と黄灰色を呈する。内外面ともに二次的被熱痕がみられ

2. 各トレンチの成果

る。83は復元底径7.0cm、高台の高さは0.4cmを測る。高台の断面形態は三角形を呈し、貼り付けが粗雑である。内面には自然釉が部分的に付着する。胎土は2mm以下の石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面は黄灰色を呈する。84は復元底径7.4cm、高台の高さは0.3cmを測る。高台の断面形状は台形を呈する。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

85は口縁部であり、復元口径21.7cmを測る。口縁部は大きく外反しながら開き、端部外面側は面をもつ。口縁部は焼けひずみのためか、わずかにゆがむ。内面には付着物のため器表面が観察できない部分があり、焼成時に大量の灰等が落ちてきた可能性が考えられる。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともに灰色である。

86～88は胴部である。86は内面にナデ調整、外面には格子目タタキが認められる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が灰色、外面はオリーブ黒色を呈する。十瓶焼の可能性が考えられる。87は内面にナデ調整が施され、外面には平行タタキ痕が明瞭にのこる。胎土は1mm程度の石英粒を少量含み、1mm以下の長石粒と角閃石粒、金雲母も少量含む。色調は内外面ともに褐灰色であり、外面には自然釉が観察される。88は外面に2～4mm程度の格子目タタキが施され、内面には当て具痕がのこる。胎土は2mm以下の長石粒を含む。色調は内面が黄灰色、外面は灰色を呈する。

76、77、79はI b層、64、69、82、83はII層、74はII－1層、73はII－2層上面、54、55、61、70、85、86はII－3層、53、59、60、65、66、72、75、81、84、87、88はII－3層～II－4層、56、71はII－3層～II－4層サブトレンチ、57、58、62、63、67、68、78はII－4層から出土している。53～67、72、75、77～79、82、85、87は古代後半、68、69、74、80、83、84、86、88は9～10世紀、70、71、76は10～11世紀、73は11世紀後半～12世紀、81は12世紀に比定される。

黒色土器（図12） 89～98は黒色土器A類、99～107は黒色土器B類である。器種はいずれも碗であり、焼成は良好である。

89～97は口縁部である。89は復元口径15.8cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部付近でわずかに外反した後、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキが密に施され、胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が黒色、外面はにぶい橙色を呈し、外面端部付近は黒色である。90は復元口径15.6cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐる。調整は内外面ともに斜位と横位のミガキが密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母が多量にみられる。色調は内面が暗灰色、外面は暗灰色とにぶい褐色を呈する。91はゆるやかに立ち上がり、端部付近でわずかに外反した後、丸くおさまる。内外面ともに斜位と横位のミガキが密に施されており、外面には指頭圧痕もみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内面が黒色、外面は黒色とにぶい赤褐色を呈する。92はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位と斜位のミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がオリーブ黒色、外面はオリーブ黒色と浅黄色を呈する。93は直線的に立ち上がり、なかほどでわずかに外反した後、端部は丸くおさまる。

内外面ともに横位のミガキが施されているが、内面上半部は器表面の荒れのため、やや不明瞭である。胎土は金雲母を含む。94はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり、内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。95は端部が尖り気味におさまり、端部内面には明瞭な沈線が1条めぐり。内外面ともに横位のミガキが施され、内面は密である。胎土は金雲母を含み、色調は内面がオリーブ黒色、外面は灰色とにぶい褐色を呈する。96はやや直線的に立ち上がり、なかほどでわずかに外反した後、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキが施されるが、上半部は器表面の荒れのため不明瞭である。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに黒褐色である。97は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内面のみ横位のミガキが施される。胎土は1mm程度の長石粒をわずかに含み、金雲母もみられる。色調は内面が黒色、外面はにぶい橙色を呈する。

98は底部であり、復元底径7.2cm、高台の高さは0.8cmを測る。内面のみミガキがみられる。貼り付け輪高台であり、断面形は台形状を呈する。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰色と暗灰色、外面はにぶい橙色とにぶい黄橙色を呈する。

99～106は黒色土器B類碗の口縁部である。99は復元口径14.6cmを測る。口縁部は内湾気味に外方へ開き、端部付近でわずかに外反した後、丸くおさまる。端部内面には明瞭な沈線が1条めぐり、内外面ともにミガキが密に施される。胎土は金雲母をわずかに含む。色調は内外面ともに黒色を呈する。100はやや内湾気味に外方へ開き、端部はわずかに外反する。端部内面には沈線が1条めぐり、調整は内外面ともにミガキが密に施される。胎土は金雲母を含む。黒色不良とみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色と暗灰黄色である。101は内湾しながら外方へ開き、端部付近で外反した後、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が2条めぐり、調整は内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は金雲母がみられ、色調は内外面ともに黒色である。102はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり。調整は内外面ともにミガキが施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内面がにぶい黄橙色と褐灰色、外面はにぶい黄橙色を呈する。103は端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさまる。端部内面には明瞭な沈線が1条めぐり、調整は内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は金雲母がみられ、色調は内面が黒褐色、外面は黒褐色と灰黄色を呈する。104は内湾気味に外方へ開き、上部で外反した後、丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともにオリーブ黒色を呈する。105は上部で強く外反し、端部はやや尖り気味におさまる。端部内面には明瞭な沈線が2条めぐり、調整は内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともにオリーブ黒色である。106はわずかに内湾しながら立ち上がり、上部で外反した後、端部は丸くおさまる。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、調整は内外面ともにミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに暗灰色である。

107は底部であり、復元底径6.8cm、高台の高さは0.5cmを測る。貼り付け輪高台であり、高台の断面形状は台形を呈する。見込みには横位のミガキが施される。1mm以下の長石粒を含み、金雲母も

2. 各トレンチの成果

みられる。色調は内外面ともに黒色を呈する。

104はⅠb層、91、96、101、103、105、107はⅡ層、95はⅡ層サブトレンチ西側、92、93はⅡ-1層、100はⅡ-2層上面、89、98、99、102はⅡ-3層、97、106はⅡ-3層～Ⅱ-4層、90、94はⅡ-4層から出土している。97は9世紀、94は9～10世紀、90～92、95、96、98、100、101は10世紀、89、93、99、102～104、106、107は10～11世紀、105は11世紀に比定される。

緑釉陶器（図12） 108は皿の口縁部である。内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は精緻であり、色調は灰黄褐色を呈する。釉調は濃緑色を呈し、全面施釉されている。高橋照彦氏のV期〔高橋1995〕に該当し、近江産であると考えられる。

108はⅡ-2層から出土しており、時期は10世紀後半に比定される。

灰釉陶器（図12） 109は皿の口縁部である。口縁部はわずかに外反しながら外方へ開き、なかほどでわずかに厚みを増した後、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。釉は外面のみにかかり、口縁端部は透明である。口縁端部以下は黒褐色を呈し、濃淡の差が激しい。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を多量に含む。色調は内面が灰白色、外面は灰白色と黒褐色を呈する。

109はⅡ-4層から出土しており、9世紀後半～10世紀前半に比定される。

吉備型土師器（図12・13） 110～114は碗の口縁部である。110は復元口径14.8cmを測る。口縁部はやや内湾気味に外方へ開き、端部付近でわずかに外反する。内外面ともにミガキが施されるものの、器表面の剥離が多いためにやや不明瞭である。胎土は金雲母を含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。111は内湾気味に外方へ開き、端部付近で外反した後、丸くおさまる。内外面ともに横位と斜位のミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が浅黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。112はゆるやかに立ち上がり、端部付近で若干肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位と斜位のミガキが施される。胎土は金雲母を含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色と褐灰色である。113はわずかに内湾しながら開き、端部付近で外反した後、肥厚して丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面にはわずかにミガキがみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。114は直線的に開き、端部でわずかに外反した後、丸くおさまる。内外面ともに横位と斜位のミガキがみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内面が黄灰色とにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

115、116は碗の底部である。115の高台は貼り付け輪高台であり、端部が欠けている。調整は内外面ともにミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。116は復元底径7.6cm、高台の高さは0.8cmを測る。貼り付け輪高台をもち、

高台の断面形は三角形状を呈する。内面にはミガキが施される。胎土は1mm以下の長石と石英を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに淡黄色を呈する。

110～116は山本編年Ⅰ－3期に該当する可能性がある〔山本1993〕。

111、113、116はⅠb層、112、115はⅡ－1層、114はⅡ－2層上面から出土している。110は出土層位不明である。110～116は11世紀後半～12世紀に比定される。

瓦器 (図13) 117、118は椀である。

117は口縁部である。復元口径15.7cmを測る。やや内湾しながら外方に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキが施される。胎土は3mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。橋本編年の和泉型Ⅱ－1期に比定される〔橋本2018〕。

118は底部であり、復元底径5.4cm、高台の高さは0.8cmを測る。高台は貼り付け輪高台であり、断面形は四角形状を呈する。底部から口縁部に向けては、内湾しながら立ち上がる。調整は内外面ともに横位のミガキが施され、外面には指頭圧痕も認められる。胎土は金雲母を含み、色調は内面が黄灰色、外面は暗灰黄色を呈する。和泉Ⅲ－2の可能性はある〔橋本2018〕。

117、118はⅠb層から出土している。117は11世紀、118は12世紀に比定される。

土製品 (図13) 119、120は移動式カマド、121は有溝土錘である。

119、120は裾部である。119は内面にナデ調整、外面には斜位の粗いハケメが施される。接地面は平坦であり、内面に粘土紐の痕跡がのこる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。120は内面がナデ調整、外面には斜位のやや

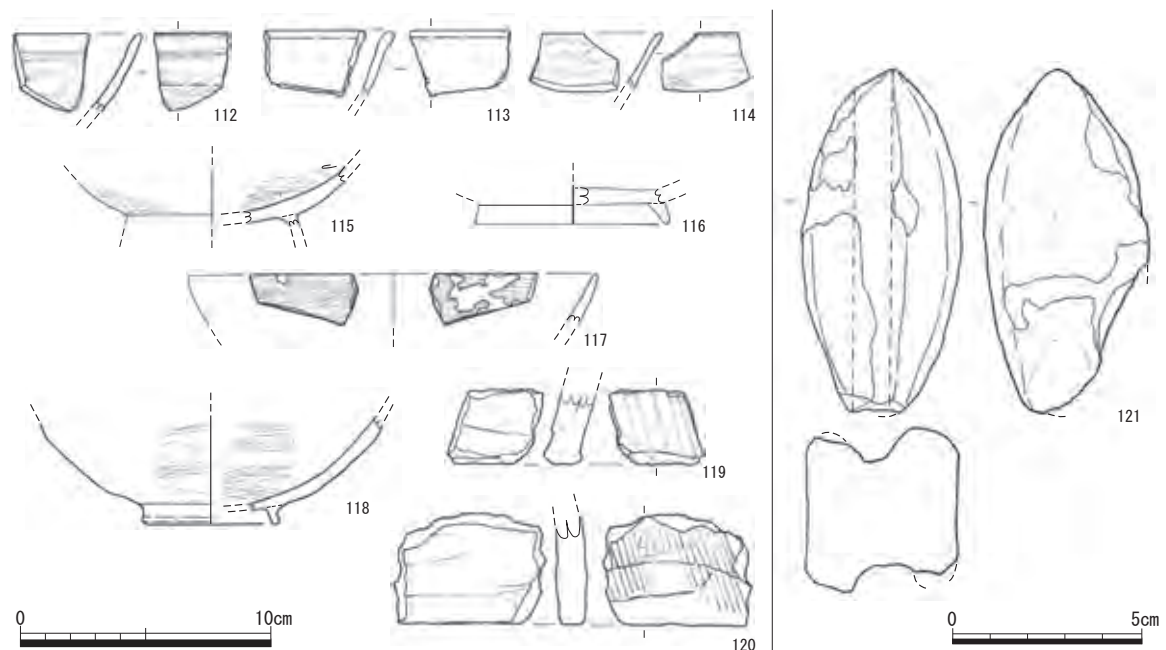


図13 Ⅱ区13トレンチ出土土器・土製品

2. 各トレンチの成果

粗いハケメが施され、接地面は平坦である。内面は色調の変化から、二次的被熱を受けたものと考えられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内面がにぶい褐色とにぶい赤褐色、外面はにぶい橙色を呈する。

121は大型の有溝土錘である。長さ9.1cm、残存幅4.3cm、残存する溝幅1.3cm、溝の深さ0.8cm、重量は149.0gである。ほぼ完形に近く、平面形が紡錘形、断面形は「H」字状を呈する。表裏ともに長軸に沿った溝をもち、溝の断面は「U」字状をなす。全体的にナデ調整が施されている。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調はにぶい黄褐色とにぶい赤褐色を呈する。

121はⅡ層粘土塊付近、119、120はⅡ－4層から出土している。

(朝日岳斗)

古代製塩土器 (図14) 122～149はいずれも焼成が良好で、150は焼成が堅緻である。いずれも赤色化や器表面の荒れ、剥離などが認められ、二次的に被熱している可能性がある。なお、傾きが推測できない胴部片は直立させて表している。

122～147は口縁部である。122～125、134、135、142～147は直立気味に立ち上がるもの、127～129、132、140はやや内湾しながら外方へ開くもの、126、130、131、133、136～139、141は直線的に外方へ開く。また、口縁端部は122～136、141～143、145～147には面がみられ、138～140、144はまるくおさまる。そのほか、137は内面側へわずかに突出する。

122は復元口径13.8cmを測る。内面は大きく剥離し、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含み、1mm以下の石英粒と金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色とにぶい褐色を呈する。123は復元口径が13.4cmである。内面は斜位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、0.7mmほどの石英粒と金雲母もみられる。色調は内面が灰黄色、外面は灰黄色とにぶい黄橙色である。124は復元口径12.7cmを測る。直線的に立ち上がり、なかほどでわずかに肥厚する。内面には横位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい褐色を呈する。125は復元口径12.6cmである。内面は斜位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色と灰黄色、外面はにぶい黄橙色と暗灰黄色である。126は内面に斜位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、3mm以下の石英粒と金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色である。127は内面に斜位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は3mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が暗灰黄色、外面はにぶい橙色を呈する。128は内面に横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒を含むほか、3mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色とにぶい黄橙色である。129は内面にナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を含むほか、1mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面が暗灰黄色、外面はにぶい黄褐色を呈する。130は内

面が平滑気味であり、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含むほか、2mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内外面ともににぶい橙色である。131は内面に横位のナデ調整がみられ、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。132は内面に横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm程度の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は灰黄褐色である。133は内面が大きく剥離しているため調整が不明瞭であり、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が橙色とにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。134は内面に斜位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含むほか、1mm程度の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。135は内面に浅い溝のような痕跡がのこり、外面には指頭圧痕が認められる。胎土

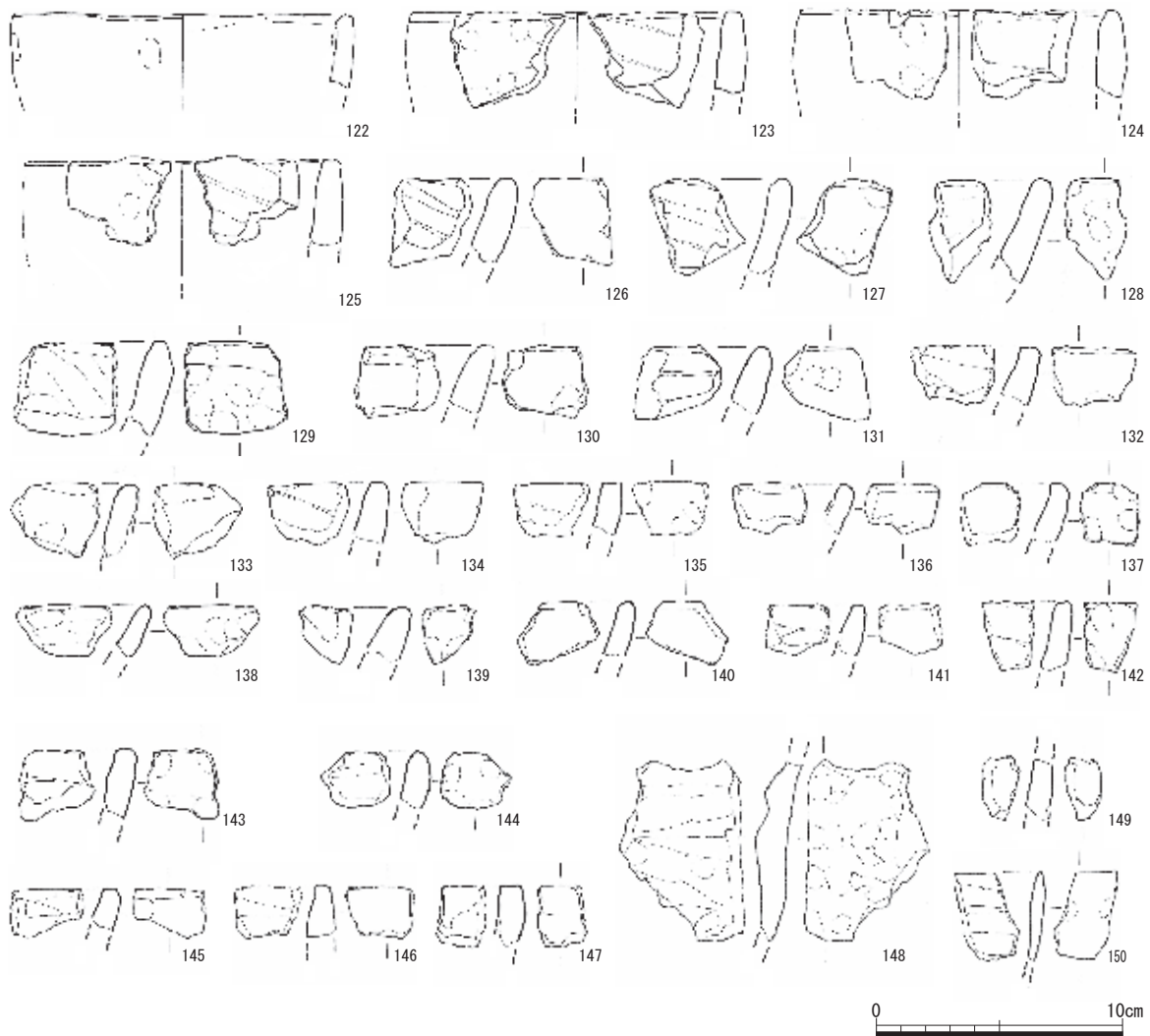


図14 II区13トレンチ出土古代製塩土器

2. 各トレンチの成果

は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が橙色とにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。136は内面が大きく剥離しているため調整が不明瞭であり、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は3mm以下の長石粒を含むほか、1mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色である。137は内面にやや粗めの布目痕が確認されるため、型作り成形であると考えられる。外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が橙色、外面はにぶい橙色を呈する。138は内面にナデ調整と指頭圧痕、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色である。139は外面に指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒と1mm以下の石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。140は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい黄橙色である。141は内面に横位のナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm程度の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面が橙色、外面はにぶい褐色である。142は内面に横位のナデ調整、外面に指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。143は内面に横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、2mm以下の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。144は内面に横位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm程度の石英粒と金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は橙色とにぶい橙色を呈する。145は内面に横位と斜位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色である。146は内面に横位のナデ調整、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒のほか、2mm以下の石英粒と金雲母もみられる。色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい褐色を呈する。147は内面上半部には横位のナデ調整がみられ、下半部は剥離している。胎土は3mm以下の長石粒と4mm以下の石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰黄色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

148、149は胴部である。148は内面に強い横位のナデ調整と斜位のナデ調整、指頭圧痕が確認され、外面は指頭圧痕が顕著である。胎土は5mm以下の長石粒と2mm以下の石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面は明赤褐色を呈する。149は内面に粗めの布目がのこり、型作り成形であると考えられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含むほか、1mm以下の角閃石粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内外面ともに橙色である。

150はいわゆる「倉浦式土器」の可能性がある口縁部である。内面は横位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面は暗灰黄色を呈する。

122、123、126、127、129～132、134、135、137、138、140～149はⅡ－4層、128、133、139はⅡ－3～Ⅱ－4層、136はⅢ層、124、125、150は層位不明である。 (福本佳織)

鉄製品(図15) 151はⅡ－4層下面で出土した替折釘である。頭部は直角に曲げられており、脚部より厚い。断面は頭部が長方形で、脚部は正方形である。全長4.8cm、頭部奥行1.7cm、厚みは、頭部で0.9cm、脚部で0.5cmである。重量11.31gを測る。

(ブズレン・サミ)

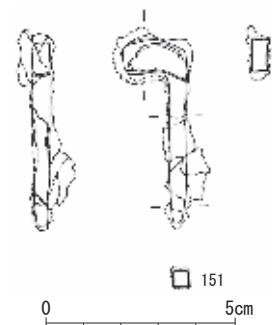


図15 Ⅱ区13トレンチ出土鉄製品

石製品(図16) 152は滑石製の石鍋片であり、口縁部から方形の耳にかけて残存し、縦耳型石鍋の一部と考えられる。出土層位は不明である。外面にはノミ痕と煤の痕跡がのこる。内面には使用による擦過痕が認められる。産地は西彼杵半島と推定される⁽⁵⁾。森田編年のA類、木戸編年のⅡ類に相当し、縦耳型石鍋の形状から、11世紀～12世紀中ごろに比定される〔森田1983、木戸1995〕。

愛媛県内で出土する石鍋は12世紀後半～14世紀のものが大半を占めており、本遺跡から出土した資料と同時期のものは松山市南江戸鬺目遺跡での出土が確認される〔首藤2019〕。



図16 Ⅱ区13トレンチ出土石製品

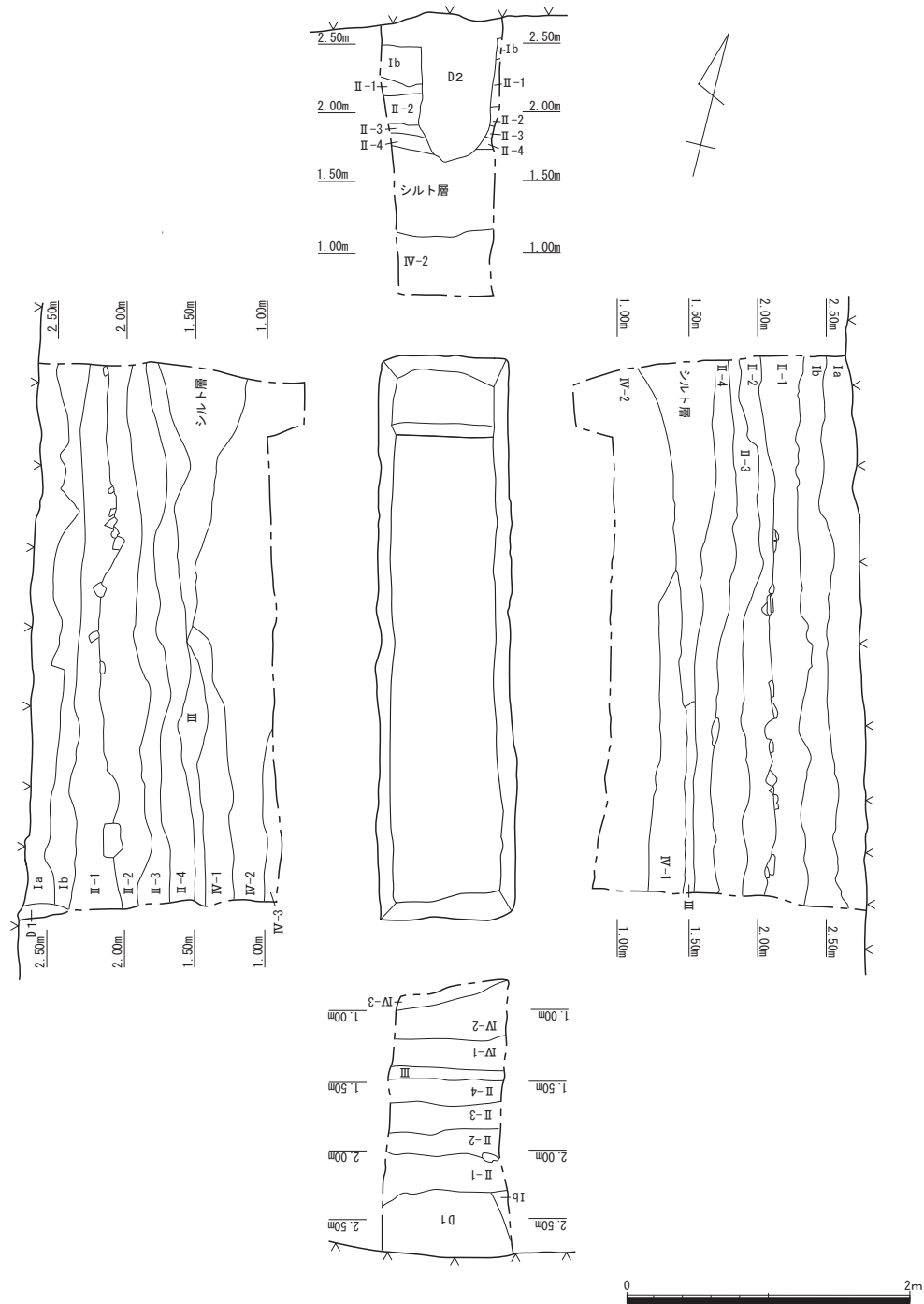
(益田千遥)

(2) 19トレンチ (図17)

第13次調査までに明らかになった遺跡周辺の旧地形を確認するために、第14次調査で新しく設定した。No.13の杭から西に3.5m、北に0.3mのポイントを南西隅とする。13トレンチの北西角から30cmに位置し、南北4.0m、東西1.0mの長方形の調査区である。層位的にⅣ－2層まで掘り下げた後、調査区北壁側に幅25cmの先行トレンチを設定し、0.80mまで掘り下げて堆積状況を確認した。発掘停止時の標高は0.80～0.70mである。

土層は表土を含めて大きく5層に分層され、Ⅲ層を除いて各層は細分される。Ⅱ層は北から南に、Ⅲ層以下は南から東にゆるやかに傾斜することが観察され、Ⅲ層とⅣ層の境界は波打つ。Ⅰ層は表土であり、2層に分けられる。Ⅰa層はにぶい黄褐色を呈し、細粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は12～30cmを測る。Ⅰa層は攪乱の影響で南壁、北壁では確認されない。Ⅰb層は褐色を呈し、細礫を多く含む粗粒砂と極粗粒砂を主体としており、層厚は4～30cmを測る。表土はほぼ水平に堆積している。南壁では表土からⅠb層にかけて攪乱D1が、北壁ではⅠa層からⅡ－4層にかけて攪乱D2が検出された。Ⅱ層は4層に分層される。Ⅱ－1層は黒褐色を呈し、粗粒砂～

2. 各トレンチの成果



I a 層：にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粒砂主体。細粒砂～極粗粒砂を含む。細礫を多く含む砂質土層。しまりなし。粘性なし。 I b 層：褐色 (7.5YR4/4) 粗粒砂、極粗粒砂主体。細礫を多く含む。貝類を少量含む。しまりなし。粘性なし。 II-1 層：黒褐色 (7.5YR3/2) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。細礫～大礫を多く含む。面的に検出される。貝類を多く含む。しまりなし。粘性なし。 II-2 層：黒褐色 (7.5YR3/1) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。細礫～大礫を含む。貝類を多く含む。しまりなし。粘性なし。 II-3 層：暗褐色 (7.5YR3/3) 粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。細礫～大礫を含む。しまりなし。粘性なし。 II-4 層：にぶい黄褐色 (7.5YR5/3) 中粒砂主体。細粒砂と極粗粒砂を含む。細礫～大礫を含む。貝を含む。しまりなし。粘性なし。 III 層：にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂主体。中粒砂と極粗粒砂を含む。しまりなし。粘性なし。暗褐色 (10YR3/3) 中粒砂主体。細粒砂、粗粒砂を含む。西壁の南側 2 m の範囲で確認された。 IV-1 層：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。しまりなし。粘性なし。 IV-2 層：にぶい黄褐色 (10YR7/3) 中粒砂～粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。しまりなし。粘性なし。 IV-3 層：にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粗粒砂主体。中粒砂～極粗粒砂を含む。極粗粒砂を多く含む。もろい花崗岩が混在する。遺物を含まない。一部ではにぶい褐色 (7.5YR5/4) の土を含む。しまりがある。ブロック状の土が含まれる。シルト層：灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂、極細粒砂が混じる。砂質シルトと考えられる。

図17 II区19トレンチ平面図・土層図

極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。層厚は14～28cmを測る。細礫～大礫を多く含み、下部では礫が面的に検出されている。面的に検出された礫の上層をⅡ－1層、下層をⅡ－2層とした。Ⅱ－2層は黒褐色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。層厚は6～22cmを測り、南から北に向かって薄くなる。Ⅱ－3層は暗褐色を呈し、極粗粒砂を含む粗粒砂を主体とする。層厚は6～27cmを測り、北側で薄くなる。細礫～大礫を含むが、Ⅱ－1層、Ⅱ－2層と比較すると少ない。Ⅱ－4層はにぶい褐色を呈する。細粒砂と極粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は13～24cmを測る。北から南に向かってゆるやかに傾斜する。Ⅲ層はにぶい黄橙色を呈し、中粒砂と極粗粒砂を含む粗粒砂を主体とする。また、南西隅では確認された土が暗褐色を呈し、細粒砂と粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。Ⅲ層は北に向かって厚みを減じ、局所的に北側のシルト層の上に堆積する。シルト層は灰黄色を呈し、しまりは弱く、粘性はない。細粒砂と極粗粒砂が混じる砂質シルトである。南に向かって厚みを減じ、トレンチの南半では確認されない。第7次調査で発掘を行った2トレンチでもシルト層が確認されている〔有馬・持永編2018〕。2トレンチのシルト層は明緑灰色とオリーブ黒色を呈し、北に向かって急傾斜する。Ⅳ層は花崗岩の風化層であり、3つに細分される。Ⅳ－1層はにぶい黄褐色を呈し、極粗粒砂を含む粗粒砂が主体である。層厚は最大24cmを測り、南から北に向かって薄くなり、シルト層の下で途切れる。Ⅳ－2層はにぶい黄橙色を呈する。極粗粒砂を含む中粒砂～粗粒砂を主体とする。層厚は60cm以上を測る。Ⅳ－3層はにぶい黄橙色を呈し、中粒砂～極粗粒砂を含む粗粒砂を主体としている。風化途中のもろい花崗岩の礫が混在し、一部ではにぶい褐色を呈するブロック状の土が確認された。この層からは遺物は出土していない。

各層の主な出土遺物の概要は以下の通りである。Ⅰa層では土師質土器、須恵器、Ⅰb層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、銅製品、銭貨、Ⅱ－1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、緑釉陶器、移動式カマド、土錘、Ⅱ－2層は製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、Ⅱ－3層では脚台式製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、瓦器、移動式カマド、鉄製品、Ⅱ－4層は脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、吉備型土師器、移動式カマド、Ⅲ層からは脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、シルト層では製塩土器、Ⅳ－1層では縄文土器、石鏃、石器の細片、Ⅳ－2層では縄文土器、石鏃、石器の細片が出土した。

(益田千遥)

出土遺物

縄文時代

縄文土器 (図18) 153、154はⅣ－2層、155はⅡ－4層、156はⅡ－2層、157はⅡ－1層より出土した。いずれも焼成は良好である。

153～156は胴部片である。153は器形が小さくなることが想定され、内外面ともにやや摩滅気味であり、部分的に剥離している。外面には斜行する2つの粘土帯が貼り付けられる。粘土帯は不揃いであり、指のつまみによる成形と考えられる。また、外面には擦痕がのこり、爪の痕跡は確認されない。内面はナデ調整が施され、胎土は3mm以下の石英粒と、2mm以下の長石粒、角閃石粒、赤

2. 各トレンチの成果

色頁岩粒、金雲母粒を含む。色調は外面がにぶい橙色、粘土帯はにぶい赤褐色を呈し、内面は灰褐色である。154は内面が摩耗し、外面に斜位の捺糸が施され、縄文原体の撚り方は無節とされる。内面はナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、金雲母粒、砂礫を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。155は外面が摩滅し、斜位の条線が施される。内面にナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、砂礫と角閃石粉を含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色である。156は土器片が割れた状態で面的に出土したものであり、全体の器形は甕形を呈する。外面に最大幅11mmを測る1条の凹線が施された後に、ナデ調整と指頭圧痕が施される。外面のナデ調整は、凹線下では斜位を、凹線上では横位を基調とする。内面はナデ調整と指頭圧痕がみられる。ナデ調整は内外面ともに筋が強くのこることから、植物性の繊維を用いた可能性がある。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、砂礫を少量含み、色調は外面が黒褐色、内面は灰褐色とにぶい褐色を呈する。157は口縁端部あるいは肥厚帯部と想定され、器表面はナデ調整や指頭圧痕、剥離によって波打つ。また、幅1mm前後の刻みが施され、「X」字状にもみえる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、砂礫と金雲母粉を含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

156は滋賀里Ⅰ式併行期〔中村2008〕と考えられ、153は縄文時代草創期の可能性があり、154は縄文時代早期初頭、155は縄文時代後期、156は縄文時代晩期の範疇で捉えられる。

(江本晃季)

石器 (図19) 石器は打製石鏃3点、剥片2点を図示している。158は13トレンチⅢ層、159～161は19トレンチⅣ－2層、162は20トレンチⅢ層から出土した。いずれも安山岩製である。

打製石鏃 (158～160) 158は長い二等辺三角形を呈し、基部の抉りが浅く、一方の端部を欠損している。両面ともに両側縁からの広い剥離面をのこし、細かな調整剥離は両面とも一側縁に施されている。現存長3.01cm、現存幅1.41cm、厚さ0.35cmであり、重さ5.20gを測る。159は先端部が丸みをおび、基部は抉りが浅く、その両端部はいずれも欠損している。両面ともに器体に比して大きな剥

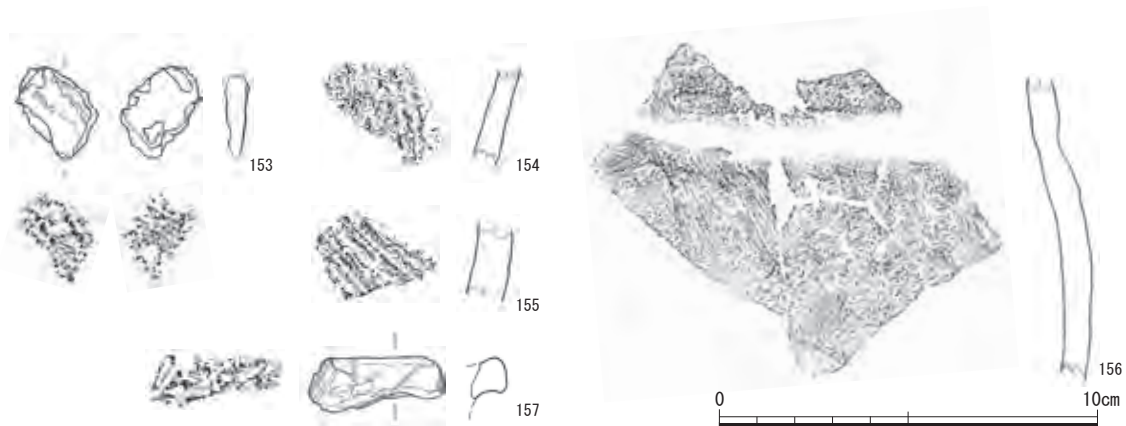


図18 II区19トレンチ出土縄文土器

離面をのこし、とくに片面は広い剥離痕が7面観察できるのみであり、未製品の可能性も考えられる。現存長1.66cm、幅1.03cm、厚み0.24cmであり、重さ1.30gを測る。160は基端部の破片であり、両面ともに丁寧な調整剥離が観察される。現存長1.42cm、現存幅1.61cm、厚み0.22cm、重さ2.20gである。

剥片（161・162） 161も主要剥離面に上下両端からのリングが観察され、両極打法による剥片と判断される。全長3.65cm、幅2.21cm、厚み0.61cmであり、重さ22.05gを測る。162は背面に全周からの剥離痕をのこし、主要剥離面には上下両端からのリングが観察される。片面に加工痕をのこす、両極打法による素材剥片である。全長2.81cm、幅2.26cm、厚み0.51cm、重さ15.55gである。

（村上恭通）

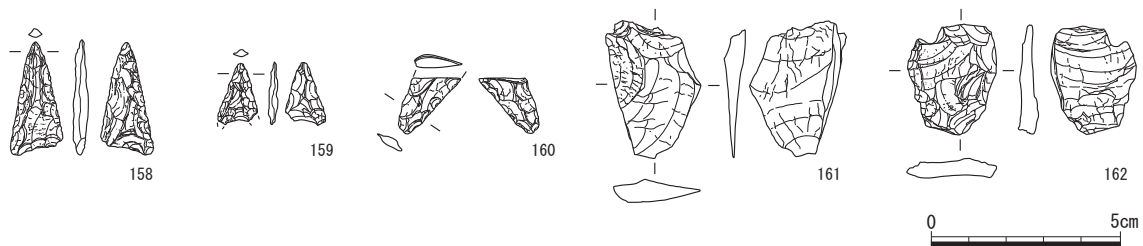


図19 II区出土石器

古墳時代

脚台式製塩土器（図20） 163、164は脚台部であり、いずれも焼成は良好である。体部の底部内面は多くが剥落し、粗い面をみせる。

163は復元底径4.6cmを測る。形態は「ハ」字状であり、端部形状は肥厚し、面が認められる。内面は縦位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がのこる。体部と脚台部の断面には粘土を充填したとみられる痕跡が確認される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、黒雲母もみられる。色調は内面がにぶい赤褐色とにぶい褐色、外面は明赤褐色を呈する。

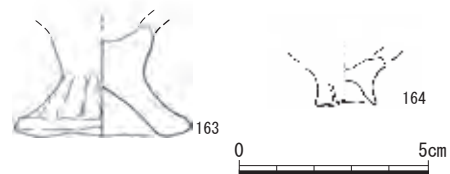


図20 II区19トレンチ出土脚台式製塩土器

164は底径1.6cmを測る。形態は筒状にちかく、端部にかけて先細りする。内面の器表面はなめらかである。外面には体部から脚台部にかけて斜めに施されたナデ調整が確認されるため、体部からの連続成形によって脚台部が成形された可能性がある。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。

163、164はⅡ－4層から出土した。柴田昌児氏による型式分類〔柴田2015〕に基づくと、163は芸予Ⅲ－1類、164は芸予Ⅲ－3類に該当する可能性がある。

（福本佳織）

2. 各トレンチの成果

古代～中世

土師質土器（図21） 165、166は皿、167～172は杯、173～182は甕、183、184は鍋である。いずれも焼成は良好である。

165は復元口径10.1cmを測る。底部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がり、端部付近でやや外反した後、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色を呈する。166は復元口径10.0cmを測る。口縁部はやや直線的に開き、端部は尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整であり、外面下部にはやや強いナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色である。なお、底部内面と端部外面には二次的被熱痕が確認される。

167～170は口縁部である。167は畿内系土師器の口縁部であり、復元口径16.6cmを測る。口縁部はわずかに内湾しながら外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁部内面には1条の沈線がめぐり、外面には指頭圧痕が顕著に認められる。胎土は1mm以下の白色粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。168は復元口径12.5cm、復元底径6.4cm、器高3.3cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、調整は内外面ともに回転ナデ調整である。口縁端部付近の内面には、直径4mm程度の楕円形に近い形状の墨が1ヵ所付着している。胎土は1mm以下の白色粒を少量と金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。169は復元口径12.2cm、底径5.8cm、器高3.7cmを測る。底部から体部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、なかほどから直線気味に口縁部へのびる。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。なお、外面底部および口縁部付近には部分的に二次的被熱痕がみられる。170は直線的に立ち上がり、端部には面がみられる。調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、胎土は2mm程度の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色と黄灰色を呈し、二次的被熱痕が確認される。

171、172は底部である。171は復元底径7.8cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。底部と体部の境には粘土のヨレが観察される。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。172は復元底径6.4cmを測り、底部から体部にかけて直線的にのびる。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は3mm以下の石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色である。

173～182は口縁部である。173は復元口径約20.0cmを測る。口縁部は「く」字状に開き、端部付近でわずかに肥厚し、丸くおさまる。内面には二次的被熱痕が確認され、大部分は器表面が薄く剥離しているため調整は不明瞭である。外面には縦位のハケメが施され、指頭圧痕もみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。174は口縁部であり、口径15.4cmを測る。体部からゆるやかに内湾し、頸部で屈曲した後、外方へ開く。屈曲部内面には粘土のヨレがみられる。外面は指頭圧

痕が顕著である。胎土は2mm以下の赤色粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。焼成は良好である。色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい褐色を呈する。175は直線的に開き、端部外面側には面がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面下半部にはナデ調整と指頭圧痕のようなものがみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面がにぶい赤褐色、外面は褐灰色を呈する。外面に二次的被熱痕がみられる。176はわずかに外反しながら立ち上がり、端部外面側には面をもつ。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面が灰黄褐色であり、外面は二次的被熱により灰色を呈する。177は直線的に開き、端部でやや肥厚する。調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面が灰黄褐色、外面は褐灰色を呈する。外面には二次的被熱痕がみられる。178は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、金雲母を含む。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は褐色を呈する。なお、内面下半部は二次的被熱により黒色化する。179は「く」字状に外方へ開き、体部外面には粗い縦位のハケメが施される。胎土は金雲母を多量に含むほか、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒もみられる。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。口縁部外面は二次的被熱により黒色化する。180はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部内面側には面がみられる。調整は内外面ともに回転ナデ調整である。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色であり、外面は二次的被熱のため部分的に褐灰色を呈する。181はやや直線的に外方へ開き、端部はわずかに内側へ曲がる。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は2mm以下の少量の石英粒と金雲母を含む。色調は内面が黒色と橙色、外面は二次的被熱により黒色を呈する。182は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は4mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内面がにぶい褐色、外面は黒褐色である。

183、184は口縁部である。183は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。外面に強い被熱を受けた二次的被熱痕がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施されており、端部付近は強いナデ調整が観察される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む。色調は内面が灰黄褐色、外面は二次的被熱のため黒色を呈し、一部にぶい赤褐色である。184は直線的に立ち上がり、端部には面をもつ。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含む、金雲母もみられる。色調は口縁端部内面および外面全体はにぶい黄橙色を呈し、それ以外はにぶい橙色である。焼き締まりは固く、二次的に被熱している。

176はⅡ層上面、165～168、172～175、177、179、181～183はⅡ－1層、170、178、184はⅡ－3層、169、171、180はⅡ－4層から出土した。170、182は古代後半、167、171、174～181は10～11世紀、165は11世紀、169は11～12世紀、166、168、172、183、184は12世紀、173は12～13世紀に比定される。

須恵器（図21） 185～188は杯蓋、189～202は杯、203は平瓶である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施され、焼成は堅緻である。

2. 各トレンチの成果

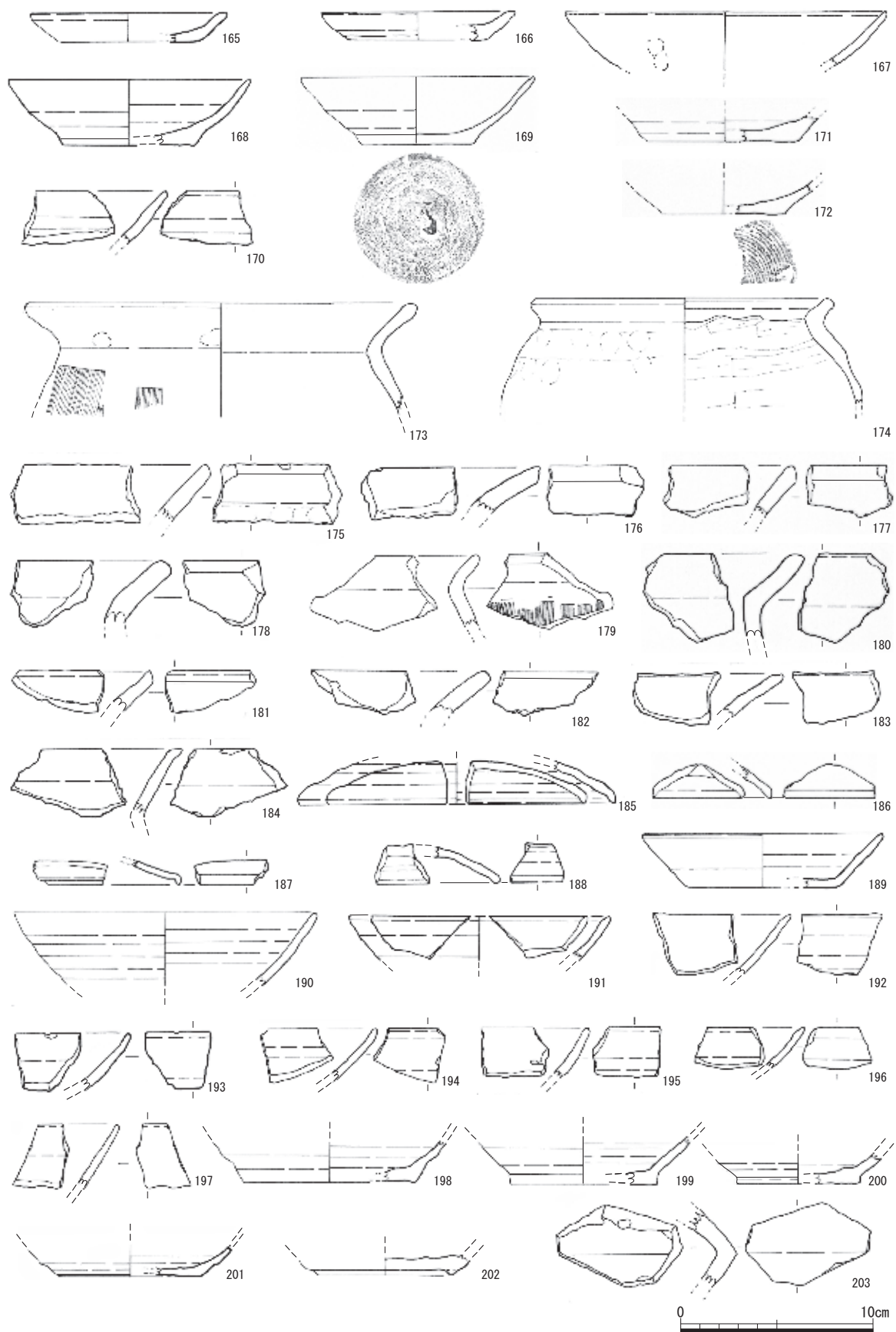


図21 II区19トレンチ出土土器

185～188は杯蓋の口縁部である。185は口縁部で屈曲し、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰白色、外面は灰色であり、外面の上部は二次的被熱により赤灰色を呈する。186は若干内湾しながら端部に向けてのび、わずかに外へ張り出した後、丸くおさまる。天井部と口縁部の境にはやや明瞭な稜をもつ。胎土は1mm以下の長石粒を大量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面は灰色と褐灰色を呈する。187は直線的に端部へ向けてのび、端部で短く垂直に屈曲した後、丸くおさまる。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。胎土は1mm程度の長石粒を含み、1mm以下の角閃石粒を少量と金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。188は若干内湾しながらのび、端部はわずかに外へ張り出し、丸くおさまる。天井部と口縁部の境にはやや明瞭な稜をもつ。胎土は1mm以下の長石粒を大量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面は灰色と褐灰色を呈する。

189～197は口縁部である。189は復元底径7.8cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、回転ヘラ切りされた後、ナデ消されている。口縁端部には一ヵ所打ち欠きのような痕跡がある。また、内外面には墨のようなものが部分的に付着する。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内外面ともに灰色である。190は復元口径15.6cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。ロクロ目が顕著にみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。191は復元口径13.4cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は精緻であり、金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰白色であり、黒色を呈する。内外面ともに二次的被熱痕が認められる。192はゆるやかに外方へ開き、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の石英粒と長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色を呈し、外面は黒色と褐灰色である。外面には二次的被熱痕が認められる。193はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、ナデ調整によりわずかに内湾した後、端部は丸くおさまる。色調は内面が黄灰色、外面は灰色を呈する。194はやや直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。195はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面全体と外面上半部に砂が融着している部分は色調が黄褐色であり、それ以外は褐灰色である。196はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともにロクロ目がやや顕著である。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が黄灰色、外面は暗灰黄色を呈する。197は直線的に開き、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

198～202は底部である。198は削り出し輪高台をもち、復元底径8.9cmを測る。内外面ともにナデ調整による起伏がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰白色を呈する。199は復元底径7.6cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面の底部と体部の境には強いナデ調整がみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。200は復元底径6.4cmを測る。底部と体部の境には、底部を切り離した後の未調整により生じたと推測される粘土のヨレがみられる。胎土は1mm以下の長石粒と金雲

2. 各トレンチの成果

母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。201は復元底径7.6cmを測り、底部の切り離し技法はヘラ切りである。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰黄色である。202は貼り付け高台であり、復元底径7.2cm、高台の高さは0.2cmを測る。内面に強いナデ調整の痕跡がみられる。切り離しは粗雑であり、粘土のヨレや残余がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と金雲母を含む。色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

203は胴部であり、するどく「く」字状に屈曲し、中央部分は張り出す。調整は内外面ともに回転ナデ調整であり、全体的に器壁が厚い。外面上半部には自然釉が観察される。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面が灰色、外面は黄灰色を呈する。

199、200はⅡ層上面、192、201はⅡ－1層、188、190、195、196、197、198、202はⅡ－2層、185、187、189、193、194はⅡ－3層、186、191、203はⅡ－4層から出土した。203は古墳時代後期、185～188、191は8世紀後半～9世紀前半、189、193～197、200は古代後半、192、198、199、201、202は10～11世紀、190は12世紀に比定される。

黒色土器（図22） 204～208は黒色土器A類、209、210は黒色土器B類である。器種はいずれも碗であり、焼成は良好である。

204は直線的に開いた後、端部は丸くおさまる。内面には密にミガキが施されるものの、外面はほとんどみられない。胎土は2mm以下の長石粒と金雲母を含み、砂粒が器表面にやや目立つ。色調は内面が黒色、外面はにぶい橙色を呈する。205はやや直線的に立ち上がり、端部内面側には浅い沈線のようなものが1条めぐる。内外面ともに横位のミガキが施されており、内面は密である。胎土は金雲母を含む。色調は内面が黒色、外面はにぶい黄橙色を呈し、外面の口縁端部付近は黒色である。206はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味である。端部内面には沈線が1条めぐる。内外面ともにミガキが施されているが、間隔がある。金雲母を含む。色調は内面が黒褐色、外面は暗灰黄色を呈する。207はゆるやかに立ち上がり、なかほどでわずかに屈曲し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキが施されており、やや間隔がある。胎土は金雲母を含む。色調は内面外面ともに灰色とにぶい黄橙色である。

208は底部であり、輪高台が貼り付けられる。復元底径6.2cm、高台の高さは0.8cmである。内面にはミガキが施される。胎土は精緻であり、1mm以下の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内面が黒色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

209、210は黒色土器B類碗の口縁部である。209は復元口径16.4cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。端部内面には1条の沈線がめぐり、内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内外面ともに黒色である。210は復元口径12.0cmである。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。口縁部内面に1条の沈線がめぐり、内面は横位のミガキがみられ、外面は摩滅しているため調整が不明瞭である。胎土は精緻であり、1mm以下の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内外面ともに黒色を呈する。

208はⅡ層、204～207、209はⅡ－1層、210はⅡ－3層から出土した。208は9～10世紀、204～207、209、210は10～11世紀と考えられる。

緑釉陶器（図22） 211は碗の底部である。復元底径6.1cm、高台の高さは0.5cmを測る。内面には1条の圈線がめぐり、外面には輪花がみられる。高台は有段貼り付け輪高台であり、「ハ」字状に開き、面々に段を有する。底部外面には回転糸切り痕がみられる。胎土は精緻であり、色調は灰色を呈する。釉調は濃緑色を呈する。焼成は堅緻である。高橋照彦氏の有段輪高台 y 2〔高橋1995〕に該当し、近江産と考えられる。Ⅱ－1層から出土し、時期は10世紀後半に比定される。

土錘（図22） 212は管状土錘、213、214は有溝土錘、215は棒状土錘である。いずれも焼成は良好である。

212は完形品の管状土錘であり、円筒形を呈する。全長5.6cm、直径2.9cm、孔径0.9cm、重量49.4gを測る。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕もみられる。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、1mm以下の石英粒もみられる。色調はにぶい褐色と橙色を呈する。

213は2分の1程度が残存する。残存長6.1cm、残存幅3.5cm、重量46.2gを測る。平面形は紡錘形、

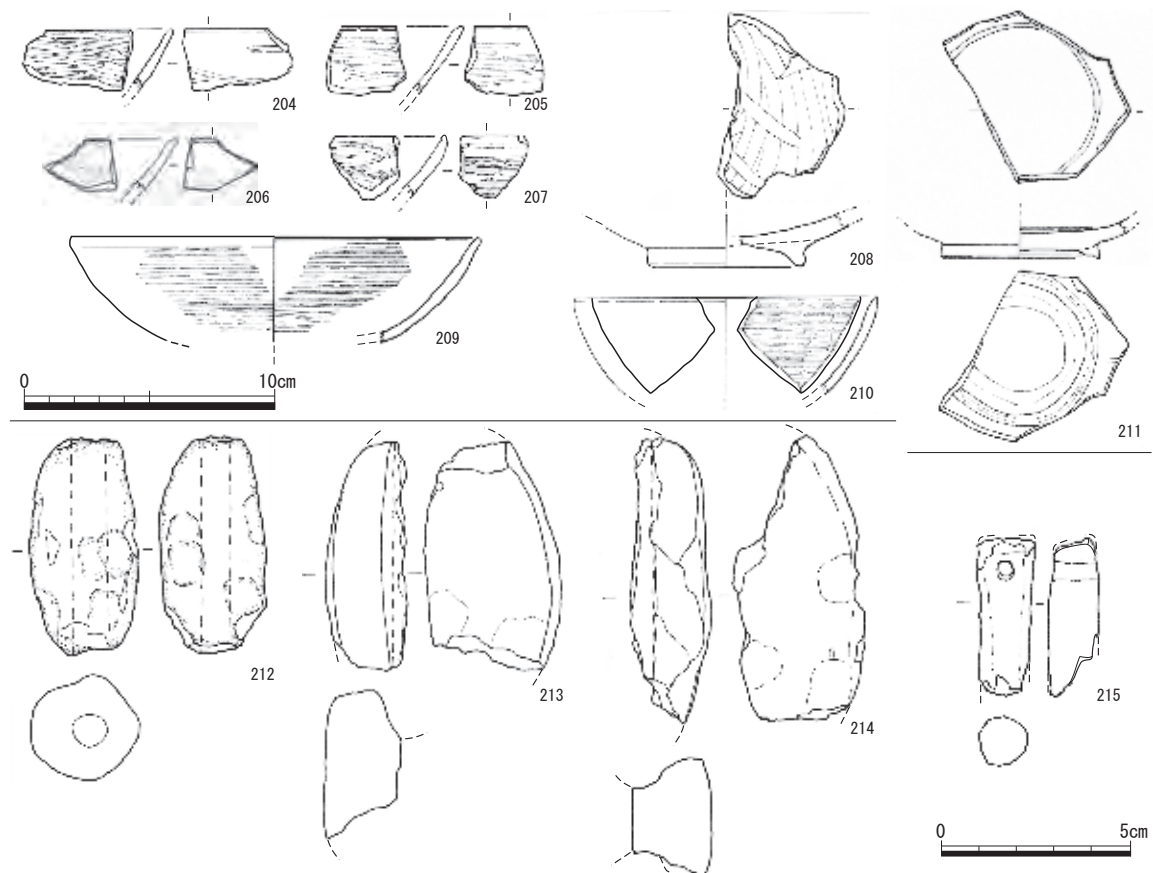


図22 Ⅱ区19トレンチ出土土器・土製品

2. 各トレンチの成果

断面形は「H」字状になると推測される。内外面ともにナデ調整が施され、内面には指頭圧痕も認められる。胎土は3mm以下の長石粒を含み、金雲母が多量にみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。214は大型の有溝土錘であり、全体の3分の1程度が残存する。残存長7.6cm、残存幅3.2cm、重量46.0gを測る。平面形はおそらく紡錘形であり、断面形は「H」字状を呈するものと想定される。内外面ともにナデ調整が施され、内面には指頭圧痕もみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。焼成は良好である。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。

215は上端と下端を欠くものの、ほぼ全形が残存する。残存長4.15cm、直径1.3cm、孔径0.5cm、重量7.8gである。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。外面にナデ調整が施されている。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

212、213、214、215はⅡ－1層から出土した。

(植田知也)

古代製塩土器 (図23) 216～223は焼成が良好で、224～230は堅緻である。いずれも赤色化や器表面の荒れ、剥離などが認められ、二次的に被熱している可能性がある。

216～223は口縁部である。そのうち217～219、222はわずかに内湾しながら外方へ開き、216、220、221、223は直線的に外方へ開く。また、口縁端部は216、219、220、222、223に面がみられ、工具などを用いて口縁端部が成形された可能性がある。また、217、218、221は丸くおさまる。216は内面に横位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm以下の角閃石粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面が灰黄色、外面は灰黄褐色を呈する。217は内面に斜位のナデ調整のような痕跡がかすかに観察され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm程度の石英粒や1mm以下の角閃石粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい赤褐色、外面はにぶい橙色である。218は内面に横位のナデがみられ、外面は大きく剥離しており、塩類風化の可能性がある。胎土は3mm以下の長石粒を多量に含むほか、1mm以下の石英粒がみられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色と橙色を呈する。219は内面にナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色とにぶい橙色である。内外面ともにひび割れが多く観察される。220は外面に指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒を含むほか、1mm程度の石英粒が少量みられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は橙色を呈する。221は内面上半部に横位のナデ調整がみられ、下半部は剥離する。外面には指頭圧痕が確認される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含むほか、2mm以下の石英粒がみられ、金雲母も含む。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい橙色である。222は内面に横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色と灰黄褐色、外面は橙色を呈する。223は内面に斜位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。

色調は内外面ともににぶい褐色である。

224～230はいわゆる「倉浦式土器」の可能性もある。224は復元口径14.8cmを測るが、さらに口径が小さくなる可能性もある。口縁部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、端部はわずかに肥厚し、丸くおさまる。内面は横位のナデ調整と指頭圧痕、外面には指頭圧痕が顕著に確認される。胎土は5mm以下の長石粒と1mm程度の石英粒を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面は明赤褐色とにぶい黄橙色を呈する。外面にはひび割れが多く観察される。225は復元口径10.6cmを測る。口縁部はやや直線的に開き、端部近くでわずかに内側へ曲がる。端部はやや肥厚し、丸くおさまる。内面は横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が顕著である。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含み、1mm程度の石英粒が少量みられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい赤褐色と灰黄褐色である。外面にはひび割れが多い。226は復元口径8.0cmを測るが、さらに口径が大きくなる可能性もある。口縁部はやや直線的に開き、端部はわずかに肥厚して丸くおさまる。内面には横位のナデ調整がみられ、外面は指頭圧痕が顕著である。胎土は5mm以下の長石粒と2mm以下の石英粒を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色と灰黄色を呈する。227は口縁部がなかほどでわずかに曲がった後、直線的にのびる。端部は部分的に面がみられる。内面にはナデ調整と指頭圧痕、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい赤褐色、外面はにぶい黄褐色である。228はやや直線的に開き、端部はわずかに肥厚し丸くおさまる。内面はナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は3mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄褐色と褐灰色、外面はにぶい黄褐色を呈する。

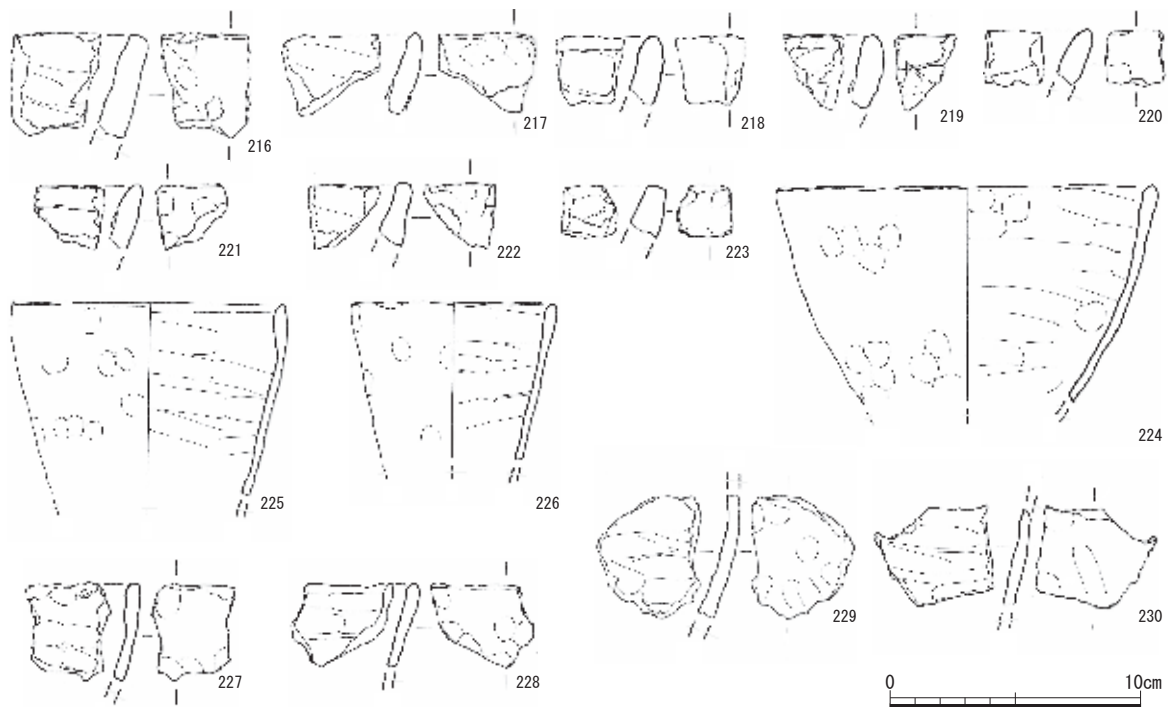


図23 II区19トレンチ出土古代製塩土器

2. 各トレンチの成果

229、230は胴部である。229は内面にナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。他の口縁部片と比べると器壁が全体的に厚く、底部付近の破片にあたる可能性がある。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい黄橙色である。230は内面にナデ調整、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。非常に焼き締まりが固い。

217はⅠb層、223はⅡ-2層、216、218、222、224、225、230はⅡ-3層、220、221、228、229はⅡ-4層、219、226はシルト層から出土した。227は層位不明である。

(福本佳織)

鉄製品 (図24) 231は束ねられた状態でⅡ-2層から出土した舟釘6点と鏝1点であり、錆びで固着していた。全体として、長さは11.5cm、幅5.1cm、最大厚3.9cm、重量185.0gを測る。釘はいずれも替折釘であり、脚部は外にゆるやかに湾曲する。脚の先端に注目すると、湾曲の強いものが2点みられる。釘の断面形態は4点が長方形、2点は正方形を呈する。釘の長さは最短のもので7.1cm、最長のものは10.0cmを測る。鏝は両端部がほぼ完全に折り曲げられている。断面形態は長方形を呈し、全長5.0cmを測る。折れ曲がっている釘が含まれていることから、使用済みの鉄器をまとめて保管していた可能性が考えられる。

(ブズレン・サミ)

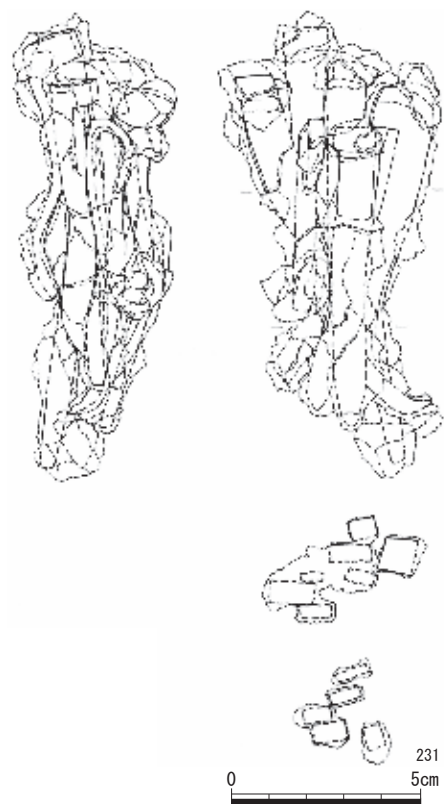


図24 Ⅱ区19トレンチ出土鉄製品

銅製品 (図25) 232は煙管の雁首である。全長3.7cm、火皿の直径約1.5cm、火皿の縁辺から脂返しまでの高さは約1.6cm、重さ6.9gである。火皿高は低く、碗形を呈する。脂返しの湾曲は小さく、首部は短い。首部には肩を思わせる稜線がみられる。羅字側には五厘筋がみられ、敲打痕も認められる。233は寛永通寶である。「寶」の字が「ス貝寶」となっているため、古寛永（初鑄年1636年）である。直径約2.4cm、厚さ約0.1cm、重さ1.8gである。

232、233はⅠb層から出土した。232は19世紀ごろの可能性のある〔古泉2012〕。

(益田千遥)

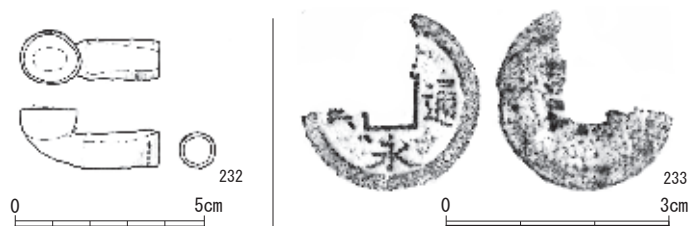


図25 Ⅱ区19トレンチ出土銅製品

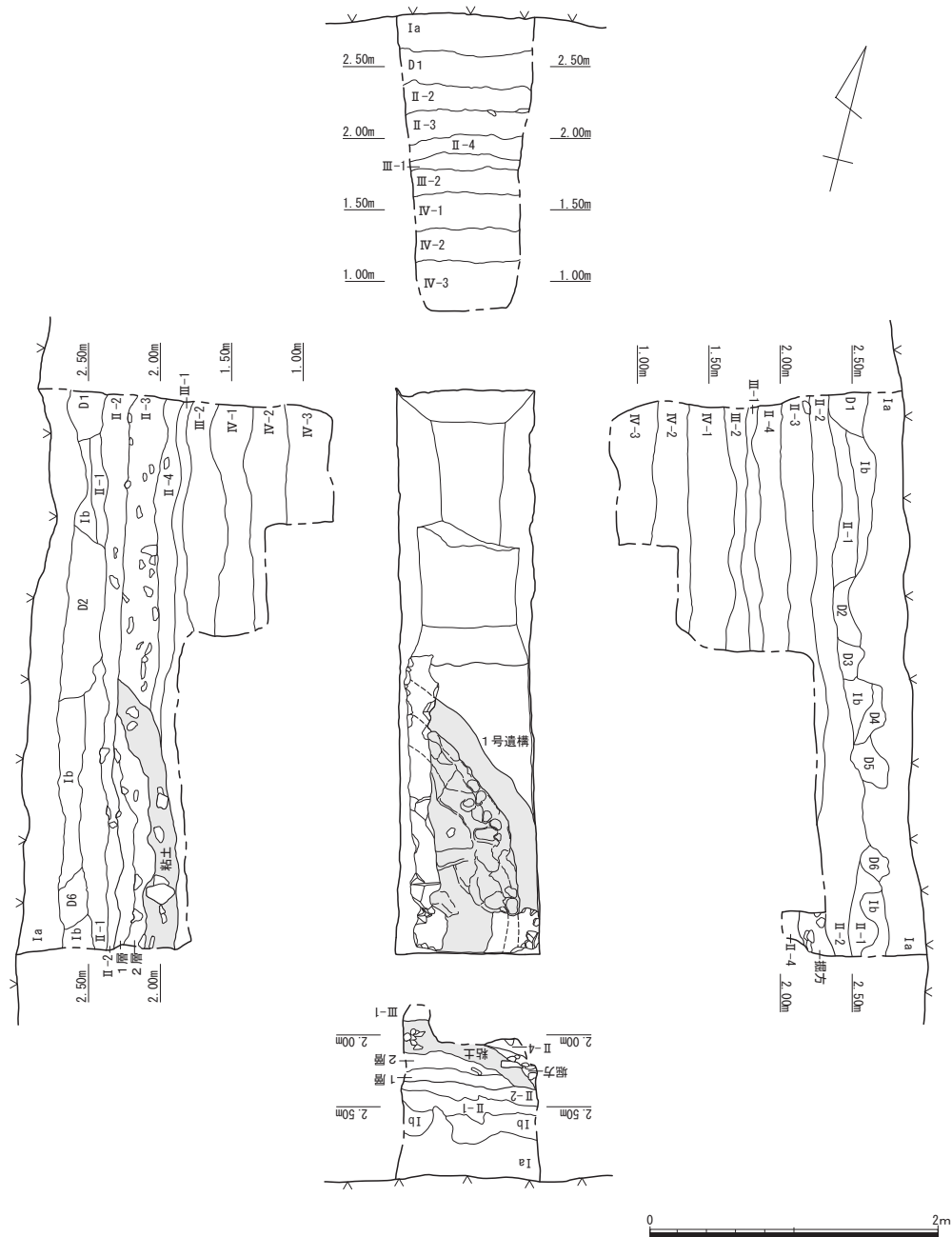
(3) 20トレンチ (図26)

第13次調査までに明らかになった縄文時代の包含層の広がりや、古代における製塩活動の痕跡を確認するために、第14次調査で新しく設定した。No.13の杭から西側に3.5mの地点より、南へ2.5mのポイントを北西隅とする、東西1.0m、南北4.0mの長方形の調査区である。トレンチ北側では標高0.8mまで掘り下げ、湧水が確認されたため、発掘を停止した。南側ではⅡ-3層まで掘り下げたところ、南壁から約2mの範囲で1号遺構が検出されたため、この遺構を保存するために掘削を停止し、調査を終えた。

土層は表土を含めて大きく4つに分層される。Ⅰ層は表土で、Ⅰa層、Ⅰb層に分層される。Ⅰa層はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂主体である。層厚は12～50cmである。Ⅰb層は浅黄色を呈する。粗粒砂～極粗粒砂をやや含む中粒砂を主体とし、層厚は3～22cmを測る。また、調査区北側にはⅠa層の下にⅠb層、Ⅱ-1層まで掘り込まれた攪乱が部分的に認められる。さらに、東壁、西壁には同様にⅠb層、Ⅱ-1層まで掘り込まれた田畑の畝間とみられる痕跡が部分的にみられた。これらの攪乱は現代のゴミや遺物を含む。Ⅱ層は4層に分かれる。Ⅱ-1層は赤灰色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂主体である。層厚は8～20cmである。Ⅱ-2層は赤黒色であり、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、10cm前後の礫をまばらに含む。貝類が多く含まれ、巻貝はほぼ完形の状態であるのに対し、二枚貝はほとんどが破碎していた。層厚は4～34cmを測る。Ⅱ-1層とⅡ-2層の間には部分的にマンガンの集積した箇所が認められた。Ⅱ-3層は赤黒色を呈し、中粒砂主体である。10cm前後の円礫、亜角礫、角礫を含み、層厚は15～28cmである。Ⅱ-4層は明黄褐色を呈し、中粒砂を含む粗粒砂を主体とする。層厚は9～25cmを測る。Ⅲ層は2つに分層される。Ⅲ-1層は明褐色であり、中粒砂～極粗粒砂を含む粗粒砂主体である。北側では、土質が同様に色調がにぶい赤褐色を呈する箇所を確認したが、遺構ではないと考えられる。層厚は3～12cmである。Ⅲ-2層は明褐色を呈し、中粒砂、極粗粒砂を含む粗粒砂主体である。3cm大の礫を少量含む。層厚は7～34cmを測る。Ⅳ層は3つに細分される。Ⅳ-1層は明褐灰色であり、粗粒砂～極粗粒砂をやや含む中粒砂主体である。2～5cm前後の礫をまばらに含む、層厚は15～34cmである。Ⅳ-2層は明褐灰色を呈し、中粒砂、極粗粒砂を含む粗粒砂を主体とする。層厚は最大31cmを測る。Ⅳ-3層はにぶい黄橙色を呈し、中粒砂を少量、極粗粒砂を多く含む粗粒砂主体である。遺物は出土していない。

各層の主な出土遺物の概要は以下の通りである。Ⅰa層からは須恵器、Ⅰb層からは土師質土器、吉備型土師器、Ⅱ-1層からは土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、土錘、Ⅱ-2層からは土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、鍛冶関連遺物、Ⅱ-3層からは縄文土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、移動式カマド、土錘、Ⅱ-4層からは製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、移動式カマド、Ⅲ-1層からは縄文土器、剥片、脚台式製塩土器、土師質土器、Ⅳ-1層からは縄文土器が出土した。

2. 各トレンチの成果



I a 層：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。I b 層：浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂をやや含む。しまりあり。II-1 層：赤灰色 (2.5YR4/1) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性あり。II-2 層：赤黒色 (2.5YR2/1) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。10cm大の礫をまばらに含む。しまりあり。粘性あり。II-3 層：赤黒色 (2.5YR2/1) 中粒砂主体。10cm大の円礫・亜角礫・角礫を含む。しまりあり。粘性あり。II-4 層：明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂主体。中粒砂を含む。貝を含む。しまりあり。粘性あり。III-1 層：明褐色 (7.5YR5/6) 粗粒砂主体。中粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性あり。III-2 層：明褐色 (7.5YR5/6) 粗粒砂主体。中粒砂～極粗粒砂を含む。3cm大の礫を少量含む。しまりあり。粘性あり。IV-1 層：明褐色 (7.5YR7/2) 中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂をやや含む。しまりなし。粘性あり。IV-2 層：明褐色 (7.5YR7/2) 粗粒砂主体。中粒砂と極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性あり。IV-3 層：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粗粒砂主体。中粒砂を少量、極粗粒砂を多く含む。1cm前後の礫を含む。しまり強い。粘性あり。D：攪乱。1号遺構 1層：黒褐色 (7.5YR2/2) 中粒砂主体。極粗粒砂を含む。しまりなし。粘性なし。2層：黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまりなし。粘性なし。粘土：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまり弱い。粘性弱い。

図26 II区20トレンチ平面図・土層図

1号遺構

トレンチ南側に先行トレンチを設けて掘り進めたところ、暗灰黄色の粘土が面的に検出され、さらに粘土が浅鉢状に掘りくぼめた土坑の内面に貼り付けられていることが判明し、これを1号遺構とした。

復元直径は200cm以上、深さ約50cmを測る土坑で、全体形は楕円形を呈すると推測される。Ⅱ－3層から掘り込まれ、Ⅲ層にまでおよぶ掘り方が確認されている。礫を置き、その上に厚さ5～20cm程の暗灰黄色粘土が全面に貼り付けられている。遺構の底面は段をなしており、底面から礫はほとんど検出されていない。貼り付けた粘土は砂粒やシルトを含み、質が均一である。粘性は弱く、ブロック状に崩れる。埋土は2層で、その下に粘土がある。層位的にⅡ－3層から掘り込まれていること、そして粘土直上から黒色土器が出土していることから、遺構自体の時期は古代に属すると推測される。なお焼土や木炭は検出されておらず、被熱の痕跡も確認されていない。また、遺構内からは約20cm大の被熱した礫が1点検出されたものの、本遺構にともなうものではなく、周辺にカマドなどが存在し、その構築材であった可能性が推測される。

本遺構の用途として、製塩に関わる鹹水溜めとしての機能が想定され、粘土は水分を通さない役割を担っていたものと考えられる。本遺構にともない、1層から土師質土器、須恵器、吉備型土師器、2層から黒色土器が出土している。

(福本佳織)

出土遺物

縄文時代

縄文土器 (図27) 234～243、246～248はⅢ層、244はⅡ－3層、245は礫下(Ⅱ－3～Ⅲ層)から出土した。234～248はいずれも深鉢で、焼成は良好である。

234は口縁部片で、内外面ともに摩滅気味である。口縁部はやや外方へ開き口縁端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、外面には底が平たく浅い斜位の沈線が2条みられ、沈線幅は6mmを測る。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒と雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。235は口縁部片で、やや肥厚しながら内傾し、端部を丸くおさめる。外面には方形と円形による二重区画文が描出され、4条の横位の沈線もみられる。沈線幅は2～3mmを測り、底はやや平たい。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、砂礫と雲母粉を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。236、237は胴部片で、いずれも無文土器である。236は内外面ともに巻貝条痕が施され、外面は斜位、内面は横位を基調としている。外面はその後部分的にナデ調整が施され、胎土に3mm以下の砂礫、2mm以下の長石粒、石英粒、さらに角閃石粉と雲母粉がみられる。色調は外面がにぶい褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。237は内外面ともにナデ調整を施し、外面はその上に研磨を行う。胎土は3mm程度の砂礫、1mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉、雲母粉を含み、色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい黄橙色である。

238、239は肥厚がみられる口縁部片であり、238は波状口縁と考えられる。口縁部はやや外方へ

2. 各トレンチの成果

開き、口縁端部は先細る。外面には幅1mm前後の浅い沈線を2条施し、内外面ともにナデ調整と指頭圧痕によって、器表面がやや波打つ。胎土には1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒、砂礫を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。239は口縁部が内傾し、口縁端部を丸くおさめる。口縁部付近の肥厚は粘土紐積み上げ時の残余とみられる。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を少量含み、1mm以下の金雲母粒もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

240～243は外面に縄文が施される胴部片で、240～242の原体は単節RLである。240は外面にナデ調整や指頭圧痕がのこる。242は外面が摩滅しており、縄文が明瞭に観察されない。胎土はいずれも2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を含み、240には4mm程度の角閃石粒、砂礫と金雲母粉、241には4mm程度の石英粒と雲母粉、242には1mm以下の金雲母粒がそれぞれみられる。色調はいずれも内外面ともににぶい橙色あるいはにぶい黄橙色を呈する。243は外面に節が長大な単節RL縄文と無節Lを撚り合わせた原体による回転施文が行われる。内面はナデ調整が施され、部分的に痕跡がすどくのこる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、雲母粒が少量みられ、色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄色を呈する。

244、245は条痕が施される胴部片で、244は外面が摩滅している。内面には横位の条痕が施され、原体は二枚貝とみられる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、砂礫と雲母粉を含み、色調は外面がにぶい橙色、内面は灰黄褐色である。245は外面の一部に斜位の二枚貝条痕を施し、内面にはナデ調整と指頭圧痕をのこす。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒、金雲母粒、砂礫がみられ、色調は外面がにぶい赤褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

246～248は内外面ともにナデ調整または指頭圧痕のみで成形された胴部片で、247、248は底部付

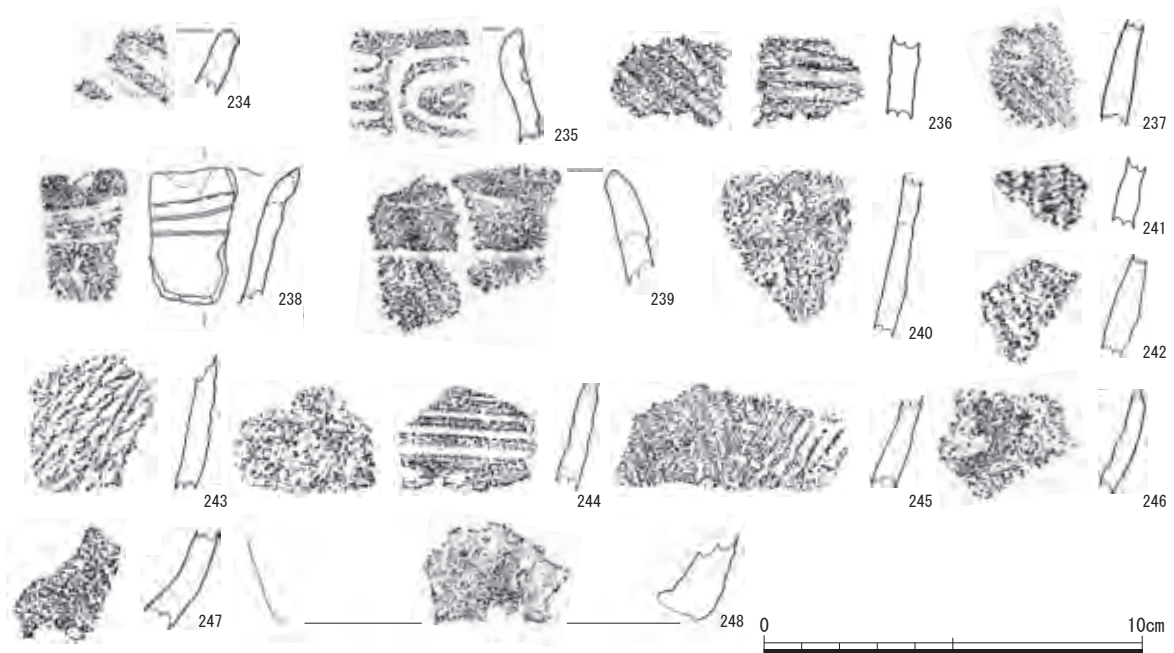


図27 II区20トレンチ出土縄文土器

近の破片と考えられる。246は器厚が2～5mmと薄手である。また246、248はナデ調整と指頭圧痕により、246は外面が、248は内外面ともに器表面が波打つ。胎土はいずれも3mm程度の石英粒、砂礫と1mm以下の長石粒、石英粒、砂礫を含み、246には3mm程度の砂礫と1mm以下の角閃石粒、金雲母粒、247には1mm以下の3mm程度の長石粒と1mm以下の角閃石粒、金雲母粒、248には1mm以下の赤色頁岩粒と金雲母粉がそれぞれみられる。色調は246と248が内外面ともににぶい黄橙色を呈し、247は外面がにぶい褐色、内面はにぶい橙色である。

234は縄文時代中期末～後期前半、235は緑帯文土器前半期の可能性があり、縄文時代後期前葉と考えられる。236、237は縄文時代後期前半の範疇で捉えられ、238～248は時期が不明である。

(江本晃季)

古墳時代

脚台式製塩土器 (図28) 249は脚台部であり、復元底径5.0cmを測る。形態は「ハ」字状であり、端部外面には面がみられる。なお、残存状態が良好ではなく、内面の調整方法および脚台部の成形方法は不明である。外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を含み、雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。焼成は良好であり、体部の底部内面は多くが剥落し、粗い面をみせる。

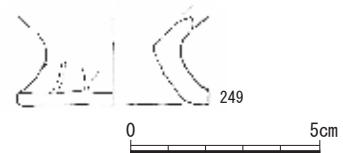


図28 II区20トレンチ出土脚台式製塩土器

柴田昌児氏による型式分類に基づく、249は芸予Ⅲ類に該当する可能性がある〔柴田2015〕。249の出土層位は不明である。

(福本佳織)

古代～中世

土師質土器 (図29) 250～257は皿、258～261は杯、262は椀、263～272は甕、273は鍋である。272は鍋の可能性も考えられる。いずれも焼成は良好である。

250～253は畿内系土師器の皿であり、口縁部の断面形態は「て」字状を呈する。250は復元口径9.5cmを測り、口縁端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整と指頭圧痕がみられ、特に外面の指頭圧痕は顕著である。胎土は金雲母を多量に含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。251の器壁は最大厚4.0mmとやや厚い。内外面ともにナデ調整が施され、外面下部には指頭圧痕も認められる。胎土は1mm以下の赤色粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。252は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。253は内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は精緻であり、雲母がみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。254～256も口縁部である。254は復元口径10.6cmを測り、器高は1.3cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土には金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。255は復元口径9.0cmを測り、内

2. 各トレンチの成果

外面ともにナデ調整が施され、外面中央には粘土のヨレがみられる。胎土には金雲母を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい褐色を呈する。256はやや外反しながら開き、なかほどで厚みを減じ、口縁端部は尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1 mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を少量含み、金雲母が多量にみられる。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。

257は底部である。復元底径6.0cmを測り、底部の切り離し技法は回転糸切りである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は4 mm程度の長石粒を少量含み、1 mm以下の長石粒、角閃石粒、雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

258は畿内系土師器の杯である。口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁端部外面には、浅い沈線のようなものが1条めぐり、内外面ともにナデ調整が施され、外面の下半部には指頭圧痕が顕著にみられる。胎土は1 mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい褐色を呈する。

259～261は底部である。259の復元底径は7.9cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は8 mm程度の長石を少量と雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。260は復元底径5.4cmを測り、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は3 mm程度の長石粒を少量と金雲母を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。261は復元底径6.0cmを測る。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2 mm以下の長石粒と石英粒、金雲母を含む。色調は内面が赤色、外面は褐灰色を呈する。二次的に被熱した可能性がある。

262は口縁部であり、体部なかほどで強く曲がった後、ゆるやかに立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1 mm以下の長石粒と角閃石粒、雲母を含む。色調は内面がにぶい褐色、外面は暗灰色を呈する。

263～273は口縁部であり、大半が部分的に二次的に被熱した痕跡がみられる。263は直線的に外方へ開き、端部は面をもつ。胎土は1～2 mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が明赤褐色、外面は褐色を呈する。264は直線的に外方へ開き、端部外面には面がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は4 mm程度の長石をわずかに含む。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。265は外へ直線的に開き、端部には平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は3 mmほどの赤色粒を少量と2 mm以下の長石粒、角閃石粒を含み、金雲母も含まれる。色調は内面がにぶい褐色、外面は黒褐色を呈する。266は265と同様の特徴をもち、同一個体の可能性がある。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は1 mm以下の長石粒と角閃石粒、金雲母を含む。色調は内面が灰褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。267は他のものが端部に平坦面をもつものが多い一方で、端部はやや丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1～2 mm程度の長石粒、石英粒、金雲母を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。268は口縁端部外面に面をもち、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2 mm以下の長石粒、石英粒、金雲母を含む。色調は内面が橙色、外面は褐灰色を呈する。

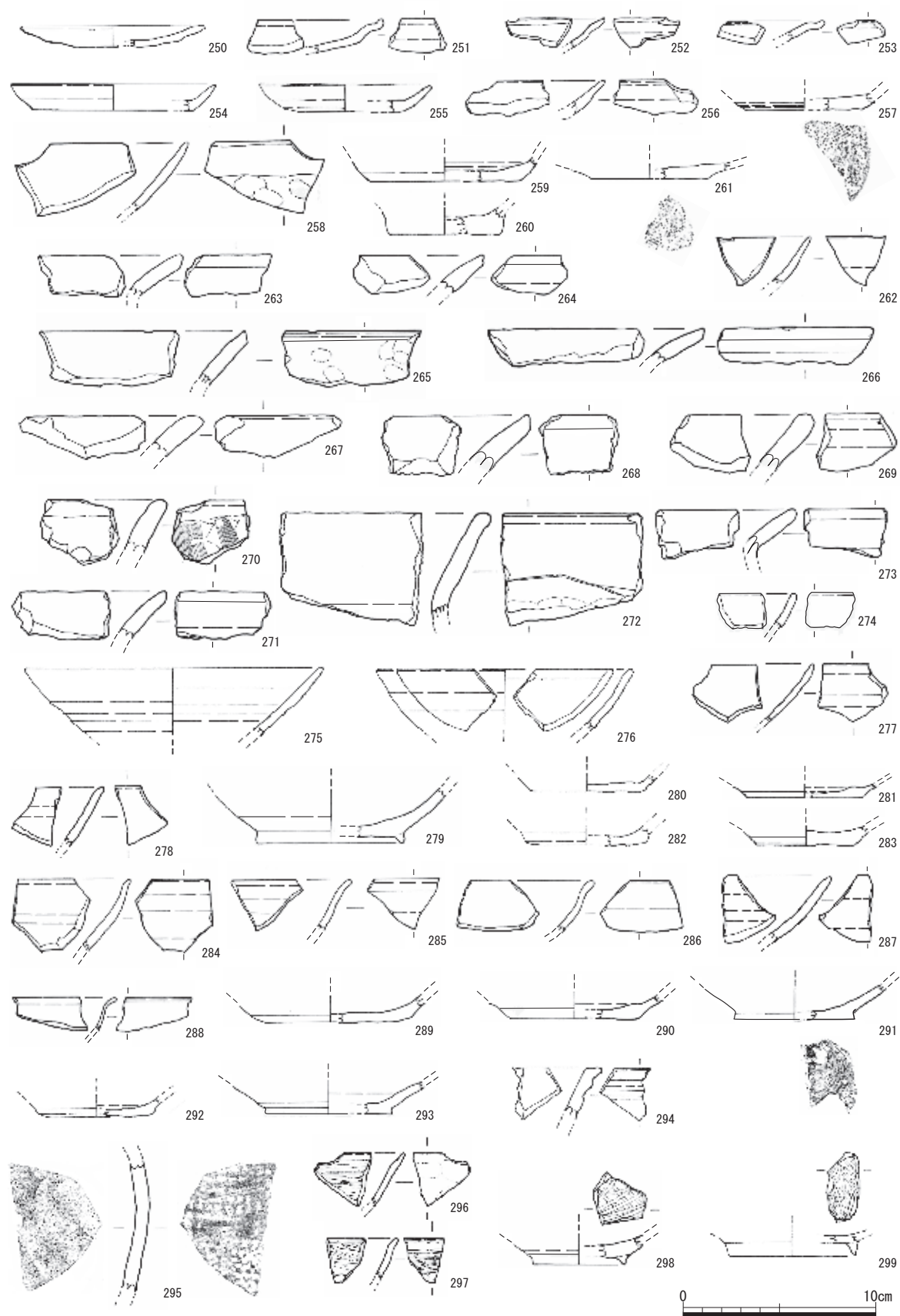


図29 II区20トレンチ出土土器 1

2. 各トレンチの成果

269は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は2～3mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は橙色を呈する。270は内外面ともにナデ調整が施され、外面には縦位のハケメと指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を含み、雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。271はわずかに外反しながら開き、端部外面には面をもつ。内外面ともにナデ調整が施され、特に外面は顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面は灰褐色を呈する。272はほぼ直線的に外方へ開き、端部には面をもつ。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒、赤色粒を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

273は口縁部である。頸部から「く」字状に大きく開くことが想定され、端部には平坦面がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒のほか、金雲母を多量に含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。

250、253、255、258、271はⅡ－1層、251、256、263、264、269、273はⅡ－2層、254、257、259、261、265、268、272はⅡ－3層、262、267、270はⅡ－4層、260は1号遺構粘土直上、266は1号遺構礫下から出土している。252は出土層位不明である。255、256、262、265、267、268は古代後半に位置付けられる。252は10世紀前半、250、259、260、263、264、266、269、270は10世紀～11世紀、251、253、254、271は11世紀、272は11世紀～12世紀、257、258、261、273は12世紀に比定される。

須恵器（図29） 274～283は杯、284～293は碗⁽⁷⁾、294、295は甕であり、いずれも焼成は堅緻である。

274～278は口縁部である。274は下部でわずかに屈曲した後、ゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒と灰色粒を少量含む。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。275は復元口径15.3cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、顕著なロクロ目がみられる。なお、外面の一部に自然釉の付着が認められる。胎土は2mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面が褐灰色、外面はにぶい黄橙色を呈する。276は復元口径13.4cmを測る。口縁部はゆるやかに立ち上がり、内外面ともにナデ調整が施され、顕著なロクロ目がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。277はゆるやかに外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1～2mm程度の石英粒と金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。278は外方へ開き、端部付近でわずかに外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内面が褐灰色、外面は黄灰色を呈する。

279～283は底部である。279は復元底径7.6cm、高台の高さは0.6cmを測る。底部に輪高台が貼り付けられており、断面形は三角形状を呈する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は2mm以下

の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。280は復元底径6.2cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。281は復元底径6.0cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、内面のロクロ目が顕著である。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒のほか、金雲母を少量含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。282は復元底径6.4cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面が黄灰色、外面は灰色を呈する。283は復元底径5.0cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。

284～288は口縁部である。284は内湾しながら立ち上がり、外面上半にナデ調整が施されることで端部付近はわずかに外反し、尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに褐灰色を呈する。285は口縁部が直線的に立ち上がり端部付近で強く外反する。口縁端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。286はやや内湾しながら立ち上がり、端部付近で外反する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。287は体部から口縁部にかけてゆるやかに外方へ開き、口縁部上半でやや内湾気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味におさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石と角閃石粒を含み、雲母もみられる。色調は内面が暗灰色、外面はオリーブ黒色を呈する。288は口縁部がゆるやかに立ち上がり、口縁端部で強く外反する。器壁が2mm前後と非常に薄い。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

289～293は底部である。289は復元底径7.6cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。290は復元底径6.5cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の角閃石粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内面が灰白色、外面は灰黄色を呈する。291は東播系須恵器の可能性がある。復元底径6.1cmを測り、底部の切り離し技法は回転糸切りである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。292は復元底径5.4cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。293は復元底径6.6cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

294は口縁部である。内面と口唇部には自然釉がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面は明瞭な段がみられる。胎土は精緻で、1mm以下の長石粒、角閃石粒、雲母粒を少量含む。色

2. 各トレンチの成果

調は内外面ともに灰色を呈し、外面の一部は黒褐色である。

295は胴部である。内面にはナデと指頭圧痕が認められ、外面には格子目タタキが施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を含む。色調は内面が灰色、外面は黒色である。亀山焼の可能性はある。

279、283はⅡ－1層、282、284、287はⅡ－2層、274、277、278、280、285、290～295はⅡ－3層、276、286、288、289はⅡ－4層、275、281は1号遺構から出土している。274、287は古代、275～279、283～286、292、294、295は古代後半に位置付けられる。282、288は9世紀～10世紀、280、281、289、293は10世紀～11世紀、290は11世紀、291は12世紀に比定される。

黒色土器（図29・30） 296～299は黒色土器A類、300～311は黒色土器B類である。器種はいずれも碗であり、焼成は良好である。

296、297は口縁部である。296は口縁部がやや直線的に立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。端部内面には沈線が1条めぐる。内面には横位のミガキが密に施され、外面には端部のみ横位と斜位のミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内面が暗灰色、外面はにぶい黄橙色を呈する。297は口縁端部付近で強いナデ調整により強く外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに密にミガキが確認されるが、外面端部付近にはミガキはみられない。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面が黒色、外面は橙色を呈する。

298、299は底部である。298は復元底径4.8cmを測り、内面に斜位のミガキ、外面には回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面が黒褐色、外面はにぶい褐色を呈する。299は復元底径6.6cmを測り、高台の断面形状は丸い。内外面ともにミガキが施され、胎土は金雲母を含む。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒色を呈する。

300～309は口縁部である。300は内湾気味に外方へ開き、端部でわずかに外反する。端部内面には明瞭な沈線が1条めぐり、口唇部には面をもつ。内外面ともに横位と斜位にミガキが密に施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は金雲母を含む。301はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、端部付近でわずかに外反し、丸くおさまる。内面は横位、外面は斜位のミガキが施される。外面には指頭圧痕もみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。302は端部内面に斜位の沈線が1条みられる。内面は斜位のミガキが密に施され、外面はわずかに斜位のミガキが確認される。胎土は長石粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。303はやや内湾しながら開き、端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが施される。胎土は精緻で、金雲母を含む。色調は内外面ともに黒色である。304は内外面ともにナデ調整と斜位のミガキが施され、内面には1条の沈線がめぐる。胎土は長石粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。305はやや直線的に開き、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐる。内面は横位のミガキ、外面には横位と斜位のミガキがみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。306は外方へ直線的に開き、端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐる。内外面ともにナ

デ調整とミガキが施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内面が黒色、外面は暗灰色を呈する。307は口縁部がゆるやかに立ち上がり、端部付近で外反し丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐる。内外面ともに横位のミガキが施され、内面は密である。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。308はわずかに外方へ開いた後外反し、端部は丸くおさまる。内面には横位のミガキ、外面には横位と斜位のミガキがみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに黒色である。309の口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさまる。外面にはミガキがわずかにみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。

310、311は底部である。310は復元底径6.0cmを測る。高台の断面形状は低い台形を呈し、非常に小さい。内外面ともにミガキが施され、胎土は雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。311は復元底径5.9cmを測る。高台形状は低い三角形状を呈し、内外面ともにミガキが施される。暗文は連続渦巻状もしくは渦巻状を呈するものと考えられる。胎土は金雲母を多量に含む。色調は内面が黒褐色、外面は黄灰色を呈する。

297、303、306、308はⅡ-2層、296、298、299、301、302、304、305、307、309～311はⅡ-3層から出土している。300は出土層位不明である。311は9世紀後半、297は9世紀～10世紀、296は

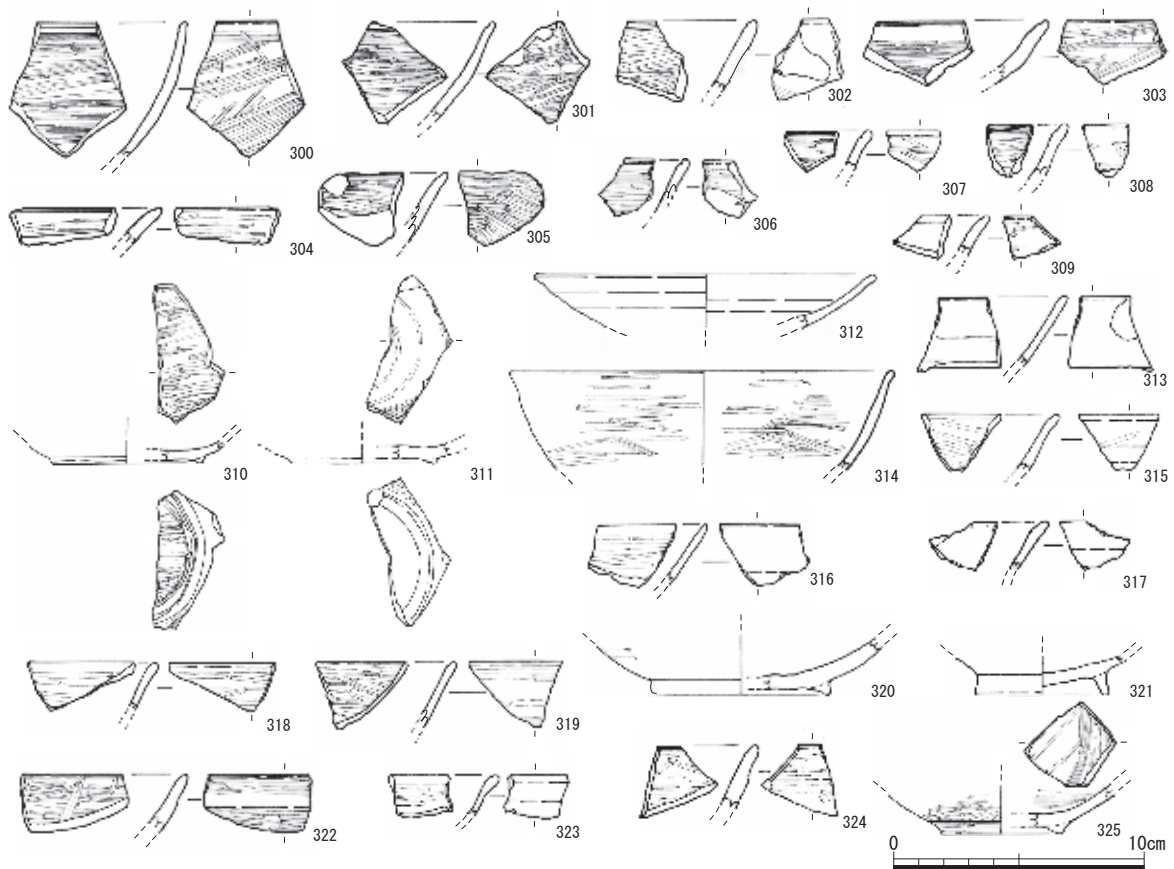


図30 Ⅱ区20トレンチ出土土器2

2. 各トレンチの成果

10世紀前半、310は10世紀後半、298、299、305、309は10世紀、300、302、304、307は10世紀～11世紀、301、303、306、308は11世紀に比定される。

緑釉陶器（図30） 312は京都系緑釉陶器皿の口縁部であり、復元口径13.5cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面端部付近には段を有する。釉調は灰オリーブ色を呈し、全面に施釉されている。胎土は1mm以下の長石粒を含み、焼成は硬質である。Ⅱ－4層から出土し、時期は10世紀前半に比定される。

吉備型土師器（図30） 313～319は碗の口縁部であり、いずれも焼成は良好である。

313は直線気味に開き、端部は内面にやや面をもつ。内外面ともに横位と斜位のミガキがわずかにみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。山本編年のⅠ－3期に比定される〔山本1993〕。314は復元口径15.2cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり端部付近で外反する。内外面ともに横位のミガキが施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。山本編年のⅠ－3期に該当する〔山本1993〕。315は直線気味に開き、端部付近で外反した後、端部は丸くおさまる。口縁部外面には強いナデ調整が施され、内面には横位と斜位のミガキが密に施される。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含み、雲母もみられる。色調は内面が淡黄色、外面は灰白色を呈する。山本編年のⅠ－2期に比定される〔山本1993〕。316はやや直線的に開き、端部はわずかに肥厚し丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、内面には横位と斜位のミガキも認められる。胎土は3mm以下の長石粒と金雲母を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。山本編年のⅠ－3期に該当する〔山本1993〕。317は内面にわずかにミガキがみられ、外面は回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の石英粒を少量含む。色調は内外面ともに灰白色を呈する。山本編年のⅡ期に比定される〔山本1993〕。318は端部でやや外反し、丸くおさまる。内外面ともにやや隙間のあるミガキが施され、胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。山本編年のⅠ－3期に該当する〔山本1993〕。319は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにミガキが施され、内面はやや密である。胎土は精緻であり、1mm以下の長石粒をわずかに含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、内面口縁端部付近のみ黒褐色を呈する。山本編年のⅠ－1～Ⅰ－2期に比定される〔山本1993〕。

320、321は底部である。320は復元底径7.0cm、高台高0.5cmを測る。高台は貼り付け輪高台で、残存状態は悪いものの、高台の断面形状は三角形状を呈する可能性が高い。外面にわずかにミガキがみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内面が明褐灰色、外面はにぶい橙色を呈する。山本編年のⅡ期に比定される〔山本1993〕。321は復元底径5.4cmを測る。高台の断面形状は四角形状を呈する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、内面にはミガキがみられる。胎土は金雲母をわずかに含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。山本編年のⅠ－2～Ⅰ－3期に該当する〔山本1993〕。

314、315はⅠb層、313、320はⅡ－1層、318、321はⅡ－2層、316、317、319はⅡ－3層から

出土している。319は11世紀、315は11世紀後半、321は11世紀後半～12世紀前半、313、314、316、318は12世紀前半、317、320は12世紀後半に比定される。

瓦器 (図30) 322～325は椀であり、いずれも焼成は良好である。

322～324は口縁部である。322は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面には強いナデ調整によって段ができています。内面は横位と斜位、外面は横位のミガキが密に施される。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、角閃石粒もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。楠葉Ⅱ-2～Ⅱ-3期に比定される〔橋本2018〕。323はやや内湾した後大きく外反し、端部は肥厚して丸くおさまる。内面には横位のミガキ、外面にはナデ調整が施される。胎土は精緻である。色調は内外面ともに褐灰色を呈する。和泉Ⅱ期に比定される〔橋本2018〕。324は楠葉型瓦器椀である。内外面ともに横位のミガキが施され、外面下半部には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母を含む。色調は内面が灰黄褐色、外面は黄灰色を呈する。楠葉Ⅱ-1～Ⅱ-2期に比定される〔橋本2018〕。

325は楠葉型瓦器椀の底部であり、復元底径4.8cmを測る。高台は貼り付け輪高台で、断面形状は三角形を呈する。内外面ともに横位のミガキが施され、外面は高台まで確認される。胎土は金雲母を含む。色調は内外面ともに灰色を呈する。楠葉Ⅱ期に比定される〔橋本2018〕。

322はⅡ-1層、323はⅡ-2層、324は1号遺構、325は1号遺構直上から出土している。322～325は12世紀に比定される。

土製品 (図31) 326～328は移動式カマド、329、330は土鍾である。

326、327は裾部である。326の接地面はほぼ水平であり、内外面ともに輪積みの痕跡が認められる。内面には一部ハケメが確認でき、内外面ともに指頭圧痕とナデ調整が顕著である。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母も含む。焼成は良好である。色調は内面がにぶい褐色、外面は灰黄褐色を呈する。327の底面はほぼ面的であるが、外面側で丸くおさまる。内面は上部にハケメ、下部にナデと指頭圧痕がみられる。外面は上半に下方向のハケメが施され、下部には指オサエがみられる。断面には輪積み痕が確認される。胎土は1mm程度の石英粒と長石粒を含み、金雲母もみられる。焼成は良好であり、色調は内面が灰褐色、外面はにぶい褐色を呈する。

328は底部の破片である。内外面ともにナデ調整と指頭圧痕が顕著に認められ、内面には部分的に二次的被熱の痕跡がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒、3mm程度の石英粒と金雲母を含み、焼成は良好である。色調は内面がにぶい橙色、外面は灰黄褐色を呈する。

329は全体形が円筒形を呈する管状土鍾である。残存長5.0cm、直径1.5～1.6cm、孔径0.5cm、重量11.7gを測る。全面にナデ調整が施され、指頭圧痕もみられる。胎土は金雲母を含み、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。330は棒状土鍾である。残存長3.3cm、直径1.05cm、孔径0.4cm、重量4.8gを測る。全体の断面形はやや楕円形に近く、上部のみ隅丸方形である。胎土はきめ細かく、1mm以下の長石粒と金雲母を少量含む。焼成は良好であり、色調はにぶい褐色を呈する。

2. 各トレンチの成果

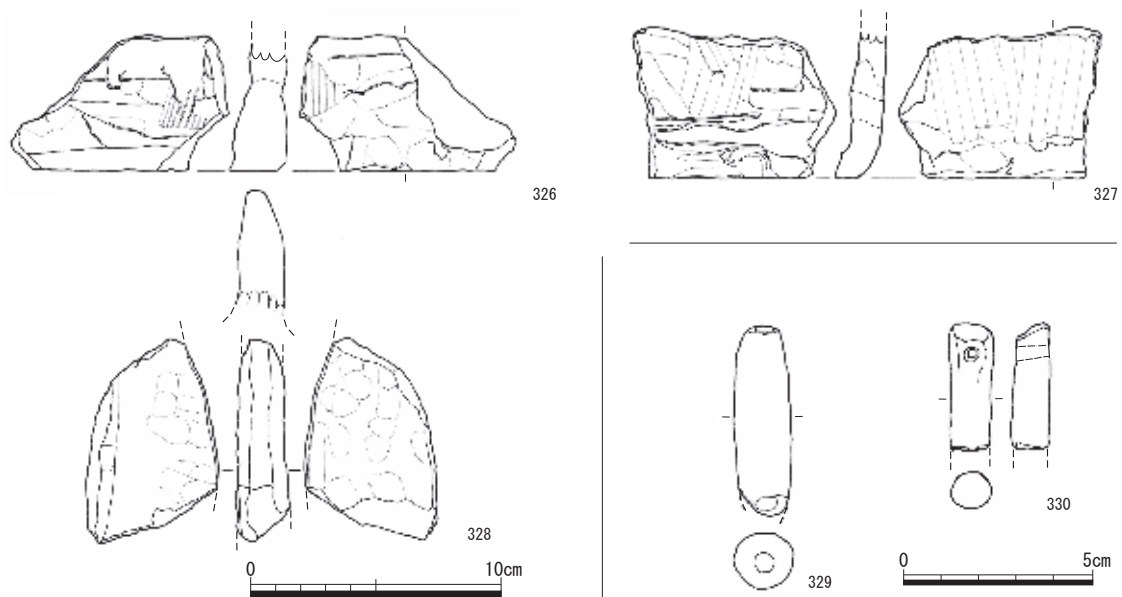


図31 II区20トレンチ出土土製品

330はⅡ－1層、326、329はⅡ－3層、327、328はⅡ－4層から出土した。

(藤原碧生)

古代製塩土器 (図32)

331～334はいずれも焼成が良好である。部分的な赤色化や器表面の荒れ、剥離などが認められるため、二次的に被熱している可能性がある。なお、331、332、334は手捏ね成形、333は内面に布目があるものの、内面が平滑である点と口縁端部の形状から、型作り成形の可能性がある。

331～334は口縁部である。331はなかほどでやや屈曲した後、やや直線的に外方に開き、端部は丸くおさまる。内面には横位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含むほか、3mm程度の長石粒が少量みられ、雲母も含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。332はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部には面がみられる。内面には横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を含むほか、3mm程度の石英粒が少量みられ、雲母も含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい黄橙色と褐灰色である。333は直線的に開き、端部外面側は面がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と3mm程度の石英粒を含み、雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい赤褐色を呈する。334は直立気味に立ち上がり、端部には面がみられる。内面には斜位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は5mm以下の長石粒と1mm以下の石英粒を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色である。

331、332はⅢ層相当のビット、333は表土、334はⅡ－4層から出土した。

(福本佳織)

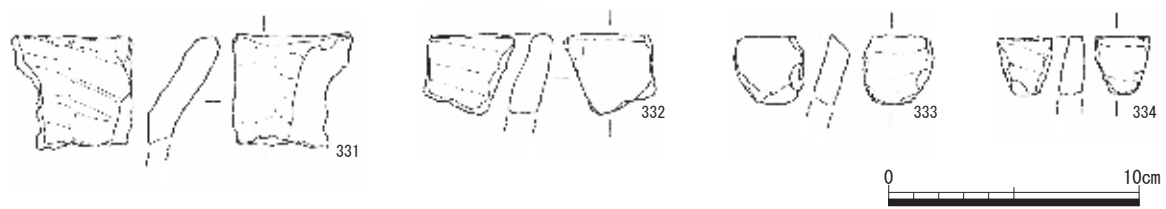


図32 II区20トレンチ出土古代製塩土器

(4) 21トレンチ (図33)

第13次調査までに明らかになった縄文時代の包含層であるIV層の広がりを確認するとともに、縄文時代における宮ノ浦遺跡周辺の旧地形を明らかにすることを目的として設定した。No. 6の杭から西に3.0m、南に5.0mの点を北東隅とする、南北2.0m、東西1.0mの調査区である。調査区全体を標高約1.6mまで掘り下げた後、トレンチ南半を掘削した。その後、岩盤の検出を目的としてさらに掘り下げを行ったが、湧水とそれにとまなう壁面の崩落があったため掘削を停止した。ピンポールでのボーリングの結果、標高0.3m程度の地点に岩盤が存在すると推測される。

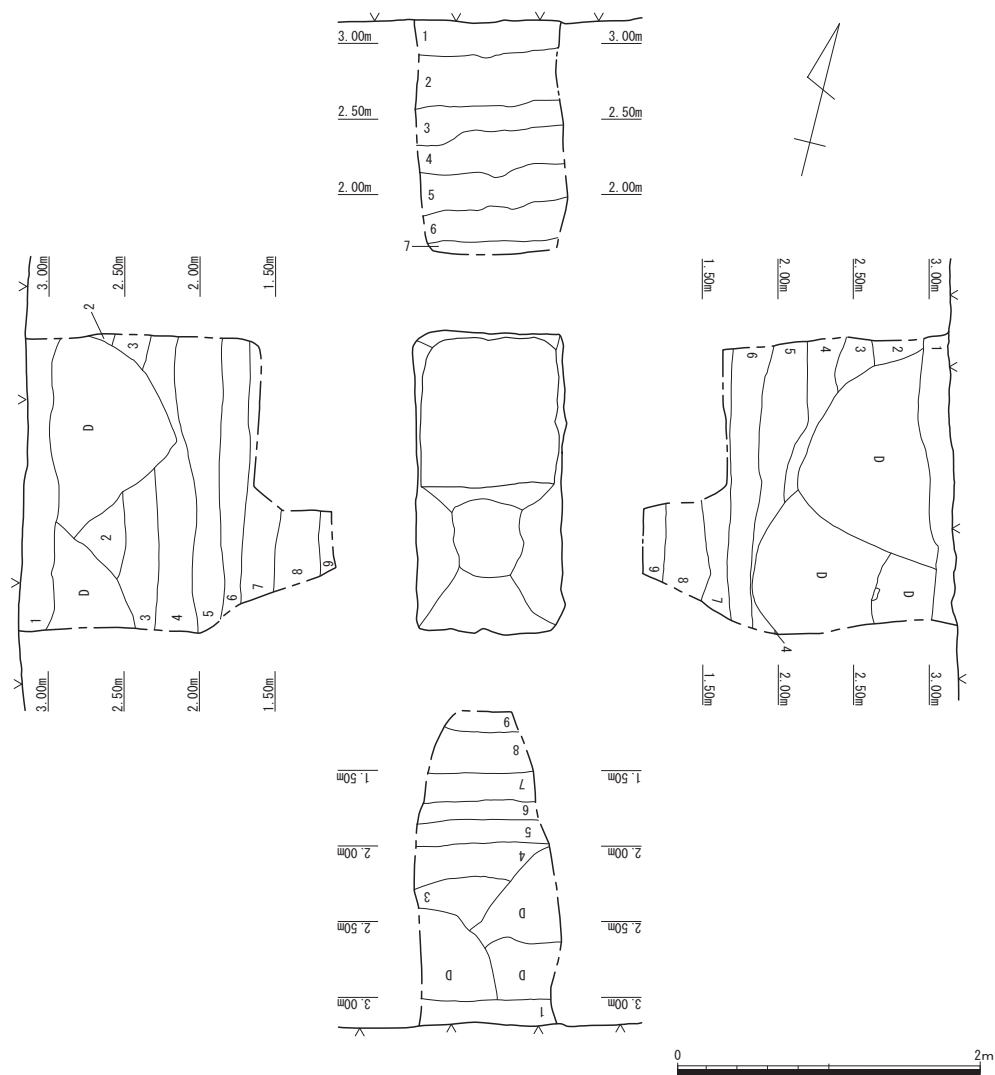
西壁、南壁では表土から4層にかけて、東壁では表土から5層にかけて後世の攪乱を受けている。土層は表土を含めて9層に分かれる。他の調査区と対応しないためアラビア数字で表記する。4層は北から南にかけて若干傾斜し、4層と5層の境界と、5層と6層の境界はゆるやかに波打つ。4層以下は海成堆積である。1層は表土で、にぶい黄褐色を呈する。中粒砂を主体とし、粗粒砂を含み、極粗粒砂も少量みられる。5mm程度の中礫を多量に含む。層厚は10～24cmを測り、ほぼ水平に堆積する。2層は褐色を呈し、中粒砂主体で粗粒砂を多量、極粗粒砂を少量含む。5mm程度の中礫を少量含む。層厚は最大35cmを測る。攪乱により東壁、西壁では一部しか確認できず、南壁では確認されない。3層は黄褐色を呈し、粗粒砂主体で極粗粒砂を少量含む。浜堤に堆積した砂が流れ込むことにより堆積したと考えられる。層厚は最大35cmを測る。東壁では攪乱により一部しか確認できず、西壁と南壁では一部が攪乱に壊されるが、ほぼ水平に堆積していると想定される。4層は明黄褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。標高2.16mで古式土師器、標高2.09mで土師器が出土している。層厚4～31cmを測り、南東側では攪乱により一部が壊され、東壁では南側3分の2程度が攪乱により確認できない。5層は黄褐色を呈し、粗粒砂主体で極粗粒砂を含む。層厚は16～32cmを測り、東壁の南側3分の1程度が攪乱により壊される。北壁から30cm前後のところで層上面が落ち込み、厚みを減じながら堆積する。6層は明黄褐色を呈し、粗粒砂主体で極粗粒砂を少量含む。トレンチ中央付近の標高1.82～1.86mの範囲で同一個体の縄文時代後期に比定される土器が面的に出土している。層厚は10～27cmを測り、北から南にかけて厚みを減じながら堆積する。7層は明黄褐色を呈し、粗粒砂主体で極粗粒砂を多量に含む。3～4cm程度の扁平な亜角礫・角礫を少量含む。層厚は11～22cmを測り、水平に堆積する。8層はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂を主体とし、極粗粒砂を少量含む。層厚24～31cmを測り、水平に堆積する。9層は黄褐色を呈し、中粒砂が主体で粗粒砂と極粗粒砂を少量含む。湧水と壁面の崩落によりその他の詳細は不明である。7～9層

2. 各トレンチの成果

で遺物は出土していない。

遺物については、4層で古式土師器、土師質土器、6層で縄文土器が出土している。

(伴井嘉正)



1層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂主体。粗粒砂を含む。極粗粒砂を少量含む。しまりあり。5mm程度の中礫を多量に含む。2層：褐色（7.5YR4/4）中粒砂主体。粗粒砂を多く、極粗粒砂を少量含む。しまりあり。5mm程度の中礫を少量含む。3層：黄褐色（10YR5/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を少量含む。しまりが弱い。4層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂主体。粗粒砂を含む。5層：黄褐色（10YR5/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。しまりが弱い。6層：明黄褐色（10YR7/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を少量含む。7層：明黄褐色（10YR7/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を多量に含む。3～4cm程度の扁平な歪角礫・角礫を少量含む。8層：にぶい黄褐色（10YR6/4）粗粒砂主体。極粗粒砂を少量含む。しまりなし。9層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂主体。粗粒砂と極粗粒砂を少量含む。しまりあり。

図33 II区21トレンチ平面図・土層図

出土遺物

縄文時代

縄文土器（図34） 335は6層上面、336は表土層から出土した。335、336は深鉢である。

335は無文土器の胴部下半とみられる。外面はケズリが施された後に研磨が行われており、器表面は平滑である。内面はナデ調整と指頭圧痕がのこり、波打つ。断面には粘土紐の接合痕が4か所に認められ、胎土は3mm程度の石英粒と、2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、砂礫のほか、角閃石粉を少量含む。色調は外面がにぶい赤褐色、内面はにぶい赤褐色とにぶい黄橙色を呈する。焼成は非常に良好

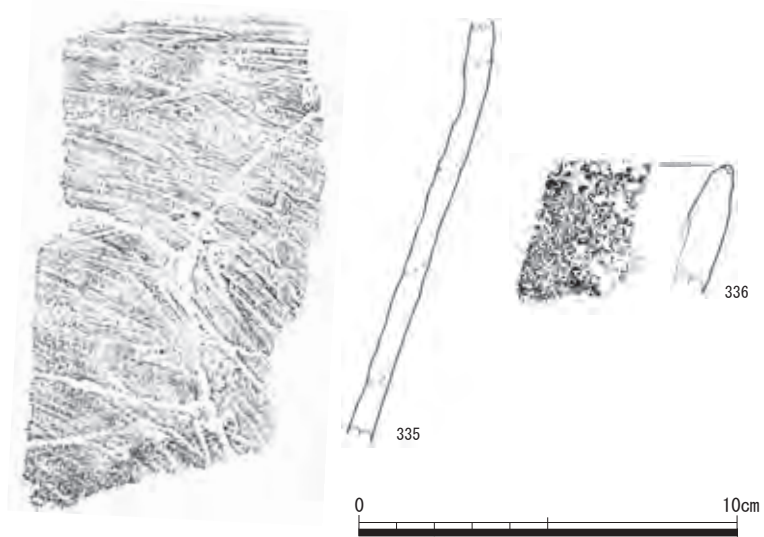


図34 II区21トレンチ出土縄文土器

である。336は口縁部片であり、直線的に外方へ開き、端部はやや先細る。口唇部には幅の狭く、浅い刻目が付される。内外面ともにナデ調整が施されており、外面が摩滅し、内面下半は剥離している。器壁は9mm前後と比較的厚い。胎土は3mm程度の長石粒、石英粒、砂礫を含むほか、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。焼成はやや良好である。

335は縄文時代後期、336は縄文時代晩期の範疇で捉えられる。

（江本晃季）

【註】

- （1） 多くが幸泉満夫氏の「沈線文系土器」〔幸泉2001〕に相当するが、文様の施文パターンが不明なところもあるため、幸泉氏の定義から外れるものもあると考える。
- （2） 4～9と同様に沈線を施すが、層位が離れ、色調や胎土が異なる点などから同一の土器群ではないと考えられる。地文の違いはあるが、後述する19トレンチで出土した西日本磨研土器群〔中村2008〕と類似する。
- （3） 弥生土器（22）については柴田昌兎氏から直接ご教示いただいた。
- （4） 灯明皿の可能性のある35については50%の網掛けをして煤の範囲を示している。
- （5） 石鍋（152）については柴田亮氏、松尾秀昭氏から直接ご教示いただいた。
- （6） 203については金田明大氏、神野恵氏から「平瓶」の可能性があるとご教示いただいた。
- （7） 288については稲本悠一氏、金田明大氏から「碗」の可能性があるとご教示いただいた。

【参考文献】

青木聡志 2021「愛媛県における古代～中世の土器編年－今治平野の9世紀から12世紀を中心に－」『紀要愛媛』第17号、公益

2. 各トレンチの成果

財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

青木聡志 2024「第5章 考察 VI. 宮ノ浦遺跡の古代・中世土器－流通品からみた宮ノ浦遺跡－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

青木聡志 2026「宮ノ浦遺跡における古代・中世の土器様相と時期区分」『愛媛大学考古学研究室第21回シンポジウム“もう一つの塩の荘園”に遺されたもの・こと・ひと－中世の上島町宮ノ浦遺跡－』愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター

有馬啓介・品川 愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

泉 拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧 縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』株式会社アム・プロモーション

大阪府立近つ飛鳥博物館編2006『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館

尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995「Ⅲ土器・陶磁器 6. 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

織田誠司 2016「古代～中世の土器・陶磁器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

及川 穰 2024「縄文時代草創期から早期初頭における石鏃の型式変遷と宮ノ浦遺跡の位置付け－先端突出形・三角鏃ホライゾンの形成過程－」『愛媛大学考古学研究室第20回シンポジウム 瀬戸内海の形成と縄文時代のはじまり－上島町佐島宮ノ浦遺跡がものがたる縄文時代とその環境－』愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター

木戸雅寿 1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

古泉 弘 2012「日本考古学ときせるの研究史」『たばこと塩の博物館研究紀要』10、たばこと塩の博物館

幸泉満夫 2001「西日本縄文後期土器組成論－瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究－」『考古学研究』第48巻第3号、考古学研究会

幸泉満夫 2006「西日本沈線文系土器集成Ⅰ」『山口県立山口博物館研究報告』第32号、山口県立山口博物館研究報告

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年の研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀－』京都編集工房

佐藤亜聖 2022「畿内産瓦器碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

柴田昌児 2000「4 伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社

柴田昌児 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター

首藤久士 2019「伊予における滑石製石鍋小考」『紀要愛媛』第15号、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

高橋照彦 1995「Ⅲ土器・陶磁器 3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

谷口哲一編2011『田ノ浦遺跡Ⅱ－平成20・21年度調査－』山口県埋蔵文化財センター調査報告第74集、山口県埋蔵文化財センター

千葉 豊編2010『西日本の縄文土器 後期』真陽社

堂入秀人 2008「曾畑式土器」『総覧 縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』株式会社アム・プロモーション

中村 豊 2008「西日本磨研土器（滋賀里1～3式土器）」『総覧 縄文土器－小林達雄先生古稀記念企画－』株式会社アム・プロモーション

橋本久和 2018『概説 瓦器碗研究と中世社会』真陽社

平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

福本佳織 2024「第5章 考察 IV. 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

丸毛のぞみ 2008「古代末から中世前半の伊予地域の在地土器について－坏の編年を中心に－」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』下條信行先生退任記念事業会

宮本一夫編1991『江口遺跡第1次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室

宮本一夫 1991「第5章 出土縄文土器の位置づけ」『江口遺跡第1次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室

森 隆 1995「Ⅲ土器・陶磁器 2. 黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

森田 勉 1983「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『仏教藝術』148号、毎日新聞社

山崎真治・高橋 健 2007「彦崎貝塚の考古学的研究」『東京大学総合研究博物館研究報告』第43号、東京大学総合研究博物館

山下峰司 1995「Ⅲ土器・陶磁器 4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

第4章 考 察

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境（補遺）

笹田朋孝

1. 補遺の位置づけ

本補遺は、村上恭通・辻康男「宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境－縄文時代草創期～早期の景観を意識して－」〔村上・辻2024〕（以下、既報）を補うことを目的とする。宮ノ浦遺跡Ⅱ区の地形環境に関する理解は、発掘調査の進展にともなって段階的に更新されてきた。第9次調査報告では、Ⅱ区周辺が砂浜・浜堤・後背湿地状低地から構成され、その背後には東側の独立丘陵（元見山）と江尻地区から続く谷状地形の最奥部が接するという把握が示された〔有馬・青木編2021〕。第10次・第11次調査では、浜堤堆積物の下位に縄文時代の土器を含む花崗岩風化層および風化礫層が確認され、元見山から西へのびる埋没丘陵の存在が想定された〔有馬・馬編2022〕。さらに第12次調査では、縄文時代の包含層であるⅣ層が北側へ大きく傾斜することが確認されたことによってこの想定がより明瞭となり〔有馬・大塩編2023〕、第13次調査ではサウンディング・ボーリング調査と海底地形測量を加えることで、Ⅱ区における埋没丘陵と遺跡周辺の地形復元が試みられている〔有馬・鄭・福本編2024〕。

既報において村上・辻は、Ⅱ区の基盤地形を、家屋の並ぶ浜堤直下に東西に走る細い埋没丘陵平坦面と、その北および西に広がる低地とからなるものとして把握した。サウンディング・ボーリング調査では、南側の東西測線で岩盤高が0.45～0.74mと比較的安定する一方、北側測線では東端SW-C1が-6.15m、西端SW-A6が-9.54mを示し、南北測線でも海側南端から北端にかけて8m以上低下することが示されている。この結果から、Ⅱ区では埋没丘陵平坦面の南で緩斜面、北と西で急激に低下する基盤面が復元され、地形区分図（図35）の上では谷頭部の谷壁、谷底低地、潟湖性低地、尾根型斜面といった地形構成も提示された〔村上・辻2024〕。

一方、第14次調査では、Ⅱ区に13・19・20・21トレンチが設定され、13トレンチは第8次調査区の拡張として、それ以外は新設トレンチとして発掘が行われた（図5）。これにより、従来の南北方向の理解に加えて、西側あるいは北西側の層序をより具体的に追うことが可能となり、またⅡ区21トレンチによって基盤面高を補う新資料が得られた。特に19トレンチのシルト質堆積層、21トレンチにおける岩盤面の推定は、既報の復元地形を具体化し、古代～中世段階の地形改変を検討するうえで重要であるといえる。

以上をふまえ、本補遺では、既報が提示した埋没丘陵平坦面と周辺低地という基本構図を前提としつつ、第14次調査の成果によって、より詳細な構造と形成過程を明らかにすることを課題とする。

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境（補遺）

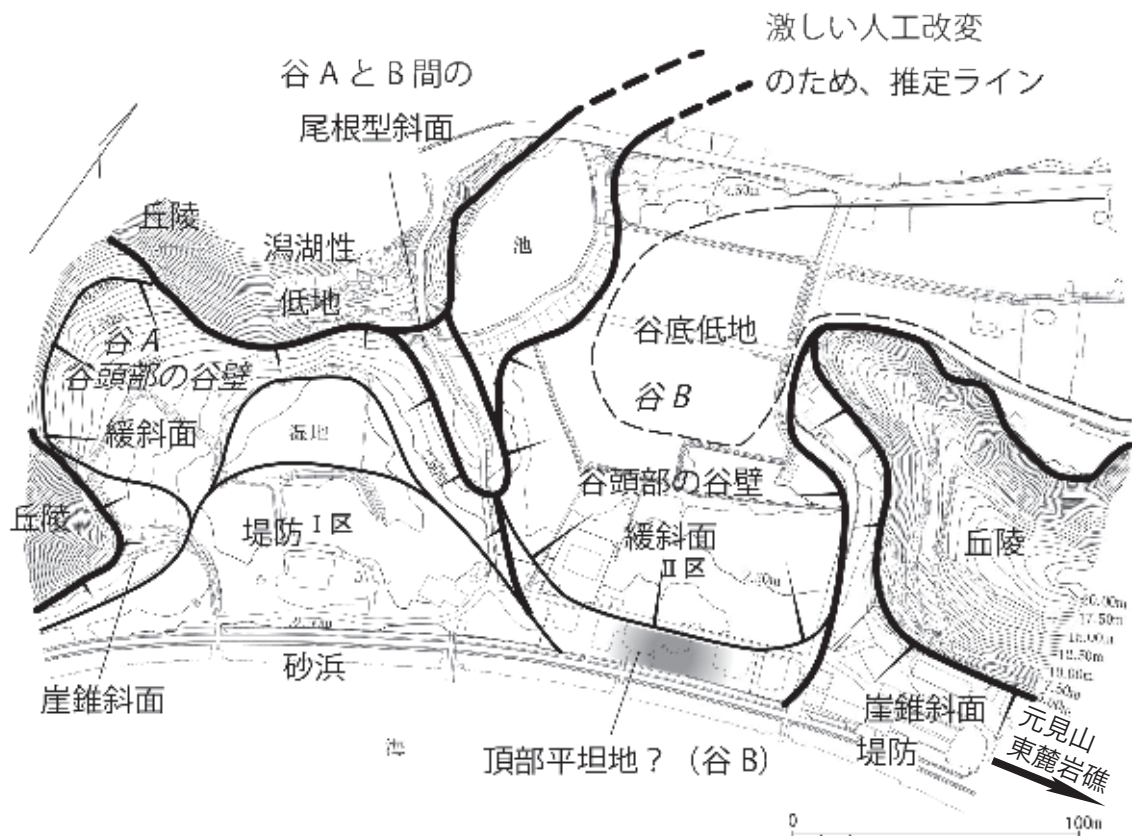


図35 宮ノ浦遺跡周辺の地形区分図〔村上・辻2024を一部改変〕

以下では、まず21トレンチの所見からⅡ区南側における基盤面のあり方を確認し、ついで19トレンチおよびⅡ区諸トレンチの層序比較から、北側低地の広がりとその後の埋積・造成過程について考える。その際、本補遺では、既報に示された周辺地形の復元図（図35）と、第14次調査成果を含めて作成したⅡ区の柱状図（図36）とを相互に参照しながら検討を進める。図35は、Ⅱ区をとりまく地形単位を、埋没丘陵平坦面、その北・西に広がる谷底低地・潟湖性低地、ならびに谷頭部の谷壁や尾根型斜面として把握したものであり、Ⅱ区が単なる海浜平坦地ではなく、起伏に富む基盤地形の一部に立地することを示している。他方、図36は、各トレンチおよびボーリング成果を東西・南北両方向から比較することにより、Ⅱ区内部における層序の連続と不連続、ならびに基盤面高の変化を具体的に示すものである。以下の検討では、この両図を踏まえることによって、既報の復元地形が第14次調査成果によっていかに補強・具体化されるかを明らかにしたい。

2. Ⅱ区の旧地形と造成

（1）21トレンチからみたⅡ区南部の基盤面

21トレンチは、縄文時代包含層の広がり確認と旧地形の解明を目的として新設された調査区である。調査区は南北2.0m、東西1.0mの範囲で、全体を標高約1.6mまで掘り下げた後、南半を重点的

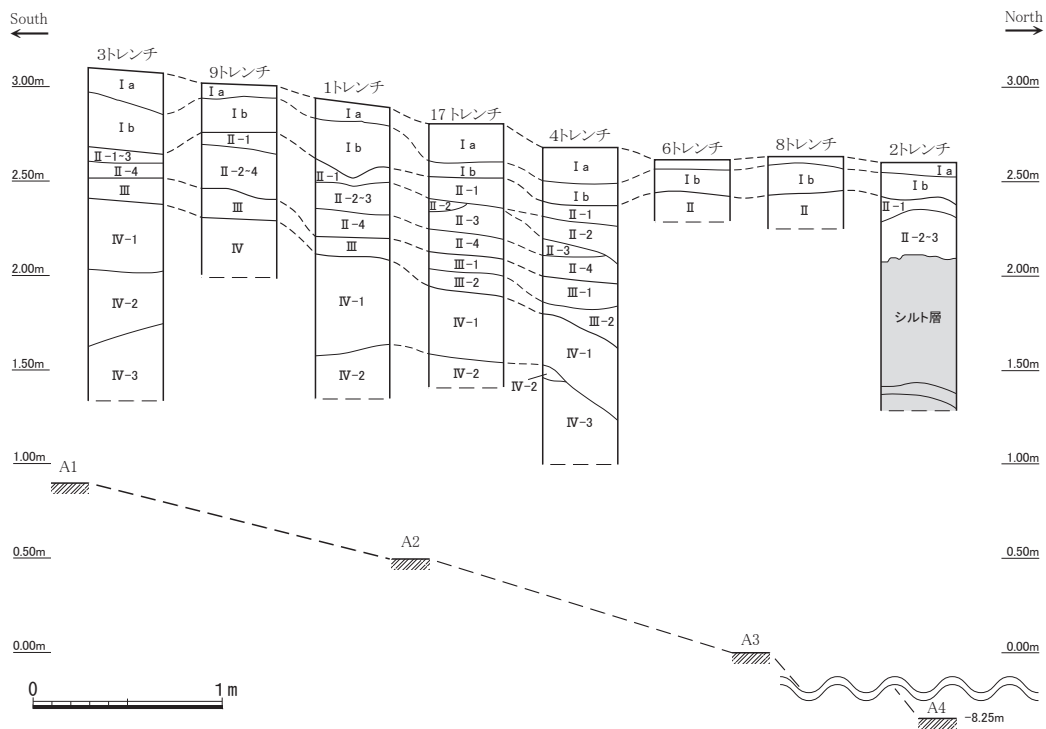
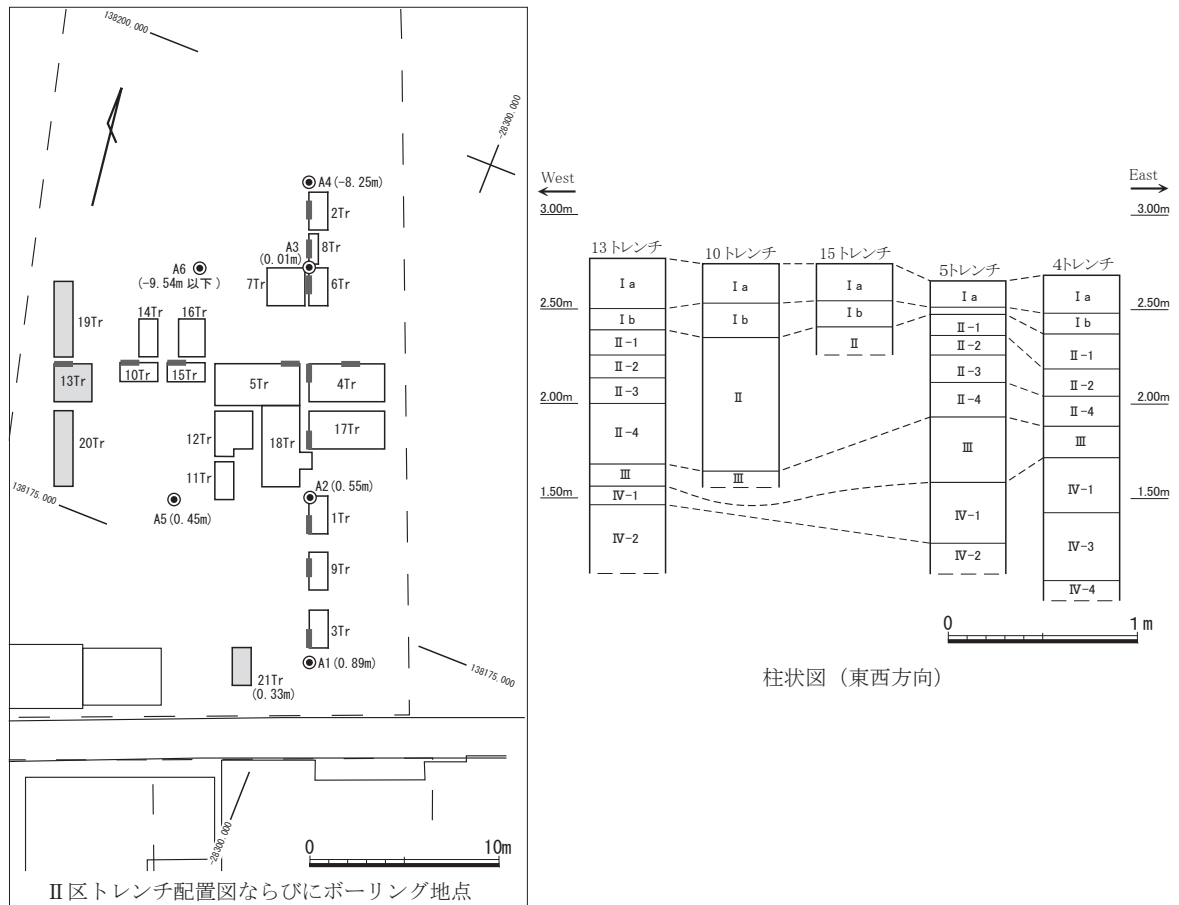


図36 柱状図

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境（補遺）

に調査した。さらに岩盤の検出を目的として掘削を継続したが、湧水と壁面崩落のため停止し、ピンポール・ボーリングの結果から、標高0.3m程度に岩盤が存在すると推定された。21トレンチでは基本層序の対比できる層はⅠ層とⅡ層のみであり、それらより下位の層については、他のトレンチとは異なっており、その形成・埋没過程も異なっていたことが推測された。また、調査終盤には元見山丘陵東麓の岩礁についても標高が測定され、岩礁5か所の標高はそれぞれ1.04m、0.81m、-0.11m、-0.08m、-0.28mであった。

既報のサウンディング成果では、Ⅱ区の基盤地形は、家屋の並ぶ浜堤直下の埋没丘陵平坦面から、南へは緩やかに、北および西では急激に低下するものとして理解されていた。21トレンチで推定された標高0.3m前後の岩盤面は、このうちⅡ区南部における基盤面高を具体的に補う所見とみることができる。さらに元見山東側岩礁の標高値は1m前後と0m以下の数値が近接して分布することを示しており、21トレンチの値はその範囲内に位置づけることができる。したがって21トレンチの所見は、埋没丘陵平坦面南側の基盤面が一様ではなく、小規模な起伏を伴っていたことを示す資料として評価できよう。もっとも21トレンチ単独の所見からその成因を断定することはできない。図36を参照すると、Ⅱ区南部では、南北方向の比較においてA1が0.89m、A2が0.55mを示し、21トレンチ付近でも0.33m程度の値が得られている。これらはいずれも北側低地に比べれば高位にあるものの、南側基盤面そのものが単純な平坦面ではなく、ゆるやかな起伏を伴いながら推移していることを示唆する。さらに図35に示された元見山東麓岩礁の位置を参照すると、Ⅱ区南部の基盤面は、元見山東側の露岩面と連続しつつも、局所的には低下部を含む複雑な地形をなしていたとみるのが妥当である。したがって21トレンチの意義は、単に南側基盤面の高さを一地点で補足したことにとどまらず、既報で想定された埋没丘陵平坦面南縁の地形が、小規模な起伏を保持したまま推移していたことを示した点にある。

（2）19トレンチにみる後背湿地状低地の広がり と 埋 積

19トレンチは13トレンチの北側に位置し、Ⅱ区北側低地の性格を直接検討できる資料である。調査の結果、Ⅱ-4層の下位に灰黄色を呈する砂質シルト層が確認され、その堆積面は波打ち、その分布はトレンチ北側に偏っていた。Ⅱ-4層が北から南へゆるやかに傾斜するのに対し、その下位に細粒分に富むシルト質堆積層が残ることは、19トレンチ北側に凹地状の低所が存在し、そこに低エネルギー環境下の堆積が生じていたことを示している。したがって、Ⅱ区の北側には後背湿地状低地が広がっていた可能性が高い。このことは図35・36によって、より空間的に理解することができる。図35では、Ⅱ区の北側から北西側にかけて谷底低地や潟湖性低地が復元され、その背後には谷頭部の谷壁や尾根型斜面が配置されている。すなわち、Ⅱ区北側は、埋没丘陵平坦面の外縁に接する低湿地的な地形単位として位置づけられているのである。さらに図36の南北方向柱状図では、2トレンチにシルト層が認められ、あわせてA4では-8.25mという著しく低い基盤面が示されている。19トレンチで確認されたシルト質堆積層は、こうした北側低地の一部を実際に発掘調査で捉えたものとみることができ、北側低地が局所的なくぼ地ではなく、一定の広がりをもつ地形単位で

あったことが示唆される。

この理解は、既報の地形復元とも整合的である。第10次・11次調査では、2トレンチの標高1 m以下に水成堆積層が深く形成されていることが明らかとなり、元見山の北にある江尻浜方向から海が湾入し、その後、湿地化したと考えられていた〔有馬・馬編2022〕。さらに第12次調査では、5トレンチと17・18トレンチの関係から、北から入る深い谷奥、すなわち谷頭状地形に相当する可能性が議論され〔有馬・大塩編2023〕、ボーリング成果でも2トレンチ北のSW-A4では標高-8.25 mに岩盤が検出されたとされる〔村上・辻2024〕。19トレンチのシルト質堆積層は、こうした一連の理解の上に位置づけられるものであり、Ⅱ区北側に広がる低地の一部に、停滞水域ないし低湿地的環境が存在したことを具体的に示した資料である。

また、19トレンチにみられるシルト質堆積層は、孤立した局所現象ではなく、第7次調査の2トレンチでもシルト層が確認されており、明緑灰色とオリーブ黒色を呈するシルト層が北に向かって急傾斜するとされる〔有馬・持永編2018〕。したがって、Ⅱ区北側には、2トレンチから19トレンチ方向へ一定の広がりをもつ後背湿地状低地が存在したと考えるのが自然である。

このシルト質堆積層については、その上に局所的ではあるもののⅢ層が認められているが、そのことだけで埋積完了時期を定めることはできない。シルト層内から古代の製塩土器が出土していることから、Ⅲ層の時期である古墳時代に少しずつ埋まり始め、最終的には古代～中世の大規模な盛土（Ⅱ層）によって埋められたと考えられる。シルト層そのものは単純な一時期の自然堆積層とみなすことはできず、その形成と改変は複合的な過程として理解すべきである。換言すれば、19トレンチのシルト質堆積層は、Ⅱ区北側に後背湿地状低地が存在したことを示すとともに、その埋積と平坦化が長期的かつ複合的な過程であったことを示唆する。

以上のように、図36に示した東西・南北両方向の柱状比較によれば、Ⅱ区は一様な平坦地ではなく、南側に比較的高位で起伏を伴う基盤面が残る一方、北側には深い低地と細粒堆積層を伴う低湿地的環境が広がるという、非対称的な地形構造を有していたと理解される。東西方向の比較でも、13・10・15・5・4トレンチ間で層位の連続とずれが認められ、Ⅱ区内部における微地形の変化が無視できないことが分かる。したがって、以下では、このような起伏のある自然地形の上に、各時期の埋積と人為的改変がどのように重なっていったのかという観点から、Ⅱ区の地形形成と土地利用を整理する。

3. 各時期における地形形成と土地利用

以上の検討から、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の地形形成と土地利用は、埋没丘陵平坦面と周辺低地からなる自然地形の形成、その後の海進に伴う低地の変化、さらに古代～中世における大規模な整地・造成という複数の段階を経て進行したものとして理解できる。まず、更新世末から完新世初頭にかけては、埋没丘陵平坦面と周辺低地からなる起伏のある基盤地形が存在していた。既報のサウンディング〔村上・辻2024〕では、家屋列直下に東西に走る細い埋没丘陵平坦面が推定され、南側測線では

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境（補遺）

岩盤高が比較的安定する一方、北側測線および西側では著しく低下することが確認されていた。さらに元見山東側岩礁の標高値は、1.04m、0.81m、-0.11m、-0.08m、-0.28mを示しており、周辺露岩面自体が一定の高低差をもつことがうかがえる。21トレンチの所見は、基盤面情報を補う成果であり、南側基盤面が一様な平面ではなく、局所的な起伏を伴っていたことを示唆する。

ついで、縄文海進の進行に伴って、この低位部には海水の進入や停滞水域の形成が生じた可能性がある。21トレンチで推定された低い岩盤面は、Ⅱ区南部における基盤面の一資料として理解されるべきであり、既報のサウンディング・ボーリング調査で示された南側基盤面復元を補う成果である。他方、19トレンチではシルト質堆積層が確認され、Ⅱ区北側に後背湿地状低地が存在したことが具体的に示された。しかも、この堆積層は古代の遺物を含むため、その形成と改変は短期的な一時点の現象ではなく、長期にわたる複合的過程として理解する必要がある。第10～12次段階で示された2トレンチの水成堆積層や、5・17・18トレンチの層位関係から推定された谷頭状地形は、Ⅱ区北側に谷底低地ないし潟湖性低地へ移行する地形単位が存在した可能性を示唆している〔有馬・馬編2022、有馬・大塩編2023、村上・辻2024〕。

古墳時代に比定されるⅢ層形成段階になると、このような埋没丘陵周辺の低地では埋積が進行し、部分的には活動面として利用可能な条件が整い始めたと考えられる。Ⅱ区Ⅲ層からは古式土師器と小型の脚台付製塩土器が一定のまとまりをもって出土しており、この段階には海浜に近い立地を生かした製塩を中心とする生産活動が行われていた可能性が高い。ただし、この段階ではなお自然地形の影響が強く残っており、例えば13トレンチではⅢ層以下が南から北へ、かつ東から西へ緩やかに傾斜し、19トレンチでも下位層は不整な地形を反映している。したがって、少なくともこの段階までは、Ⅱ区全体が均質な平坦地として整えられていたわけではなかったとみられる。

これに対して、古代～中世に比定されるⅡ層形成段階には、Ⅱ区一帯で顕著な土地改変が進められた。5トレンチでは古代の被熱礫からなる集石遺構が確認され、4トレンチでは鹹水溜め用の槽状遺構が検出されている〔有馬・馬編2022、有馬・大塩編2023〕。また、各トレンチで大量の貝・魚骨が出土しており、これを食料利用の痕跡とみるならば、火を用いる調理・加工を含む活動との関連も考えられる。したがって、この段階のⅡ区では、塩生産やそれに伴う作業のみならず、火を用いる加工・調理を含む、人間活動が活発に行われていたと考えられる。

さらに重要なのは、この段階のⅡ区が生業の場のみにとどまらないことである。4トレンチ2号遺構の出土土器群は、荘園成立期の資料として評価されるだけでなく、塩生産物の収納や、それに関わる何らかの儀礼との関連も検討されている〔青木2024〕。4トレンチ2号遺構では、供膳具の破片数・重量計測において瓦器碗が60～80%を占め、和泉型瓦器碗の出土点数は伊予の良好な一括資料を凌駕するとされる。また、同遺構では和泉型瓦器の受容に加えて、播磨系須恵器なども確認されており、畿内・瀬戸内の広域的な交流関係のなかに位置づけられている。また18トレンチでは、中世初頭の土坑墓が検出され、伸展葬人骨に土師質土器杯と刀子が副葬されていた〔有馬・大塩編2023〕。これらの所見は、古代末～中世初頭のⅡ区が、塩生産を背景にしつつ、物資の受容・消費、供膳、対外交流を伴う活動の場でもあったことを示している。

以上のように、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の地形は、第一に埋没丘陵平坦面とその周縁低地からなる基盤地形の形成、第二に縄文海進に伴う低地の変化、第三に古墳時代における海浜生産の場としての利用、第四に古代～中世段階の大規模な整地・造成と複合的土地利用、という複数の段階を経て形成されたものと考えられる。したがって、宮ノ浦遺跡Ⅱ区は、縄文海進以後の自然地形変化の上に、各時期の生業と活動が重層して展開した景観として位置づけることができる。

【参考文献】

- 青木聡志 2024「第5章 考察 V. Ⅱ区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物－2号遺構の再評価を中心に－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川 愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・鄭宗鎬・福本佳織編2024『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通・辻 康男 2024「第5章 考察 I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境－縄文時代草創期～早期の景観を意識して－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

Ⅱ．宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構について

福本佳織

はじめに

第14次調査において、Ⅱ区20トレンチから製塩の採鹹工程に関わるとみられる槽状遺構（1号遺構）が1基検出された。過去の調査でも槽状遺構が複数検出されており、調査区東部の4トレンチ、そして調査区の中央から西部にかけての5、10、14、15、16トレンチで槽状遺構あるいはその残骸が発見されている。このほか5トレンチでは煎熬工程との関連が想定されるカマド状遺構（3号遺構）が検出されている。

宮ノ浦遺跡における発掘調査は第14次調査で最後となるが、古代・中世の製塩関連遺構に関してはそれぞれの報告書で検討されてきたものの、総括的な検討がなされておらず、Ⅱ区全体の製塩遺構については評価されていなかった。今回の第14次調査において20トレンチで発見された槽状遺構（1号遺構）の報告を機に、他のⅡ区における製塩関連遺構との比較検討を試み、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の製塩関連遺構、特に槽状遺構に対して総括的な評価を行い、他地域で発見された類例と比較して理解を深めたい。

1．Ⅱ区20トレンチ1号遺構の特徴

20トレンチ南壁沿いを先行的に掘り進めたところ、暗灰黄色の粘土が面的に検出された。さらにその粘土が、浅鉢状に掘りくぼめた土坑の内面に貼り付けられていることが判明し、これを1号遺構とした。検出部分は全体のおよそ1/4程度とみられ、全体形は円形あるいは楕円形と推測される。円形と仮定した場合、掘方の径が165cm、粘土を貼ったのちの内径が150cm程度と推測される。楕円形の場合は、掘方が径200cm以上、深さ約20cmを測る。Ⅱ－3層からⅢ層にまでおよぶ土坑の壁は緩やかに立ち上がっており、その壁に礫が密着するように置かれ、その上に厚さ5～20cm程の暗灰黄色粘土が全面に貼り付けられている。また、粘土の表面にも凹凸が観察され、その表面にも礫が貼られていた可能性が高い。ただし、底部には粘土の表面、下ともに礫は確認されていない。粘土は砂粒、シルト主体であり、質が均一である。粘性は弱く、乾燥するとブロック状に崩れる。

1号遺構がⅡ－3層から掘り込まれていること、そして土坑に貼り付けられた粘土の直上で黒色土器が出土していることから、遺構の時期は10世紀代に属すると考えられる。覆土より20cm程の被熱礫が1点出土しているものの、これは本遺構にともなうものではなく、周囲に石築のカマドなどが存在し、その構造材の一部である可能性が高い。

本遺構には採鹹あるいは鹹水溜めの機能が想定され、そのために不透水性の粘土が内壁に貼られたと考えられる。礫は壁の構造材というよりは蓄熱性や保熱性を意図して採用されたと評価されて

II. 宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構について

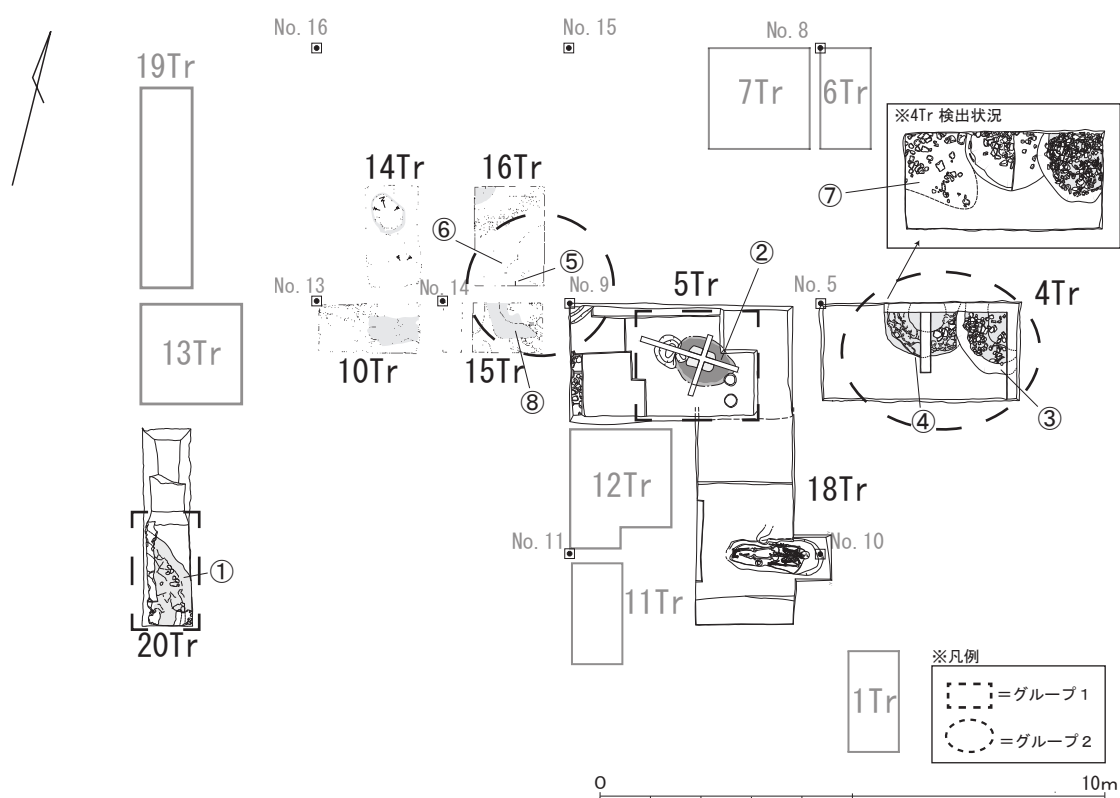


図37 宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構

表1 宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構一覧

No.	遺構名	性格	掘り込み面	遺物	時期	構築方法
1	20Tr 1号遺構	槽状遺構	Ⅱ-3層	粘土直上から黒色土器B類、覆土から吉備型土師器	10世紀代	土坑→礫→粘土→礫
2	5Tr 3号遺構	カマド状遺構	Ⅱ-3層	土師質土器	10～11世紀	—
3	4Tr 2号遺構	槽状遺構	Ⅱ-1層	土師質土器、須恵器、吉備型土師器、和泉型瓦器、移動式カマド	12世紀中葉	土坑→粘土→礫
4	4Tr 3号遺構	槽状遺構	Ⅱ-1層	土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、移動式カマド	12世紀前半	土坑→粘土→礫
5	16Tr 2号遺構	土坑	3層 ⁽¹⁾	吉備型土師器	12世紀前半	—
6	16Tr 4号遺構	粘土	3層 ⁽¹⁾	—	12世紀前半	粘土
7	4Tr 4号遺構	集石遺構、硬化面	Ⅱ-2層	土師質土器	—	礫
8	15Tr 1号遺構	槽状遺構	—	土師質土器、須恵器、黒色土器、吉備型土師器、和泉型瓦器	12世紀中葉	粘土、礫

いる〔馬2022〕。

2. 宮ノ浦遺跡Ⅱ区における製塩関連遺構

(1) 古代

古代段階の製塩関連遺構としては、第14次調査で検出された20トレンチ1号遺構と、5トレンチ中央部で検出されたカマド状遺構（3号遺構）がある（図37）。20トレンチ1号遺構は、Ⅱ－3層から掘り込まれた粘土貼りの土坑であり、採鹹あるいは鹹水溜めとしての機能が想定される。その時期は、粘土直上から出土した黒色土器などから10世紀代に位置づけられる。一方、5トレンチ3号遺構は、土師質土器の年代観から10～11世紀代に比定され、煎熬工程との関連が想定される。両者が同時に機能していたかどうかはなお検討を要するが、Ⅱ区では古代段階から採鹹・鹹水貯留・煎熬に関わる施設が存在していた可能性がある。これらをグループ1とする。

(2) 中世

中世段階の製塩関連遺構としては、4トレンチ2号・3号遺構を中心とする槽状遺構群と、その周辺で確認された土坑、粘土の広がり、集石遺構・硬化面などがある（表1）。主要な槽状遺構はⅡ－1層上面に関わるものとみられ、共伴土器の時期から12世紀代に比定される。4トレンチ2号遺構は直径約150cmの略円形、同3号遺構は直径約160cmの円形を呈する。両遺構ともに土坑内壁に粘土を貼り、その表面に礫を貼り付けており、2号遺構に切られた3号遺構では、礫を除去した後の凹凸が著しい。

このほか、5トレンチ北西端付近の壁面では、粘土を貼った土坑の断面が観察された。これは、5トレンチ西側に設定した15・16トレンチで検出された土坑や灰白色粘土と連続し、一つの槽状遺構を構成していた可能性がある。さらに西側の10トレンチでも灰色粘土が厚く堆積しており、槽状遺構の残存部を示すものと考えられる。以上の遺構群は、12世紀代を中心とする中世段階の製塩関連施設として位置づけられ、これらをグループ2としておく。

(3) Ⅱ区内における製塩遺構の比較

遺構の分布をみると、グループ1は、調査区中央の5トレンチから南西方向へ展開する傾向を、おおまかに読み取ることができる。これに対し、グループ2の槽状遺構は5トレンチの北西側から南東方向にのびる分布域をみせている。槽状遺構のみに着目すると、古代の20トレンチ1号遺構のみ南西に離れており、時代による分布域の違いが理解できる。

また20トレンチ1号遺構は平面形が楕円形を呈する可能性が高く、大きさも200cmを超えるものとみられる。つまり古代から中世にかけて、槽状遺構が小型化し、平面形も楕円形から円形へ変化する可能性がうかがえる。

構築法については、古代の槽状遺構が粘土の下にも礫をわずかにおいたうえで粘土を貼り付け、その表面に、底部を除いて礫が貼り付けられた。一方、中世の槽状遺構は土坑内壁に貼られた粘土の表面に礫が貼り付けられ、3号遺構の発掘所見によれば底部には粘土は確認されない。壁への粘

土の貼り付け前に礫を据えたかどうかの点が異なっているものの、古代、中世と土坑内面に粘土を貼り、底部を除く壁全面に礫を貼り付けるというのが、宮ノ浦遺跡の古代・中世における槽状遺構の構築法であったといえよう。

3. 周辺地域における製塩遺構との比較

(1) 瀬戸内海周辺地域における製塩遺構の概要

瀬戸内周辺地域では、複数の遺跡から古代～中世の製塩遺構が検出されているが、類例は多くない。1988年に刊行された香川県坂出市に所在する大浦浜遺跡では、粘土をともなう遺構が多数検出され、製塩遺構と評価されており、岡山県玉野市の沖須賀遺跡、同県倉敷市の塩生遺跡、そして広島県呉市に所在する沖浦遺跡でも、古代あるいは中世の製塩遺構と評価されている遺構が検出されている。ここでは次の2つの遺跡を取り上げ、宮ノ浦遺跡における製塩との比較を行いたい。

①大浦浜遺跡〔大山・真鍋編1988〕

海浜部から12～13世紀ごろと考えられる「粘土遺構」29基、土坑3基が検出されている。粘土遺構についてはA～Kまでの類型化が行われており、遺構の平面形には円形、楕円形、隅丸長方形があり、円形と楕円形の遺構については深いものと浅いものがある。また、礫をほとんど含まない遺構と200～300もの礫が出土した遺構があり、後者の場合、礫は被熱したものが多い。

②塩生遺跡〔小野2023、藤原編2023〕

平成5年度・令和2年度の調査で中世の鹹水溜めとみられる粘土の貼り付けられた土坑が3基検出されたほか、鹹水を煮詰めるための炉跡とみられる炉状遺構が3基確認された。その時期は14世紀ごろに比定されている。また、昭和30年前後に記録された、製塩に関するとみられる粘土貼り土坑群についても紹介されている。報告書によれば、台風の影響で採鹹土坑とみられる13基もの粘土貼り遺構が露出し、これらは海岸線に沿って南北に延びる砂州の西裾に並んで配列されていたそうである〔小野2023〕。

汀線に沿って分布する採鹹土坑と、砂州上にある鹹水溜めが同時に使用された場合、採鹹土坑に鹹砂と海水を注いで溶出した鹹水を、砂州上の鹹水溜めに運ぶという製塩工程が推測されると指摘されている。さらに、採鹹土坑とみられる遺構からは被熱した花崗岩礫が多く含まれていることから、焼石を投入することによって水分の蒸発を促進して、塩分濃度を高めた可能性が指摘されており、その後、上澄みをくみ取り、炉で煮詰めるという作業が想定されている。

(2) 宮ノ浦遺跡Ⅱ区の製塩遺構との比較

大浦浜遺跡、塩生遺跡と宮ノ浦遺跡Ⅱ区の槽状遺構は土坑内に粘土を貼るという点で共通しているが、宮ノ浦遺跡では粘土の表面に礫を貼るという点が異なっている。また大浦浜遺跡、塩生遺跡では、土坑内から出土する被熱礫が鹹水濃度を高めるために用いられた可能性が指摘されているが、宮ノ浦遺跡ではそのような様相を積極的に見出しがたい。槽状遺構の構築法、海水の塩分濃度を高

める技術に関しては、中部瀬戸内と西部瀬戸内とで違いがある可能性が高い。

おわりに

宮ノ浦遺跡Ⅱ区で新たに発見された20トレンチの1号遺構を手がかりとして、これまでⅡ区で検出された古代～中世の製塩関連遺構を集成し、検討を加えた。その結果、Ⅱ区の製塩関連遺構には、10世紀代を中心とする古代段階のグループ1と、12世紀代を中心とする中世段階のグループ2が認められることを確認した。両者を比較すると、古代から中世にかけて楕円形から円形へという平面形が変化し、規模も小型化することが明らかとなった。一方で構築法については土坑内面に粘土を貼り、その表面に礫を貼り付けるという点が継承されていたと考えられる。このことは、宮ノ浦遺跡Ⅱ区において、製塩関連施設の配置や規模を変化させながらも、基本的な構築技術が一定程度維持されていたことを示している。

また大浦浜遺跡や塩生遺跡など中部瀬戸内の類例と比較すると、土坑内に粘土を貼る点では共通するものの、宮ノ浦遺跡では粘土表面に礫を貼り付ける点に特徴が認められる。さらに、被熱礫を用いて鹹水濃度を高めた可能性が指摘される中部瀬戸内の事例に対し、宮ノ浦遺跡ではそのような様相を積極的には見出しがたい。したがって、槽状遺構の構築法や、採鹹・鹹水濃度を高める方法には、地域差が存在した可能性がある。

ただし、20トレンチ1号遺構は瀬戸内地域における採鹹機能をもつ槽状遺構のなかでも古い段階に位置づけられる可能性があり、形状・規模の点でも注目される。今後、同時期の類例をさらに集成し、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の槽状遺構が瀬戸内海地域の古代・中世製塩遺構のなかでどのように位置づけられるのかを検討していく必要がある。

【註】

(1) 3層は、基本層序Ⅱ－1層に相当する。

【参考文献】

- 大山真充・真鍋昌宏編1988『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 大浦浜遺跡』香川県教育委員会
- 小野雅明 2023「第4節 まとめにかえて 1 中世の製塩遺構について」『塩生遺跡 西元浜貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第19集、倉敷埋蔵文化財センター
- 藤原好二編2023『塩生遺跡 西元浜貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第19集、倉敷埋蔵文化財センター
- 馬 赤嬰 2022「中世の槽状遺構について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

Ⅲ. 宮ノ浦遺跡の発掘調査と地域振興・観光振興

有馬啓介

1. 地域資源としての宮ノ浦遺跡

文化財保護法の第1条には、「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」と記されている。つまり、文化財保護の大きな柱は文化財の保存と活用であり、文化財保護は、文化財の価値を見つけ守り、生かし伝えることによって、その目的の達成を目指している。

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、はぐくまれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産である。遺跡は、過去の人類が遺した営みの痕跡（遺構・遺物）がある場所のことであり、土地や水面下に埋蔵されていることから埋蔵文化財と呼ばれている。

遺跡は、歴史文化資源や教育資源として学術研究、郷土史研究および地域教育に活用されてきた。そして、近年は地域資源としての遺跡の役割が注目されている。地域資源とは、地域が有する自然・景観・歴史・文化・食・産業などの自然資源、人文資源および産業資源のことである。景観については、自然資源と人文資源が合わさった複合的な資源である。遺跡などの文化財は人文資源に含まれる。

発掘調査成果が示すように、宮ノ浦遺跡は縄文時代から現代まで続く複合遺跡であり、芸予諸島、ひいては瀬戸内海地方の生業・景観・文化を通史的に理解するうえで重要な遺跡である。今後、本遺跡を地域資源として生かすためには、遺跡の価値と保護すべき範囲を明らかにし、文化財（史跡）指定を含めた遺跡の適切な保存を行うことが求められる。そして、保存と活用のための整備を行うことによって地域資源としての価値を高める。さらに、本遺跡を学校教育や生涯学習に活用し、町内の諸地域資源との連携を進め、地域全体の魅力を創出することが求められる。つまり、この地域資源の魅力化の工程は、文化財保護の大きな柱である文化財の保存と活用のプロセスと一致するといえる。

2. 遺跡を生かした地域振興・観光振興

2022（令和4）年3月20日に上島架橋の「岩城橋」の供用が開始され、「ゆめしま海道（県道岩城弓削線）」が全線開通となった。これによって町内の生活基盤強化や産業の活性化がこれまで以上に促進され、旅行者の増加も期待されている。上島町は、観光施策としてサイクリング振興に取り組んでおり、週末には多くのサイクリストで賑わっている。

旅行者が価値を見いだすものとして、「地域の魅力を実感できるもの」や「その地域でしかできない体験」などが挙げられる。旅行者は、その土地の風土・景観・歴史・文化・人々の暮らし・食・

Ⅲ. 宮ノ浦遺跡の発掘調査と地域振興・観光振興

産業といった地域資源に魅力や価値を見出しており、地域資源としての史跡（遺跡）や文化財の活用は観光振興に資すると考えられる。地域資源の相互関係を重視し、これらを総合的に活用した観光振興が求められている。

宮ノ浦遺跡が所在する佐島の対岸には、国宝「東寺百合文書」に記録が遺り「塩の莊園」として知られる弓削島莊の故地である弓削島がある。弓削島莊は平安時代後期から室町時代まで存続し、鎌倉時代の1239（延応元）年からは東寺領となった。宮ノ浦遺跡は、出土した遺構や遺物の豊富さから中世の石清水八幡宮領莊園との関連性が想定され、史跡の整備事業を推進している弓削島莊遺跡と連携した活用が期待される。

史跡弓削島莊遺跡は7つの史跡指定地（構成資産）で構成されることから、本史跡の本質的価値の理解のために来訪者に周遊を促すことが大きな課題となっている。そのため、弓削島莊遺跡の構成資産を巡る周遊ルートの整備のみならず、関連する地域資源を結び、道中でも様々なかたちで島の歴史文化を体感することができる島を繋いだ周遊ルートの整備を進める必要がある。史跡（遺跡）とともに核となるのが、現在設置を検討している史跡のガイダンス施設と博物館施設である。両者は歴史・文化の情報発信と学習機能を担う。地域全体の視点から宮ノ浦遺跡と関連地域資源との関係を把握し、島や海を含めた空間を「しまじゅうまるごと博物館（まちじゅう博物館）」と見立て、地域・観光振興部局とも連携しながら包括的な地域資源の整備活用が望まれる。

広島県尾道市から愛媛県今治市にかけての芸予諸島は、史跡能島城跡をはじめとした中世の村上海賊に関係した文化財が数多く分布している。また、尾道は中世の瀬戸内海を代表する港町である。近年、多島美や歴史的景観をもとめて、しまなみ海道沿線やその周辺地域には多くの人々が訪れている。尾道市や今治市などの近隣の自治体と連携し、情報を発信することによって、上島町の歴史・文化の魅力を高めることができる。

上島町は、芸予諸島の一部をなす上島諸島および魚島群島により町域が構成されている。そのため、島ならではの自然環境、風土および歴史文化が形成され、町の大きな魅力になっている。地域資源としての宮ノ浦遺跡の価値・魅力を掘り起こし、博物館施設と関連地域資源を結ぶ周遊ルートなどの整備を通じて、地域振興（地域おこし）に資する史跡（遺跡）の活用を図り、交流・関係人口を獲得し、まちづくりと地域のアイデンティティを創出する。このことは、「歴史・文化を継承し、活かすまちづくり」を掲げる上島町が取り組むべき目標である。地域の活性化と自立、地域住民の文化的向上を図るうえで、文化財が果たす役割は大きい。

第5章 総 括

1. 第14次調査の位置づけ

宮ノ浦遺跡では、2011年以降、Ⅰ区とⅡ区を対象として発掘調査を継続してきた。第13次調査までに、古墳時代前期の製塩活動、古代から中世にかけての海浜部利用、縄文時代草創期から早期にかけての活動など、数多くの成果が得られた。そのため第13次調査をもって、当初設定した調査目的はおおむね達成されたと考えられた。

しかしⅡ区にはなお確認すべき範囲が残されていた。特に調査区西端部と南端部は、これまで十分な調査が及んでいなかった。西端部は隣の宅地に近く、調査用テントの設置場所や機材置き場として利用されることも多かった。そのため基本層序の広がりや遺構分布の粗密を確認する必要があった。南端部についても、基盤地形の状況を把握することが課題として残されていた。

第14次調査は、このような未確認部分を補うために実施した調査である。第8次調査の13トレンチを拡幅し再調査を行い、敷地西端部に19トレンチと20トレンチを設定した。また、敷地南端部には21トレンチを設けた。調査の目的は、Ⅱ区の層位がどこまで広がるのか、遺構や遺物の分布にどのような差があるのか、基盤地形がどのように続くのかを確認することにあった。

その結果、第14次調査ではこれまでの調査成果を補う資料が得られた。13トレンチからは、本遺跡では初めてとなる滑石製石鍋片が出土した。19トレンチでは北側でシルト質堆積層を検出し、Ⅱ区北西部の堆積環境を考える手がかりを得た。20トレンチでは、製塩に関連する、鹹水溜めの機能が想定される1号遺構を検出した。21トレンチでは、Ⅱ区南端部の基盤地形を検討する資料が得られた。これらは、第13次調査までの理解を大きく変えるものではない。しかし、Ⅱ区全体の理解を補い、これまで十分に把握できていなかった部分を埋める成果であった。

2. 第14次調査の成果

(1) 13トレンチの成果

13トレンチは、既設トレンチの再調査・拡幅として位置づけられる。第14次調査では、Ⅱ区の層位と遺物包含状況を改めて検討した。調査区の一部では後世の攪乱が及んでいたが、Ⅱ層からⅣ層にかけての堆積状況を把握することができた。

13トレンチでは、西彼杵半島産と推測される滑石製石鍋片が出土した。宮ノ浦遺跡ではこれまで土師質土器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などによって古代から中世の広域的なモノの移動が指摘されてきたが、今回の滑石製石鍋片は、そこに九州地域との交流を考える新たな視点を与えるものである。また古代の製塩土器（焼塩土器）が一定量出土しており、12トレンチや18トレンチなどを含む、古代の製塩土器の出土範囲を補完するものであった。

2. 第14次調査の成果

加えて、13トレンチでは古代～中世にかけての盛土（Ⅱ層）に関する一定の所見が得られた。基本的にはⅡ－1層とⅡ－2層、Ⅱ－3層とⅡ－4層という大きな二つの単位の盛土事業が行われたことが想定された。この所見はⅡ区で検出される遺構の多くが、Ⅱ－1層上面とⅡ－3層上面で検出されていることから補強される。

（2） 19トレンチの成果

19トレンチは、Ⅱ区北西端部の状況を確認するために設定した。これまでほとんど調査が行われてこなかったエリアである。そのため、Ⅱ区の基本層序が西側へどの程度広がるのかを明らかにすることが課題であった。

調査では、Ⅱ層からⅣ層にかけての堆積状況を確認した。Ⅱ層上面では礫群や遺物集中部が検出され、一方で東側の各トレンチと比較してⅢ層が希薄となり脚台式製塩土器の出土が少なくなることなど、地点ごとの差も把握された。詳細は第4章第Ⅰ節に譲るが、トレンチ北半ではシルト質堆積層が検出された。ここではⅢ層が確認されず、シルト層の上位にはⅡ層が堆積している。シルト層は波打つように堆積しており、浜堤上の単純な砂質堆積とは異なる様相を示す。また、シルト層からは倉浦式土器と考えられる土器も出土しており、堆積環境と時期を考えるうえで注意される。

19トレンチの調査所見は、西端部にもⅡ区の層序が及ぶことを示すだけではない。シルト質堆積層の存在は、古代以前にはⅡ区北西部に停滞水域ないし低湿地的環境が広がっていたことを示唆し、古代後半のある時期に造成によって埋め立てられていったことが推測される。

（3） 20トレンチの成果

20トレンチでは、製塩に関連する、鹹水溜めの機能が想定される1号遺構（槽状遺構）を検出した。この遺構は、第14次調査の中でも注目される成果である。遺構は、古代から中世にかけて形成された整地層（Ⅱ層）の下部で検出された。礫を下地に粘土を貼り付けた土坑で、製塩工程との関連が想定される。

詳細は第4章第Ⅱ節を参照されたいが、鹹水溜めの機能が想定される遺構は、4トレンチの2号遺構や3号遺構をはじめとして、Ⅱ区においても複数検出されている。ただしこれらは同時期のものではなく、1号遺構は検出層位ならびに出土遺物からもっとも古い段階に位置付けられる点にも注意が必要である。

また本遺構の存在は、Ⅱ区西南端部にも古代の製塩活動が及んでいたことを示しており、おそらく隣の宅地にも古代～中世の製塩に関連する遺構群が展開していたことは想像に難くない。

（4） 21トレンチの成果

21トレンチは、Ⅱ区南端部の基盤地形を解明するために設定した。調査では可能な限り深く掘削することで、岩盤ないし基盤地形の状況を把握した。遺物量は多くないが、21トレンチの調査によって、Ⅱ区南端部の地形環境を復元するための基礎的な所見が得られた。

Ⅱ区は単純に浜堤上の遺跡と捉えることはできず、第4章第Ⅰ節で述べたように、浜堤、後背湿地状低地、元見山から続く埋没丘陵、花崗岩風化層が重なり合っている。21トレンチで得られた所見は、この理解を補強するものである。特に、南端部で岩盤層の上面の標高を測定できたことは、Ⅱ区の形成過程を考える手がかりとなる。

以上のように、第14次調査は補足的な確認調査であった。しかし各トレンチの調査所見は、Ⅱ区の範囲、層位、遺構分布、堆積環境、基盤地形を理解するための判断材料となった。19トレンチのシルト質堆積層、20トレンチ1号遺構、21トレンチの基盤地形などは、それぞれ異なる角度から遺跡の形成過程と空間利用を示している。

3. Ⅱ区の地形・層位と時期的変遷

(1) 地形環境と基本層序

宮ノ浦遺跡Ⅱ区は、宮ノ浦海岸の東側浜堤を中心に形成された遺跡である。ただしその地形は単純ではない。浜堤の背後には、後背湿地状の低地が広がっていたことが示唆されている。19トレンチで検出されたシルト質堆積層は、その根拠の一つである。また、元見山から西へ続く埋没丘陵も想定される。下位には花崗岩風化層や風化礫層があり、その上に各時期の活動面が重なる。

Ⅱ区の基本層序は、大きくⅡ層、Ⅲ層、Ⅳ層に整理できる。Ⅱ層は、古代から中世の活動に関わる層である。整地や盛土を伴い、遺構や遺物を多く含む。Ⅲ層は、主に古墳時代前期の活動に関わる層である。脚台式製塩土器が出土している。Ⅳ層は縄文時代の層で、特にⅣ-2層は縄文時代草創期から早期の活動を考えるうえで重要となる包含層である。

この層序は、単に古い層から新しい層へ積み重なったものではない。各層は、地形環境の変化と人間活動の内容を反映している。Ⅳ層では、海成層ではない堆積の上に縄文時代の活動が認められる。Ⅲ層では、浜堤上あるいは後浜での製塩活動が展開する。Ⅱ層では、大きく二度にわたる整地を伴う古代から中世の利用がみられる。

(2) 時期的変遷の概観

Ⅱ区の利用は、縄文時代草創期にさかのぼる。Ⅳ層からは、縄文土器、打製石鏃、剥片などが出土している。これらの資料は、佐島における最古段階の人間活動を復元するうえで欠かせない。弥生時代の痕跡はほとんどみられず、古墳時代前期には、Ⅲ層を中心として製塩活動が確認される。脚台式製塩土器やⅠ区で検出された製塩炉の存在から、宮ノ浦遺跡が佐島における土器製塩の中心的な場であったことがうかがえる。またⅠ区N15グリッドで出土した土製羽口、鍛冶滓・鍛造剥片は、愛媛県下では最古級の古墳時代前期の鍛冶関連資料として位置づけられる。

古代には、土師質土器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、吉備型土師器、瓦器も出土している。さらに焼塩土器がまとまって出土した。これらは、宮ノ浦遺跡Ⅱ区が塩生産に関わる場であっただけでなく、広域的な流通や接触の中に置かれていたことを示している。古代末から中世に

3. II区の地形・層位と時期的変遷

かけては、整地・盛土によって平場が形成され、製塩に伴う活動のみならず、飲食を伴う集まりや埋葬行為が重なって確認されている。

(笹田朋孝)

4. 宮ノ浦遺跡出土縄文土器の評価

宮ノ浦遺跡における最下層の包含層であり、縄文時代草創期の遺物を含むⅣ－2層は第14次の発掘調査においても調査が及び、土器、打製石鏃、剥片が出土した。土器は過去の発掘品と同じく小片であるが、その器表に微隆起線に類する文様を残す土器片などもあり、今回もその型式や編年の評価が困難であった。

さて、宮ノ浦遺跡では、2019年8月に実施した第9次調査において初めてⅣ－2層の発掘において、縄文早期初頭の土器を確認した。その後、当該包含層の形成過程や出土する遺物の所属時期を解明するために精査を続け、第13次調査においてⅣ－2層上面で撚糸文土器、上層で薄手の無文土器、下層で隆帯文土器、刺突文土器が出土することを確認した。その成果については、『宮ノ浦遺跡Ⅷ－第13次発掘調査報告－』で報告した後、2024年12月14日に開催した愛媛大学考古学研究室第20回シンポジウム『瀬戸内海の形成と縄文時代のはじまり』や2025年6月14日に『西部瀬戸内と海－海に生き、海を繋ぎ、海を越える人々－』をテーマとして開いた第11回瀬戸内海考古学研究会大会でも披露した。

さらにこれらの遺物を直接手にして観察いただいた複数の研究者からさまざまな意見を頂戴した。無文土器に関しては、愛媛県久万高原町上黒岩遺跡出土土器との対比をすべきという意見があったものの、撚糸文、隆帯文、刺突文土器については、まず近隣地域では類例を確認することが困難であるという指摘が少なくない。隆帯文や刺突文土器については、第13次報告書で論及した大分県佐伯市森の木遺跡出土土器との比較は妥当という評価を得た。しかしながら森の木遺跡は隆帯文土器分布圏の周縁に位置しており、その周縁の隆帯文土器よりも中心域の隆帯文土器との比較が可能なのではないかという指摘もあった。さらには撚糸文土器と報告された土器の中には多縄文土器があるという、もともと考えもつかなかった評価も与えていただいた。以上のように、宮ノ浦遺跡のⅣ－2層出土縄文土器には再検討の必要が生じてきた。いずれの資料も小片であるために検討や分析の方法が限られているものの、今後も引き続き関心を維持し、探求していきたい。

(村上恭通)

5. 古墳時代前期以降の諸活動

(1) 古墳時代前期の製塩活動と鍛冶関連資料

古墳時代前期には、宮ノ浦遺跡で製塩活動が本格化する。脚台式製塩土器が多数出土し、製塩炉も検出されている。これらの成果から、宮ノ浦遺跡は佐島における土器製塩の中核的な場であった

と考えられる。

この時期の活動は、製塩だけに限られない。Ⅰ区N15グリッドで出土した鍛冶滓・鍛造剥片は、古墳時代前期の鍛冶関連資料として位置づけられる。製塩を行う海浜部で、鉄器の維持や加工に関わる行為が行われていた。塩生産と鉄器生産は別々の技術であるが、その双方が宮ノ浦の海浜部で見られる点は、古墳時代前期の宮ノ浦遺跡を評価する際に注目される。

また佐島では、文四郎古墳も同時期の遺跡としてあげることができる。宮ノ浦の海浜部で生産活動に従事していた人々と文四郎古墳の被葬者が無関係であるとは考え難く、島内社会の構造を検討する際の比較対象となる。一方で古墳時代中期の遺物はほとんど見つかっておらず、後期の遺物もⅠ区29トレンチでまとまって出土する程度である。

（２） 古代の焼塩生産と広域流通

古代になると、宮ノ浦遺跡では焼塩土器がまとまって出土する。これは、古墳時代前期の脚台式製塩土器とは異なる形で、塩に関わる活動が再度現れたことになる。製塩の技術や工程は変化したと想定されるが、宮ノ浦の海浜部が塩生産と結びつく場所であり続けた点は注目される。

古代の宮ノ浦遺跡を考えるうえでは、土器・陶磁器の内容も見逃せない。緑釉陶器や灰釉陶器は、Ⅱ区が在地的な海浜集落にとどまらず、畿内、東海、近江などを含む広域的な流通や接触の中に置かれていたことを物語る遺物群である。ただし、硯や帯飾りなどの官衙的な性格を強く有する遺物は出土していないことから、官衙的施設の存在を想定することはできない。

また、これらの施釉陶器には完形品が少ないことにも注意が必要である。緑釉陶器や灰釉陶器が主に使用された場所は、これまで発掘した地点とは異なっていたとみられる。その場合は、新規の発掘調査によって、この時期の遺構や遺物が見つかり、古代の宮ノ浦遺跡の具体的な性格が解明されることが期待される。

焼塩土器と緑釉陶器・灰釉陶器をあわせてみると、古代のⅡ区には二つの側面が認められる。一つは、塩に関わる生産の場としての性格である。もう一つは、広域流通品が流入し、その一部が廃棄された場としての性格である。

（３） 古代末～中世の整地・製塩関連遺構・饗応痕跡

古代末から中世にかけて、Ⅱ区では整地や盛土を伴う活動面が形成される。鹹水溜めとみられる遺構、粘土貼り遺構、礫を伴う遺構などが検出されている。これらは海浜部における生産活動の実態に迫るための手がかりとなる。

特に、製塩関連遺構は4トレンチや20トレンチに限られるものではない。5トレンチでは煎熬工程との関連が想定されるカマド状遺構が検出され、その西端付近では粘土を貼った土坑の断面も観察されている。また、10・14・15・16トレンチでは粘土の面的な広がりや土手状の高まり、くぼみ状の痕跡が確認されており、槽状遺構ないしその残存部を示す可能性がある。さらに、4トレンチ4号遺構のように硬化面や集石を伴う遺構もあり、Ⅱ区では採鹹・鹹水貯留・煎熬・作業場といっ

た複数の工程や作業空間が、地点を異にしながら展開していた可能性がある。

4トレンチ2号遺構では粘土を貼り付けた土坑が鹹水溜めとして利用されたと考えられており、その埋土に飲食を伴う集まりを想定させる遺物群が大量に廃棄されている。供膳具のまとまり、特に瓦器碗などの出土状況は、饗応的行為を考えるうえで重要である。和泉型瓦器碗や播磨系須恵器などは、飲食行為と広域的な接触をあわせて検討することを可能としている。

さらに、4トレンチ2号遺構では土器・陶磁器だけでなく、貝類をはじめとする自然遺物も採取されている。Ⅱ区ではフローテーションによって植物遺存体、脊椎動物遺存体、貝類などの自然遺物が採取されており、これらは飲食行為の具体像や海産資源利用を復元するうえで不可欠な検討材料である。したがって、4トレンチ2号遺構の廃棄状況は、供膳具のまとまりだけでなく、食料消費や海産資源利用を含む饗応的行為の痕跡として評価する必要がある。

20トレンチ1号遺構は、4トレンチの同種の遺構とは様相だけでなく時期も異なる。Ⅱ区の製塩関連遺構には、構造の違いと時間的な幅の双方が認められる。地点によって、構造、機能、利用の仕方に差があった可能性がある。この違いを整理することで、Ⅱ区の空間利用をより具体的に復元する見通しが得られる。

20トレンチ1号遺構が10世紀代に位置づけられるならば、Ⅱ区における槽状遺構の出現は、12世紀代の4トレンチ2号・3号遺構に先行することになる。また、5トレンチ3号遺構も10～11世紀代のカマド状遺構として位置づけられており、古代段階から採鹹・鹹水貯留・煎熬に関わる施設がⅡ区内に存在していたことが想定される。その後、12世紀代には4トレンチ周辺で槽状遺構や硬化面を伴う遺構が展開し、製塩関連施設の配置や規模、利用のあり方が変化したと考えられる。

中世初頭の土坑墓と人骨も、Ⅱ区の性格を考えるうえで見逃せない資料である。18トレンチでは、伸展葬の人骨が検出され、土師質土器杯と刀子が副葬されていた。これは、Ⅱ区が生産や飲食に関わる場であっただけでなく、中世初頭には死者を葬る場としても利用されたことを示す。ただし、現時点では墓域全体の広がりを把握できる段階にはない。

古代末から中世のⅡ区では、整地、製塩関連遺構、飲食を伴う行為、埋葬が同じ空間に重なる。これらを別々の現象として扱うだけでは、遺跡の性格を十分に説明できない。海浜部の限られた空間に、生産、流通、消費、饗応、埋葬が重層したとみる必要がある。特に、Ⅱ-3層上面に関わる10～11世紀代の遺構群と、Ⅱ-1層上面に関わる12世紀代の遺構群は、同じ製塩関連活動の単純な継続としてではなく、整地を伴う海浜利用の再編として理解する必要がある。

6. 製塩を軸とする多面的な海浜空間

第4章第Ⅱ節で示したように、Ⅱ区の製塩関連遺構は、構造、残存状況、時期、機能の点で一様ではない。20トレンチ1号遺構、4トレンチ2号・3号遺構、5トレンチ3号遺構、さらに10・14・15・16トレンチで確認された粘土の広がりや槽状遺構の残存部とみられる痕跡は、採鹹、鹹水貯留、煎熬、作業場などの工程が、地点を異にして展開していたことを示唆している。また、20ト

レンチ1号遺構が4トレンチの同種の遺構より古い段階に位置づけられるならば、Ⅱ区内の製塩関連遺構は時間的にも変化していたことになる。

さらに、Ⅱ区の性格は製塩だけでは説明できない。緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器碗、播磨系須恵器、滑石製石鍋片などは広域的な流通や消費を示し、供膳具や自然遺物は飲食を伴う集まりや饗応的行為を考える手がかりとなる。加えて中世人骨は、埋葬という行為がこの海浜空間に加わっていたことを示している。

宮ノ浦遺跡Ⅱ区は、製塩を軸としながら、生産、流通、消費、饗応、埋葬が重なった海浜空間であった。とくに古代末から中世にかけては、その性格が強く現れる。文献史料にみえる荘園支配と、発掘調査で確認された遺構・遺物を直ちに結びつけることはできない。しかし、Ⅱ区で確認された整地・盛土、製塩関連遺構、飲食を伴う遺物廃棄の時期を考えると、12世紀中葉という時期は注意される。

佐島は、保元3（1158）年の石清水八幡宮関係文書に、石清水八幡宮領としてみえる。この時期は、Ⅱ-1層に関わる造成やその上面に展開する遺構群の形成・廃絶時期と大きく隔たるものではない。もちろん、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の造成や製塩関連遺構を、ただちに石清水八幡宮領佐島の荘園経営に結びつけることはできない。しかし、12世紀中葉前後に、佐島東岸の宮ノ浦において、海浜部を整地し、製塩に関わる施設を再構築し、さらに飲食を伴う集まりが行われたとすれば、それは荘園の支配の成立ないし再編と連動した海浜空間の整備であった可能性がある。

一方で、佐島が保元3年以後にどのような実態をもって推移したのかについては、不明な点が多い。ただし、東寺百合文書の中には、鎌倉末期には「佐島弥三郎」という佐島の名を冠する在地領主とみられる人物が、東寺領弓削島荘をめぐる紛争に関わって登場しており、佐島が弓削島荘を含む周辺海域の荘園支配や在地勢力の動向と無関係でなかったことがうかがえる。13世紀以降、宮ノ浦遺跡の活動が次第に希薄化し、佐島島内の中心が東岸の宮ノ浦から北西岸の佐島港周辺へ移った可能性を考慮するならば、これは佐島そのものの単純な衰退というよりも、弓削島荘の展開や周辺海域の権益構造の変化のなかで、佐島内における宮ノ浦の位置づけが相対的に低下していく過程として理解できるかもしれない。

以上のように、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の古代末から中世にかけての成果は、単なる製塩遺跡の一事例にとどまらない。佐島東岸の海浜部において、生産、流通、消費、饗応、埋葬が重なり、それが石清水八幡宮領佐島や東寺領弓削島荘を含む中世瀬戸内海島嶼部の荘園支配・在地勢力の動向と接点をもつことを示唆できる点に、本遺跡の意義が認められる。

7. 宮ノ浦遺跡の意義と今後の継承

宮ノ浦遺跡Ⅱ区は、縄文時代草創期から早期、古墳時代前期、古代、古代末から中世にかけて利用された複合遺跡である。その利用は連続的ではない。時期ごとに、活動の内容は大きく変化した。縄文時代には、花崗岩風化層上に人間活動の痕跡が残された。古墳時代前期には、製塩と鍛冶関連

7. 宮ノ浦遺跡の意義と今後の継承

活動が確認される。古代には、焼塩生産と広域流通を示す遺物群が加わる。古代末から中世には、整地、製塩関連遺構、饗応、埋葬が重なって現れる。

このような重層性は、Ⅱ区の地形と深く関わっている。Ⅱ区では、浜堤上の活動面だけでなく、シルト質堆積層が示す後背湿地状低地、元見山から続く埋没丘陵、花崗岩風化層が重なっている。こうした微地形の組み合わせが、時期ごとに異なる利用を可能にした。Ⅱ区は、単に海に近い場所であっただけではない。海浜部の地形を利用しながら、人々が生産し、移動し、集まり、死者を葬った場所であった。

宮ノ浦遺跡の学術的意義は、瀬戸内海島嶼部の海浜利用を長期的に検討できる点にある。特に、製塩活動の変化を、縄文時代以来の地形利用、古代・中世の流通、荘園経営との関係の中で検討できる点に本遺跡の特色がある。宮ノ浦遺跡は、佐島の一遺跡としてだけでなく、芸予諸島や瀬戸内海地域の歴史を考えるための基礎資料でもある。なかでも、10～12世紀の広域流通品や製塩関連遺構を、石清水八幡宮領佐島の成立過程や、対岸の東寺領弓削島荘との関係の中に位置づけて検討できる点は、宮ノ浦遺跡の大きな特徴である。

一方で、宮ノ浦遺跡の価値は学術面だけに限られない。第4章第Ⅲ節で述べられているように、本遺跡は地域資源としても高い価値をもつ。対岸の弓削島には、「塩の荘園」として知られる弓削島荘遺跡がある。宮ノ浦遺跡の調査成果は、弓削島荘遺跡や佐島の景観と結びつけることで、上島町の歴史文化をより具体的に伝える材料となる。

今後は、発掘調査の成果を記録として残すだけでなく、地域の中で活用していく必要がある。学校教育や生涯学習、展示、現地説明、周遊ルートの整備など、活用の方法は多様である。ただし、その前提となるのは、遺跡の価値を正確に伝えることである。宮ノ浦遺跡を製塩遺跡として紹介することは欠かせない。しかし、それだけでは本遺跡の特徴は十分に伝わらない。縄文時代から中世にいたる重層的な利用と、製塩、流通、飲食、埋葬が重なる海浜空間としての性格を示すことが重要である。

第14次調査によって、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の調査は一つの区切りを迎えた。しかし、調査によって得られた知見の意義は、今後の整理、研究、活用の中でさらに明らかになる。本書が、宮ノ浦遺跡の学術的理解を深めるとともに、佐島と上島町の歴史文化を将来へ継承するための基礎となることを期待したい。

(笹田朋孝)

图 版



1. 宮ノ浦遺跡遠景（北から）



2. 調査前全景（東から）

図版 2



1. 13トレンチ全景（東から）



2. 13トレンチⅡ-2層礫群（南から）



3. 13トレンチ東壁



4. 13トレンチ南壁



5. 13トレンチ西壁



6. 13トレンチ北壁



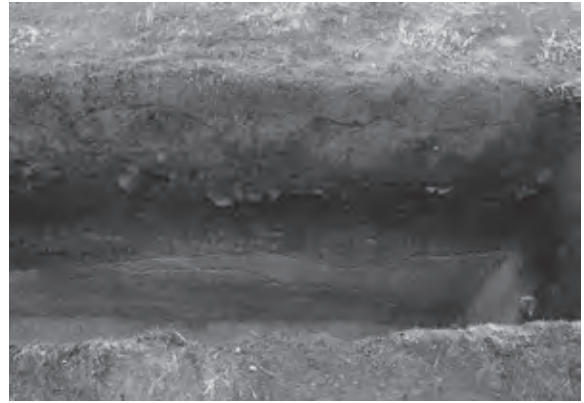
7. 13トレンチⅣ-1層土器出土状況（東から）



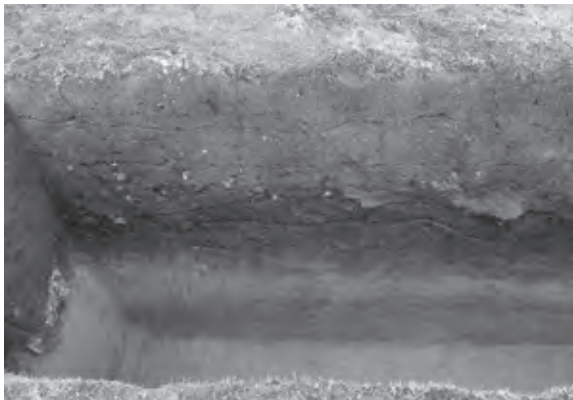
8. 13トレンチⅣ-2層炭化物検出状況（東から）



1. 19トレンチ西壁（南半分）



2. 19トレンチ西壁（北半分）



3. 19トレンチ東壁（北半分）



4. 19トレンチ東壁（南半分）



5. 19トレンチ北壁



6. 19トレンチ南壁

図版 4



1. 19トレンチⅡ層上面礫群（南東から）



2. 左の写真の一部（東から）



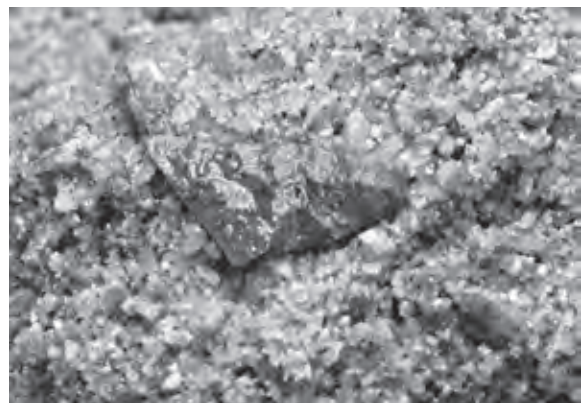
3. 19トレンチⅡ-2層出土鉄製品（南東から）



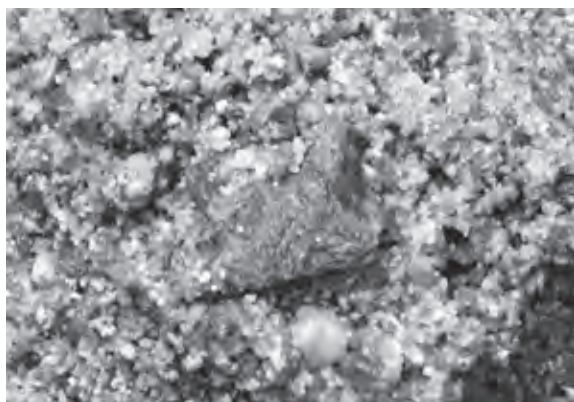
4. 19トレンチシルト層出土製塩土器（東から）



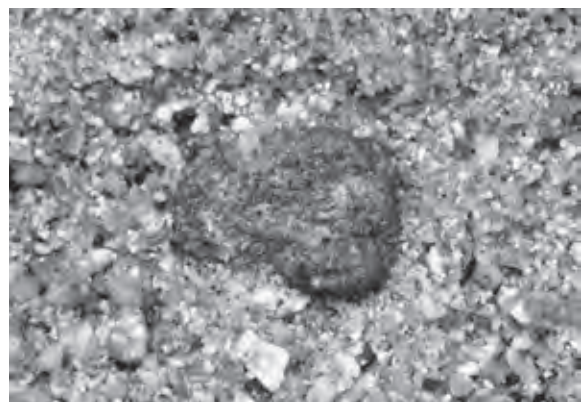
5. 19トレンチⅣ-2層出土石器（東から）



6. 5の写真のアップ①



7. 5の写真のアップ②



8. 19トレンチⅣ-2層出土土器（東から）



1. 20トレンチ西壁（南半分）



2. 20トレンチ西壁（北半分）



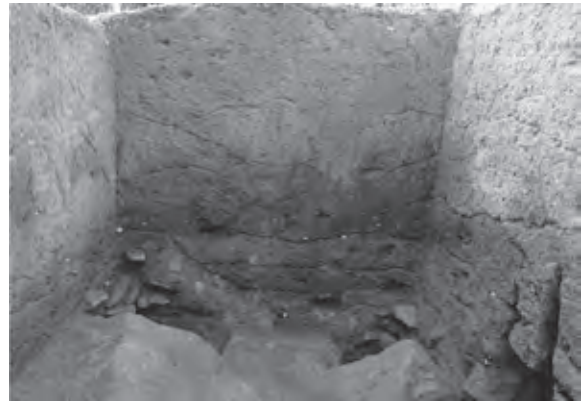
3. 20トレンチ東壁（北半分）



4. 20トレンチ東壁（南半分）



5. 20トレンチ北壁

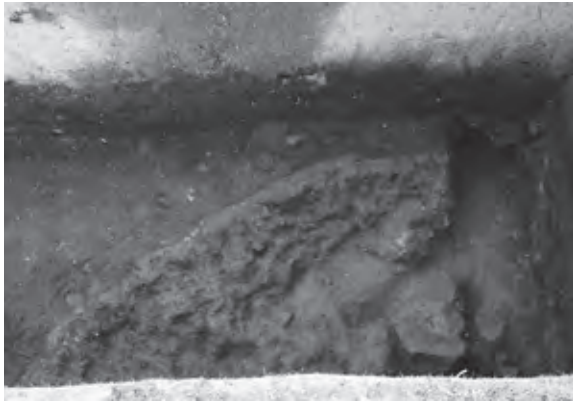


6. 20トレンチ南壁

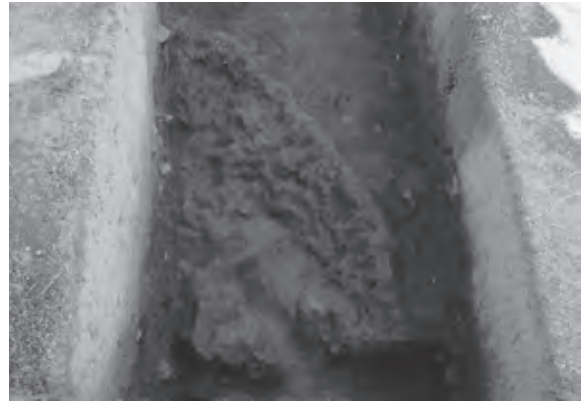


7. 20トレンチ南壁（一部）

図版 6



1. 20トレンチ 1号遺構（西から）



2. 20トレンチ 1号遺構（南から）



3. 21トレンチ東壁



4. 21トレンチ南壁



5. 21トレンチ西壁



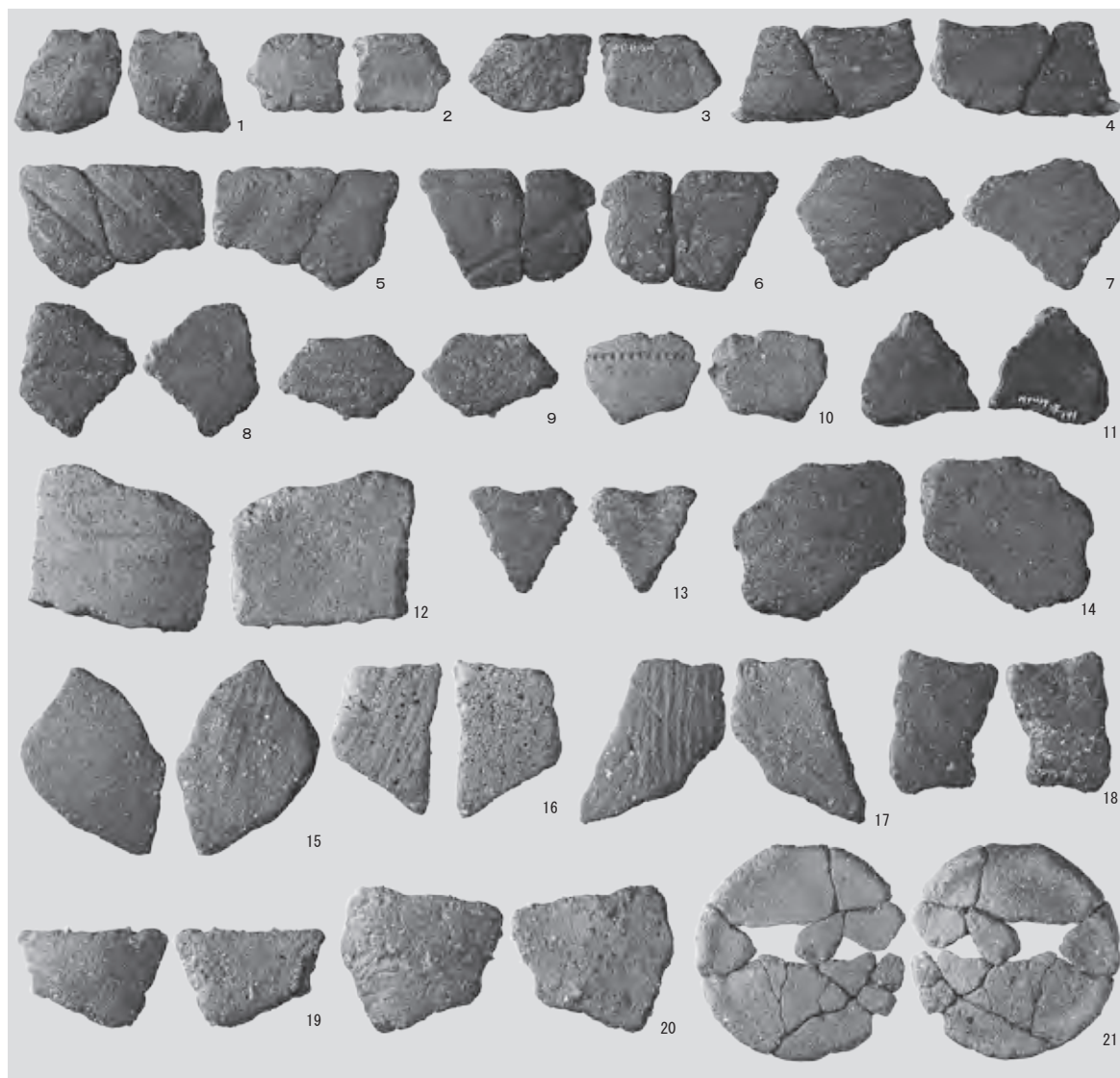
6. 21トレンチ北壁



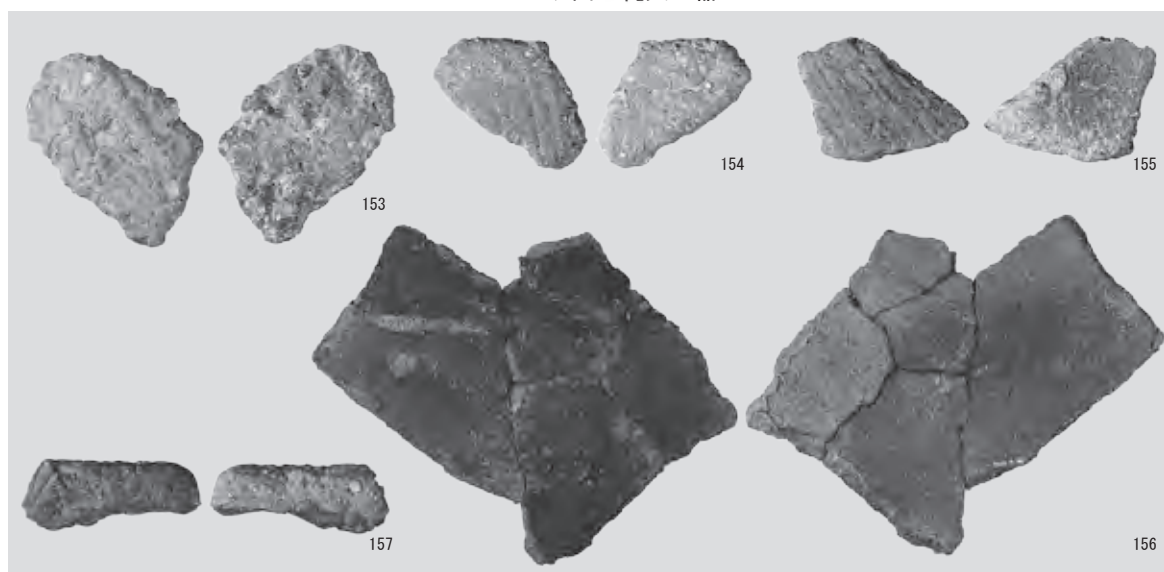
7. 21トレンチ出土縄文土器（西から）



8. 7の写真のアップ

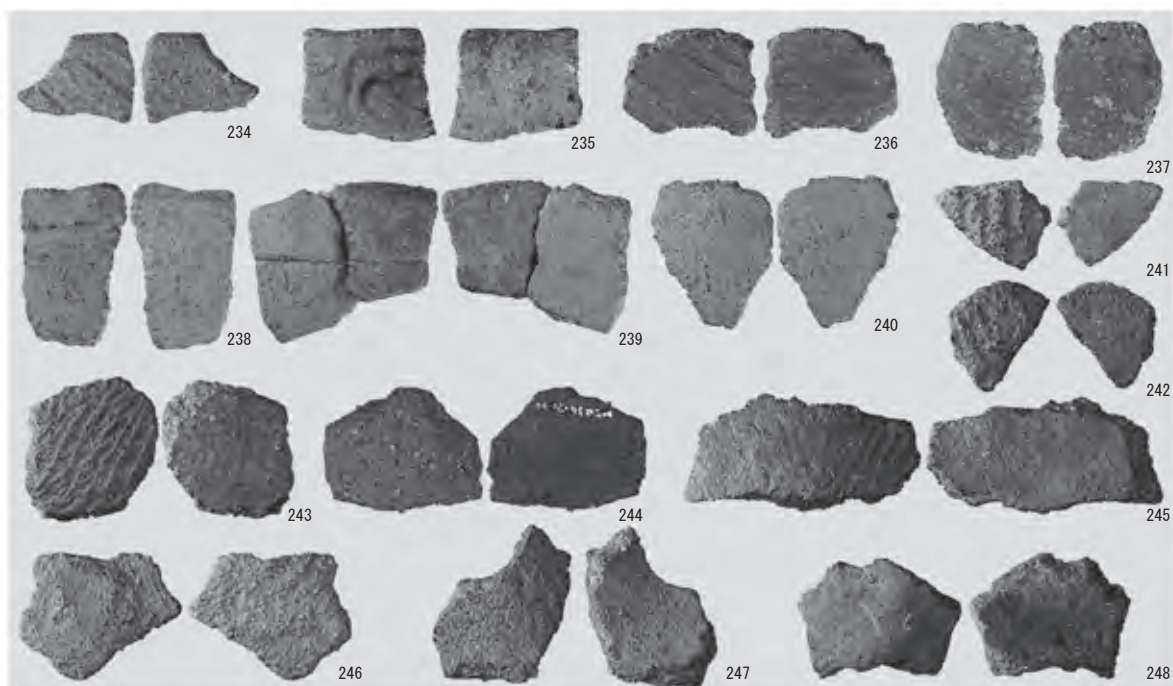


13トレンチ出土縄文土器

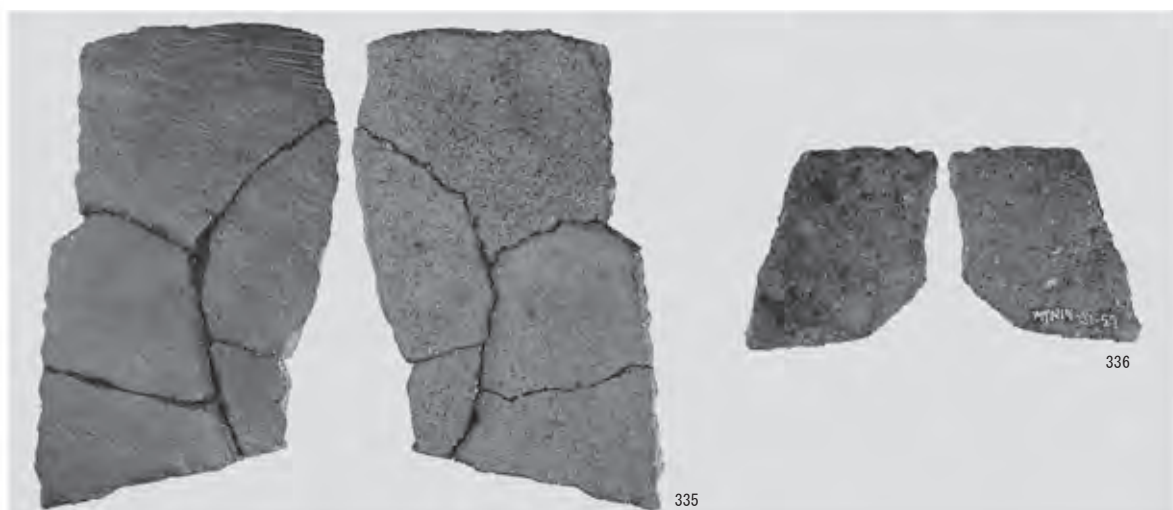


19トレンチ出土縄文土器

図版 8



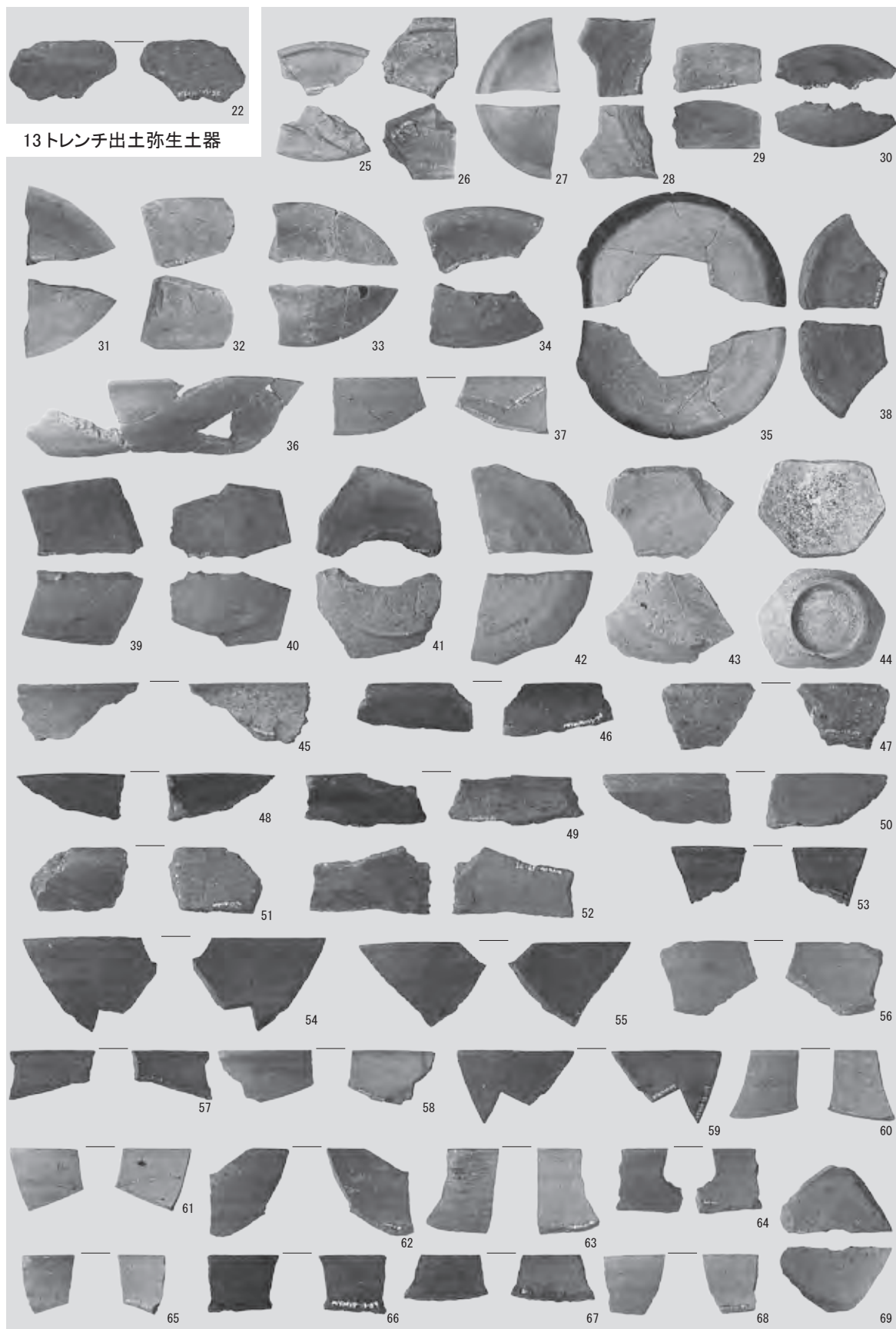
20 トレンチ出土縄文土器



21 トレンチ出土縄文土器



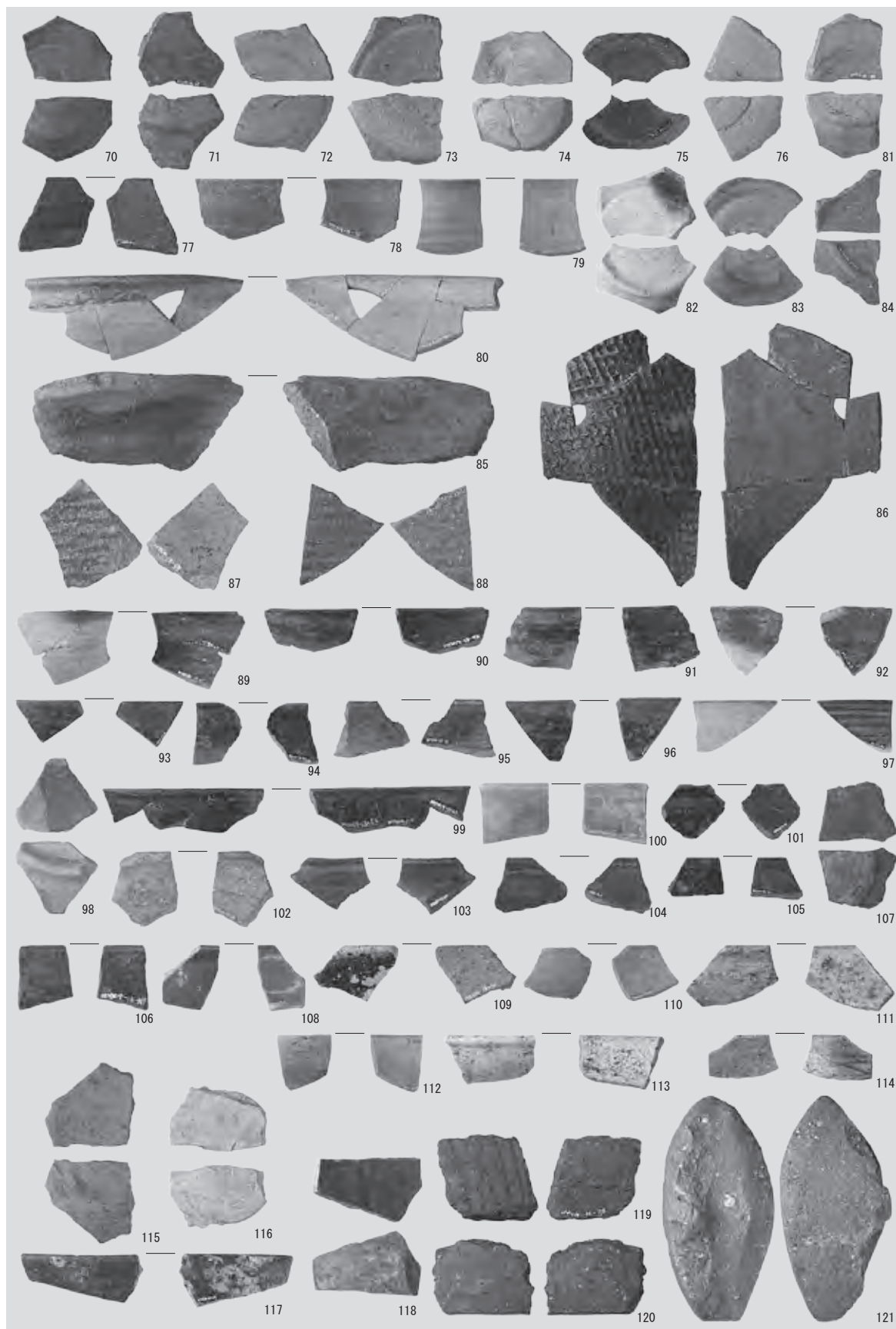
Ⅱ 区出土石器



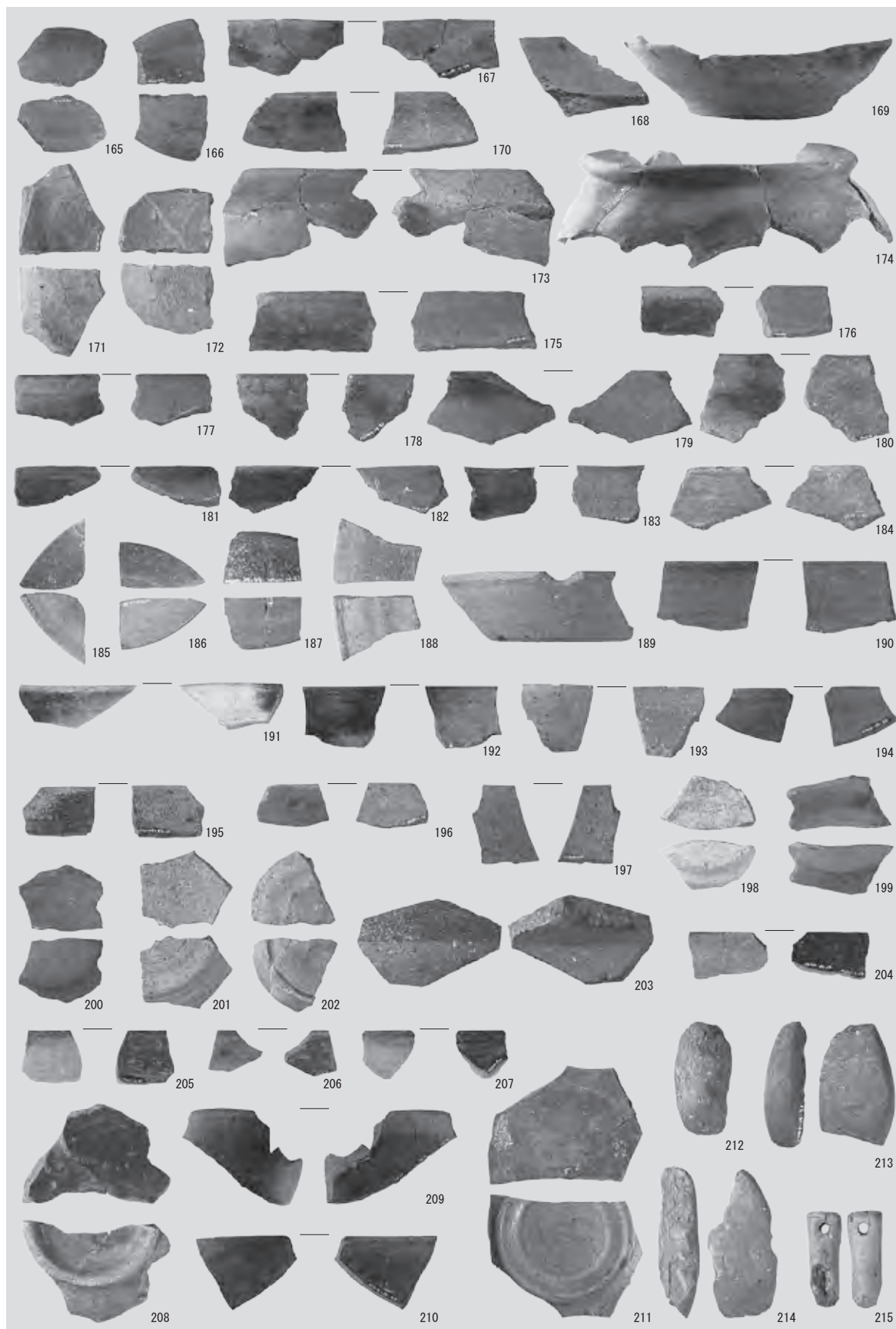
13トレンチ出土弥生土器

13トレンチ出土土器

図版 10

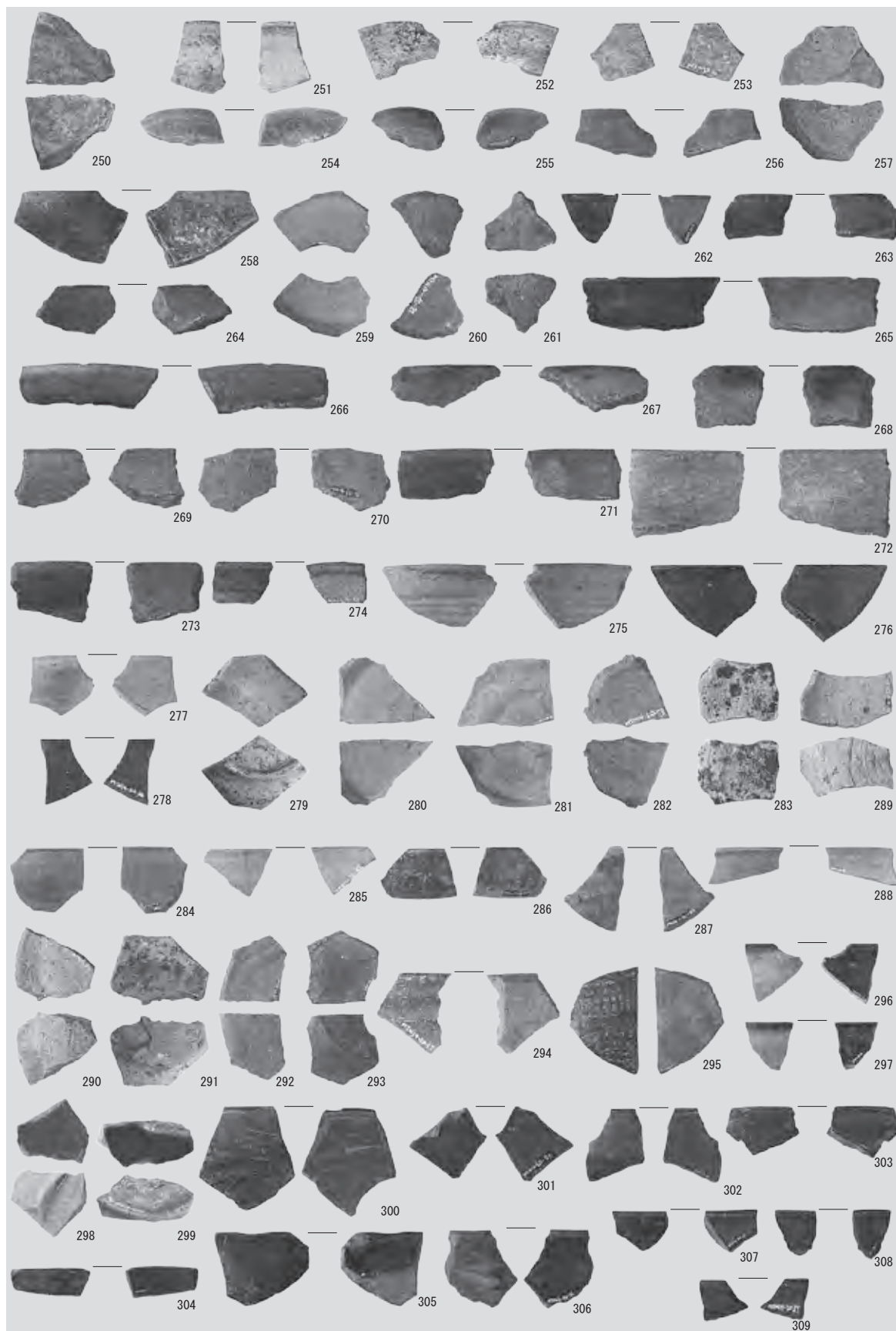


13 トレンチ出土土器・陶磁器・土製品

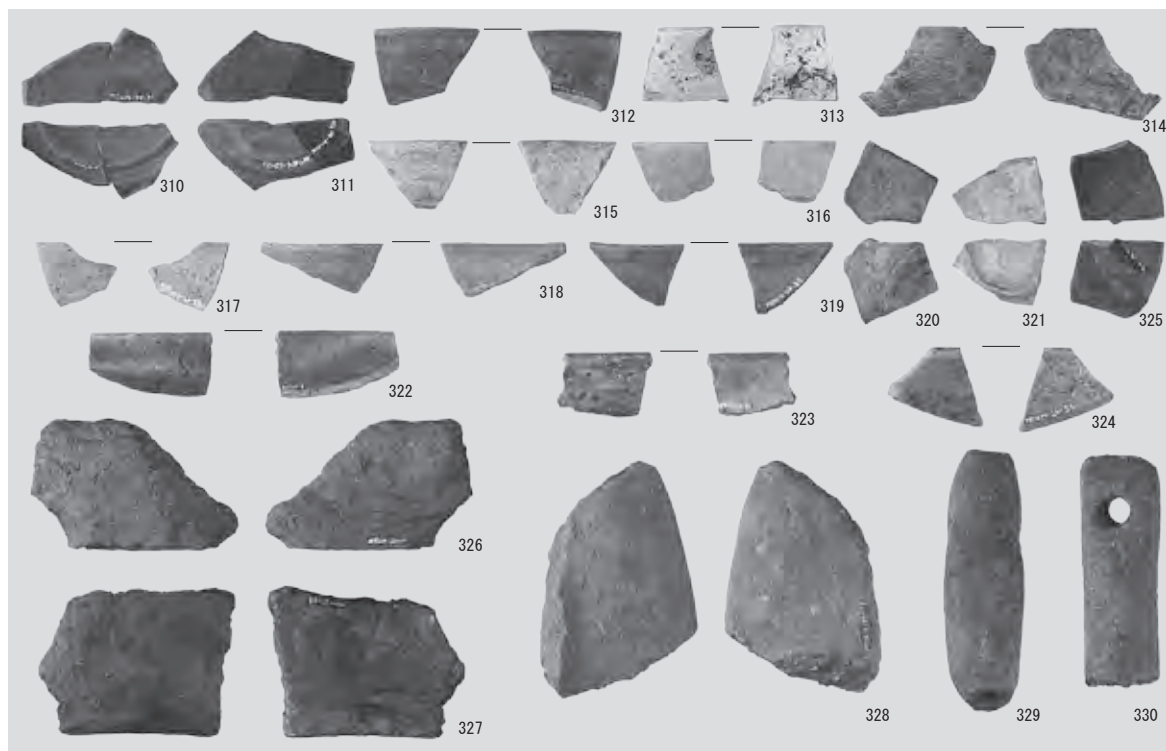


19 トレンチ出土土器・陶磁器・土製品

図版 12



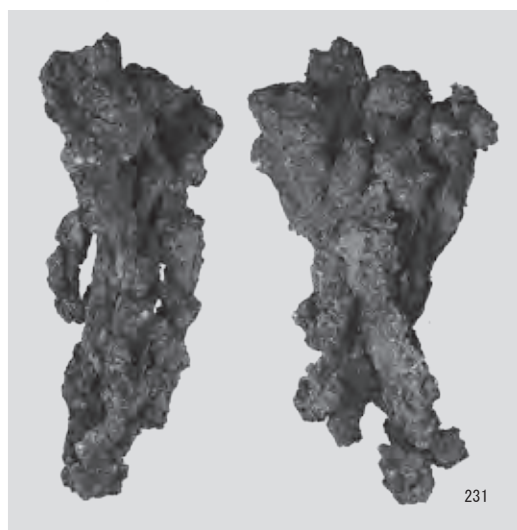
20 トレンチ出土土器



20トレンチ出土土器・陶磁器・土製品



13トレンチ出土石鍋



19トレンチ出土鉄製品

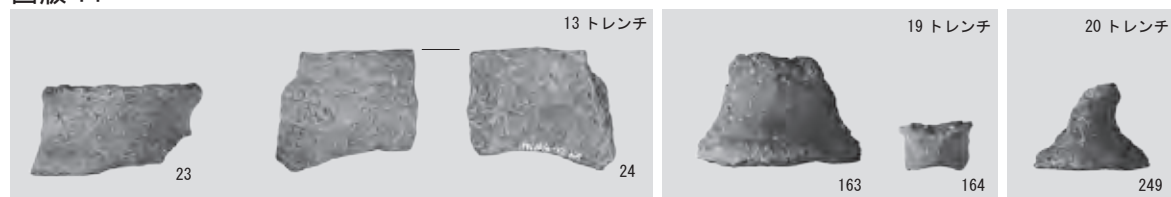


13トレンチ出土鉄製品

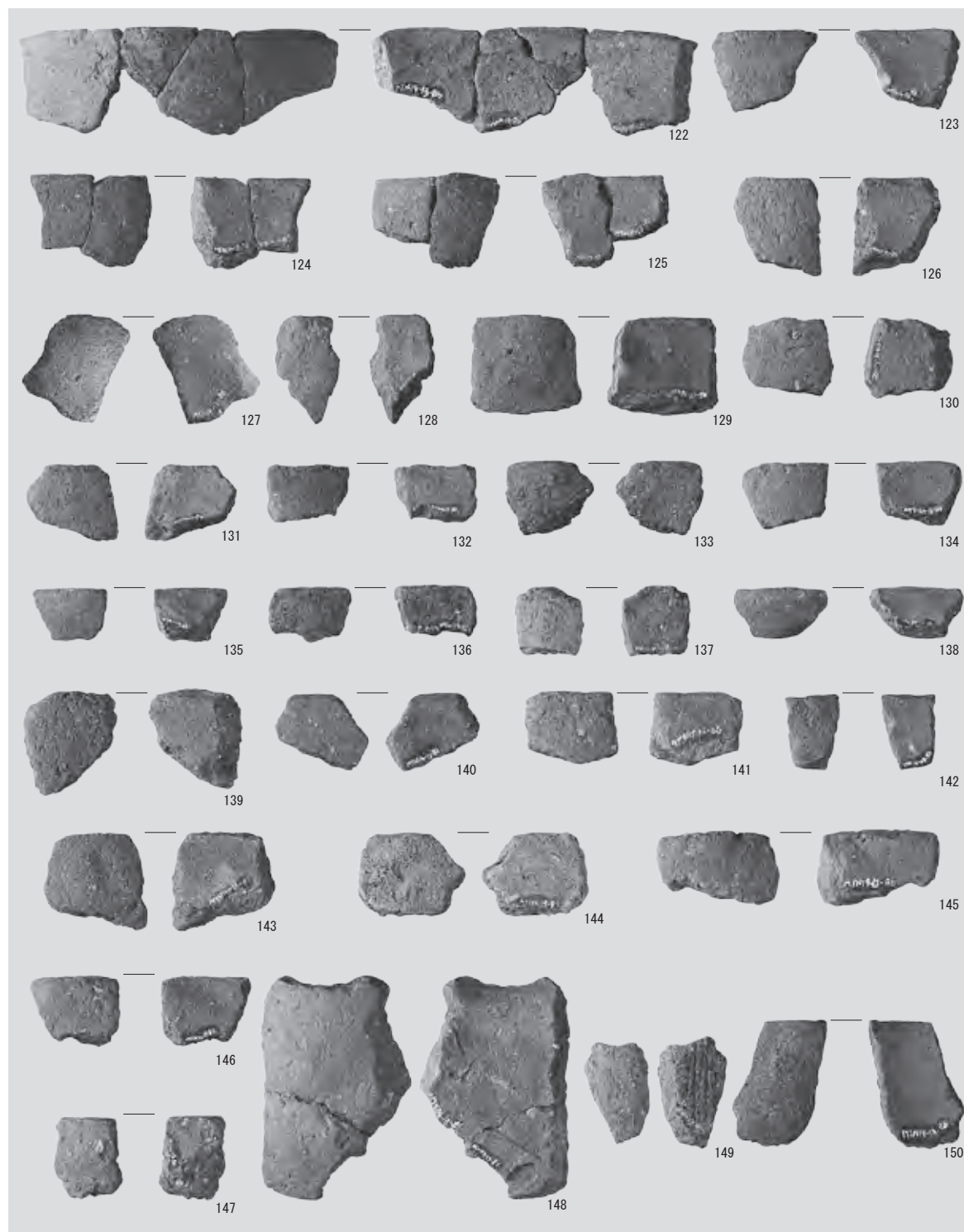


19トレンチ出土銅製品

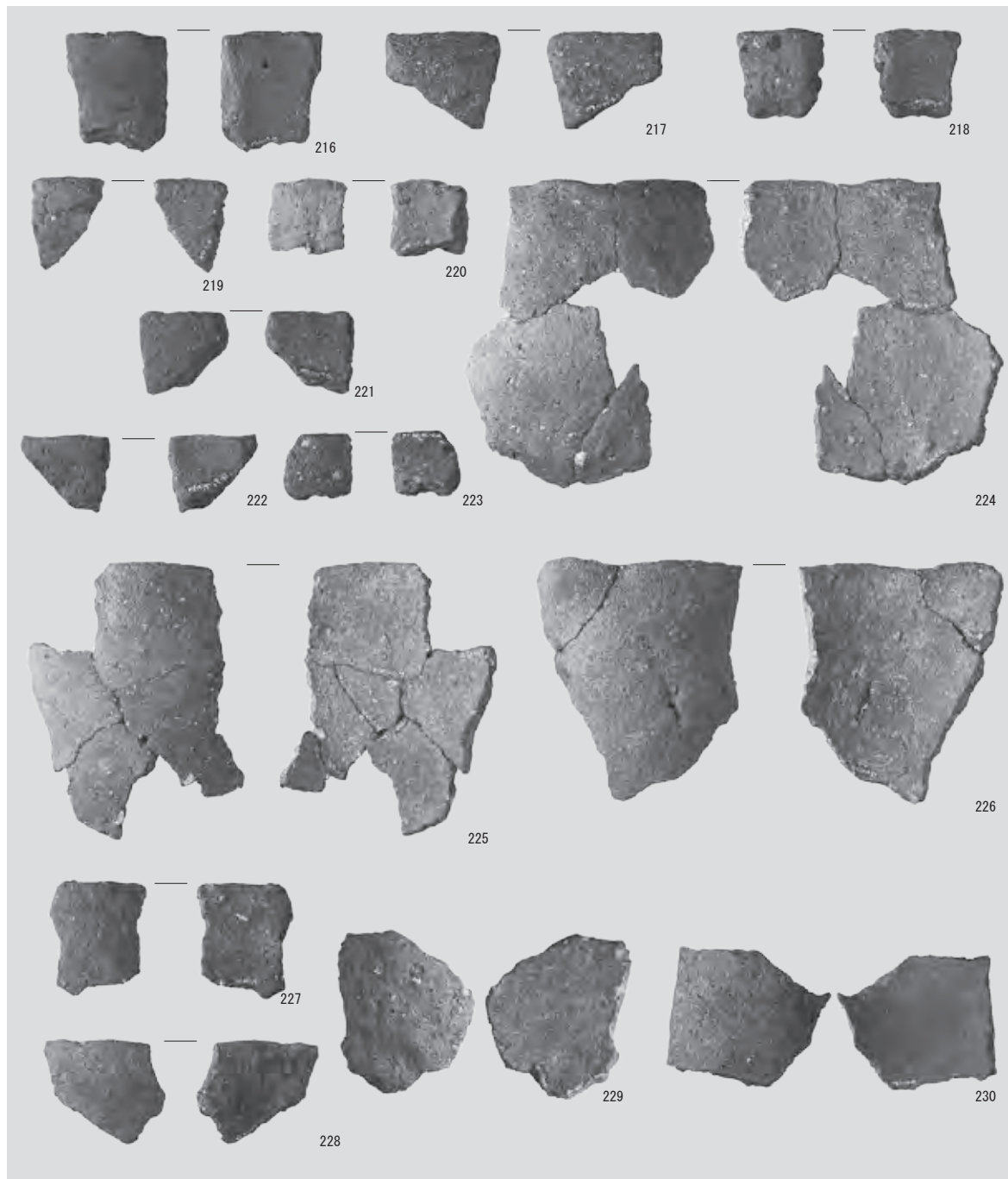
図版 14



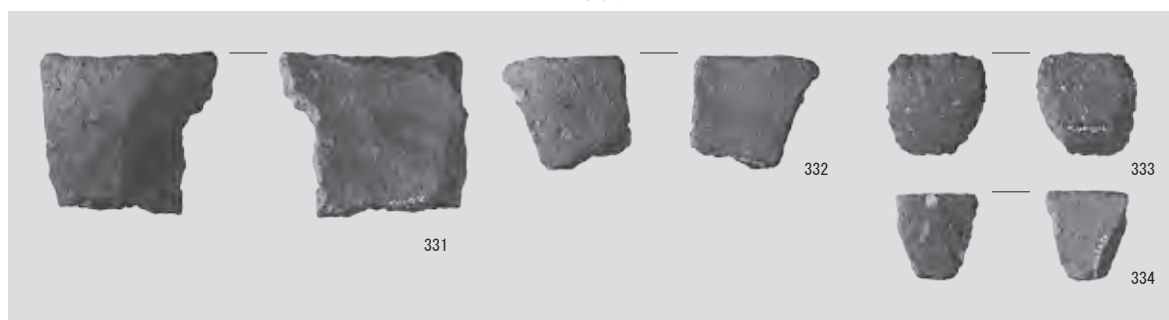
Ⅱ区出土製塩土器（古墳時代）



13トレンチ出土製塩土器（古代）



19 トレンチ出土製塩土器（古代）



20 トレンチ出土製塩土器（古代）

報告書抄録

ふりがな	えひめけんおちぐんかみじまちょう みやんないせき							
書 名	愛媛県越智郡上島町 宮ノ浦遺跡Ⅸ							
副 書 名	第14次発掘調査報告							
シリーズ名	上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	12							
編著者名	(編者)有馬啓介、益田千遥、福本佳織(著者)朝日岳斗、有馬、植田知也、江本晃季、笹田朋孝、伴井嘉正、福本、藤原碧生、ブズレン・サミ、益田、村上恭通							
編集機関	上島町教育委員会							
所 在 地	〒794－2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2070							
発行年月日	2026年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやんな いせき 宮ノ浦遺跡	えひめけん おちぐん 愛媛県越智郡 かみじまちょう 上島町 ゆげさしま 弓削佐島	38356		34° 14′ 43″	133° 11′ 32″	2024 0802～16	14㎡	保存目的調査
	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落 製塩 散布地	縄文時代 古墳時代 古代 中世		鹹水溜め 土坑	縄文土器、石鏃、弥生土器、製塩土器、古式土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、吉備型土師器、瓦器、石鍋、土錘、土製品、鉄製品、煙管、銭貨、自然遺物			20トレンチで鹹水溜めの機能が想定される遺構を検出した。
要約	Ⅱ区13・19・20・21トレンチで発掘調査を実施した。13トレンチでは、古墳時代ならびに古代の製塩土器の分布と縄文時代包含層の西方への広がりを確認するため再調査を行い、古代～中世の整地・造成に関わる可能性をもつ粘土塊・礫群や小ピットを検出した。19トレンチではシルト質堆積層を確認し、古墳時代以降の埋積と古代～中世の地形改変を考えるための資料を得た。20トレンチでは、古代の鹹水溜めの機能が想定される遺構を検出した。21トレンチでは旧地形の解明を目的として調査を行い、標高約0.3mの岩盤面を推定した。以上により、第14次調査では、Ⅱ区における遺構・遺物の分布状況に加え、旧地形と古代～中世の整地・造成を含む土地利用の様相がより明らかになった。							

愛媛県越智郡上島町
宮ノ浦遺跡Ⅸ
— 第14次発掘調査報告 —

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第12集)

2026年3月27日発行

編集・発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地
印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7-1-8
